巻頭図版第１　野条遺跡第10・12次、室橋遺跡第５次

(1)室橋遺跡遠景(北西から)

(2)野条遺跡遠景(北東から)

(3)滑石製分銅(野条遺跡)

# 1．野条遺跡第10・12次、室橋遺跡第５次発掘調査報告

## 1．はじめに

野条遺跡第10次調査、野条遺跡第12次調査・室橋遺跡第５次調査は、主要地方道亀岡園部線の改良事業に先立って、京都府南丹土木事務所の依頼を受けて実施した。野条遺跡第10次調査は、平成17年度事業として、平成17年10月24日～平成18年１月30日を調査期間とし、700㎡の調査を実施した。野条遺跡第12次調査および室橋遺跡第５次調査は、平成18年事業として実施したものである。調査期間は、野条遺跡第12次調査が平成18年７月28日～同９月26日、室橋遺跡第５次調査が平成18年９月11日～平成19年２月９日である。調査面積は、野条遺跡は570㎡であり、室橋遺跡は1,230㎡である。発掘調査は、野条遺跡第10次調査を、当調査研究センター調査第２課課長補佐兼調査第２係長奥村清一郎、同調査員高野陽子が担当し、野条遺跡第12次調査・室橋遺跡第５次調査を、調査第２課第２係長森正、同調査員高野陽子が担当した。本報告の執筆は高野陽子による。報告のうち、野条遺跡については、２か年にわたる調査を対象とするものであり、第10次調査では計画路線の東側を、また第12次調査では同路線の西側を調査しており、両調査を合わせて報告することとする。また、本文中における国土座標は、野条遺跡第10次・12次調査については周辺部調査の基準座標を用いたため日本測地系(旧座標)を使用し、室橋遺跡第５次調査では今後の調査の進展に備え、世界測地系(新座標)に変更した。調査に際しては、京都府土木建築部や南丹市教育委員会、京都府教育委員会のほか、地元の方々から多くのご指導・ご協力を得た。記して感謝したい。(注1) なお、今回の調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

## 2．周辺の遺跡

野条遺跡・室橋遺跡は、亀岡盆地北端の旧国の丹波国に含まれる南丹市八木町に所在する。亀岡盆地の中央を大堰川(桂川上流域)が貫流するが、両遺跡はその東岸にあり、周辺は西に筏森山(標高295m)、北に諸木山(標高496m)を配し、小山に囲まれた小盆地状を呈している。

大堰川東岸の周辺遺跡としては、後期旧石器時代のナイフ形石器が出土した亀岡市池上遺跡、縄文時代後期の土器を出土した亀岡市車塚遺跡、時塚遺跡などがある。室橋遺跡では縄文時代前期と推定される石鏃が出土しているが、八木町周辺では縄文時代の遺物の出土は初見である。

弥生時代に入ると、野条遺跡の南に接する池上遺跡で弥生時代中期の集落が展開し、周辺に墓域を伴う大規模集落であることが判明している。後期の集落は扇状地形を呈する北部の微高地や山麓部に移動するようであり、野条遺跡南部や諸畑遺跡で竪穴式住居跡が検出されている。

古墳時代には、中期から後期にかけて周辺部の開発が進み、新たに集落が形成され、諸畑遺跡

第１図　周辺の遺跡

1．室橋遺跡　2．野条遺跡　3．新庄城跡　4．新庄遺跡　5．船枝遺跡　6．清谷古墳群　7．畑中城跡　8．諸畑遺跡　9．八木田遺跡　10．日置遺跡　11．幡日佐神社　12．如城寺　13．野条城跡　14．池上院　15．筏森山古墳群　16．城谷口古墳群　17．池上遺跡　18．池上古里遺跡　19．形部城跡　20．多国山古墳群　21．杉北遺跡　22．観音寺遺跡　23．坊主塚古墳　24．池尻遺跡　25．池尻廃寺

では中期前半の竈付き住居を含む集落の存在が明らかとなった。また池上遺跡でも中期後半から後期にかけて大規模な集落が展開することが判明した。中期の大堰川東岸の首長墓は、鉄製甲冑などを出土した坊主塚古墳が知られるが、筏森山の南麓にも中期の中・小規模の方墳から構成される城谷口古墳群があり、後期に継続して山頂や山麓の各所に群集墳が築造される。

歴史時代には、盆地北部では亀岡市池尻で瓦積み基壇をもつ白鳳寺院の池尻廃寺が建立される。承安四(1174)年に成立した後白河院法華堂領の吉冨荘の絵図の写しとされる「丹波国吉冨庄絵図写」には、この池尻から屋賀にかけて「国八庁」とされる大形建物が描かれている。池尻・屋賀周辺は丹波国府の有力な推定地であり、池尻遺跡の近年の調査でも奈良時代の大形掘立柱建物跡群の存在が明らかとなった。「丹波国吉冨庄絵図写」には、筏森山東麓に天台密教の法流谷流の祖皇慶(977～1049)の開院とされる地上寺(現地上院)があるが、現在の地上院から池上遺跡や野条・室橋遺跡にかけての描写では数棟の家屋や耕作地の様子が描かれている。この地域には平安時代の伝承が多く、室橋遺跡の周辺には新庄用水を開削したと伝えられる文覚上人(1139～1203)の名に由来する文覚池やその見水場とされる室橋堂があり、野条遺跡北部では平安時代末期の女性武将巴御前の墓とされる巴塚がある。また、諸木山の南麓には平安時代に氷室が設置されたという式内社幡比佐神社が鎮座している。

## ３．野条遺跡第10次・第12次の調査

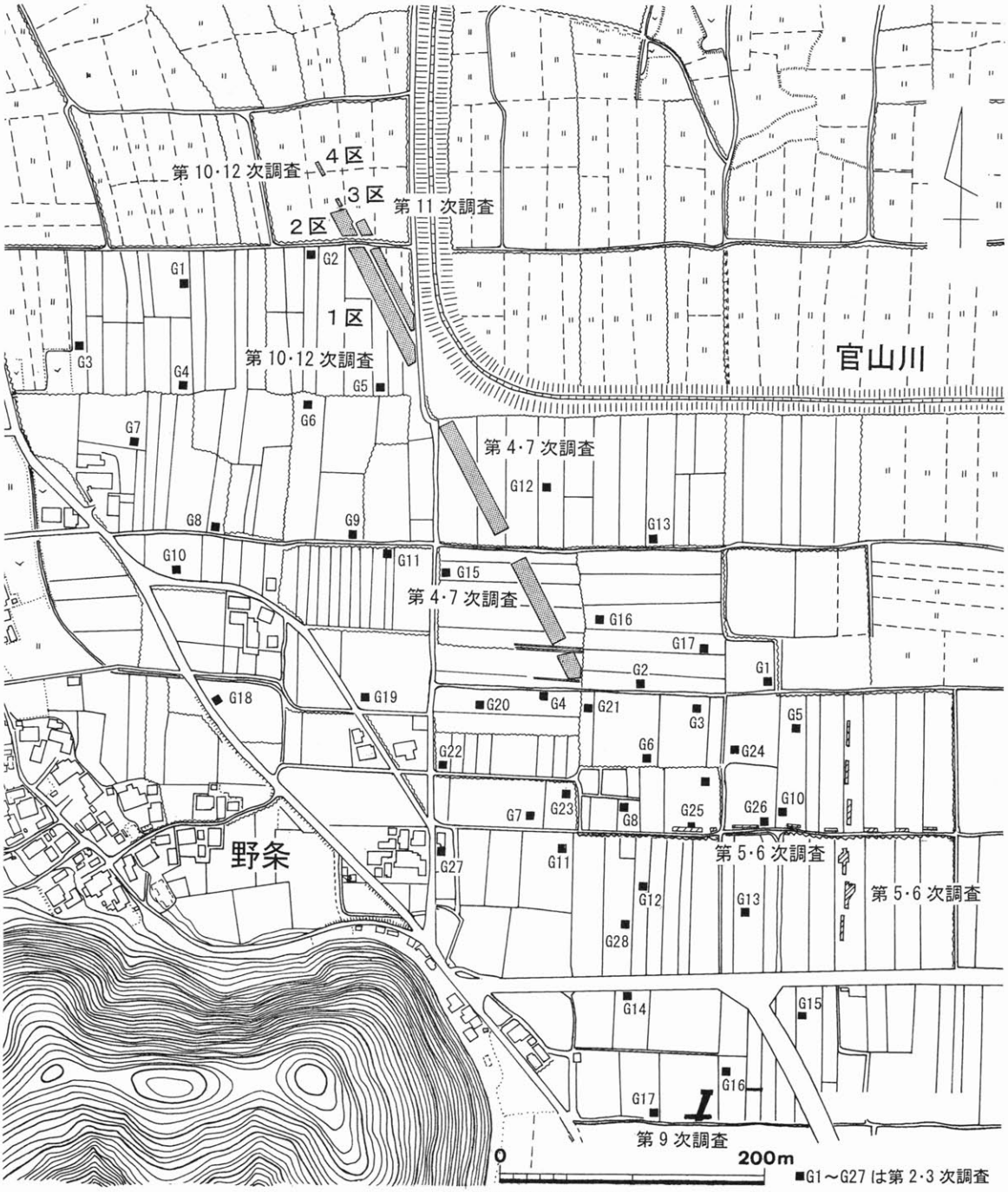
### (１)既往の調査

野条遺跡では、今回の調査まで12次の調査次数を数える。第２・３次調査では、八木町教育委員会(現南丹市教育委員会)が範囲確認のために、２ｍ四方のグリッドを広範囲に設定し、遺跡推定範囲の北西部で飛鳥時代の溝、南部を中心に平安～鎌倉時代と推定される柱穴・土坑・溝など

付表１　野条遺跡の調査次数一覧

| 調査名 | 調査主体 | 調査年度 | 面積 | 主要遺構 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 野条遺跡第１次 | 八木町教育委員会 | 平成７年度 | 12㎡ | ― | 分布調査・試掘 |
| 野条遺跡第２次 | 八木町教育委員会 | 平成10年度 | 112㎡ | 柱穴・土坑・溝（古代～中世） | 試掘 |
| 野条遺跡第３次 | 八木町教育委員会 | 平成11年度 | 68㎡ | 溝（奈良） | 試掘 |
| 野条遺跡第４次 | 当センター | 平成14年度 | 450㎡ | 掘立柱建物跡（室町） | 本調査 |
| 野条遺跡第５次 | 八木町教育委員会 | 平成14年度 | 308㎡ | 竪穴式住居跡（弥生後期中葉） | 本調査 |
| 野条遺跡第６次 | 八木町教育委員会 | 平成14年度 | 185㎡ | 柱穴・溝 | 試掘・本調査 |
| 野条遺跡第７次 | 当センター | 平成15年度 | 1200㎡ | 焼失竪穴式住居跡（弥生後期後葉） | 本調査 |
| 野条遺跡第８次 | 八木町教育委員会 | 平成15年度 | 80㎡ | 溝・土坑 | 試掘 |
| 野条遺跡第９次 | 当センター | 平成15年度 | 130㎡ | 溝（平安後期） | 本調査 |
| 野条遺跡第10次 | 当センター | 平成17年度 | 700㎡ | 掘立柱建物跡・井戸・溝（平安） | 本調査 |
| 野条遺跡第11次 | 当センター | 平成18年度 | 600㎡ | 柱穴・溝（奈良・平安） | 本調査 |
| 野条遺跡第12次 | 当センター | 平成18年度 | 570㎡ | 掘立柱建物跡・溝（奈良・平安） | 本調査 |

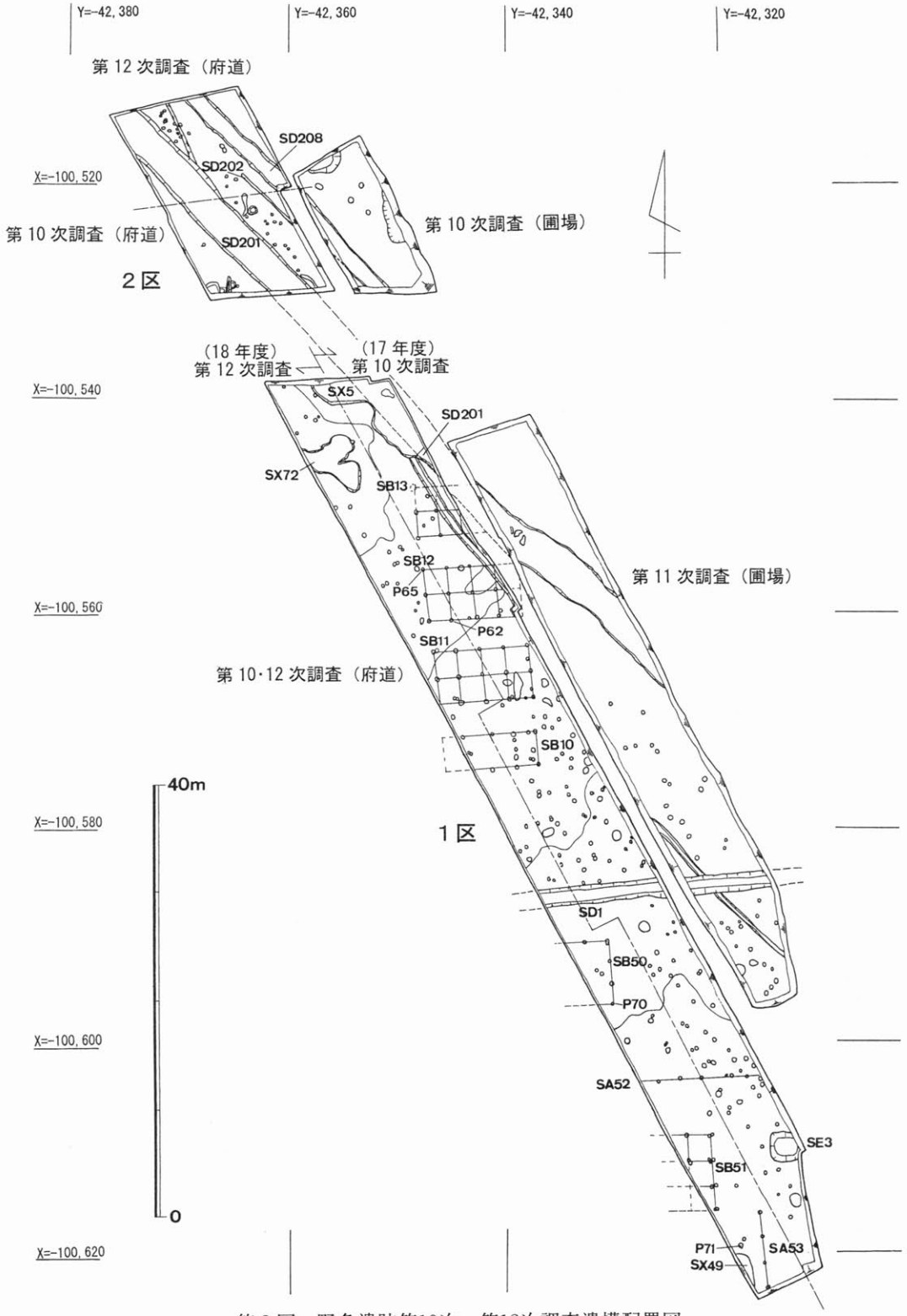
を検出した。南西部を対象にした同教育委員会による道路建設に伴う第５次調査では、弥生時代後期中葉の方形プランをもつ竪穴式住居跡など２棟の住居跡を検出した。また同じ南西部で実施された第６次調査でも一部に弥生時代の溝を検出し、周辺に弥生時代後期を中心とする遺構の広がりが想定されている。遺跡推定範囲の中央北寄りでは当センターによる第４・７次調査が実施され、弥生時代後期後葉の焼失住居や室町時代の総柱の掘立柱建物跡などを検出した。第９次調査では、遺跡の南端を対象とし、平安時代中期の灌漑用水と考えられる溝の一部を検出した。第11次調査は、今回の第10次・12次調査地の東側を対象としたもので、奈良時代と平安時代中期の溝を検出した。いずれも今回の調査地で検出した溝と連続することが判明している。



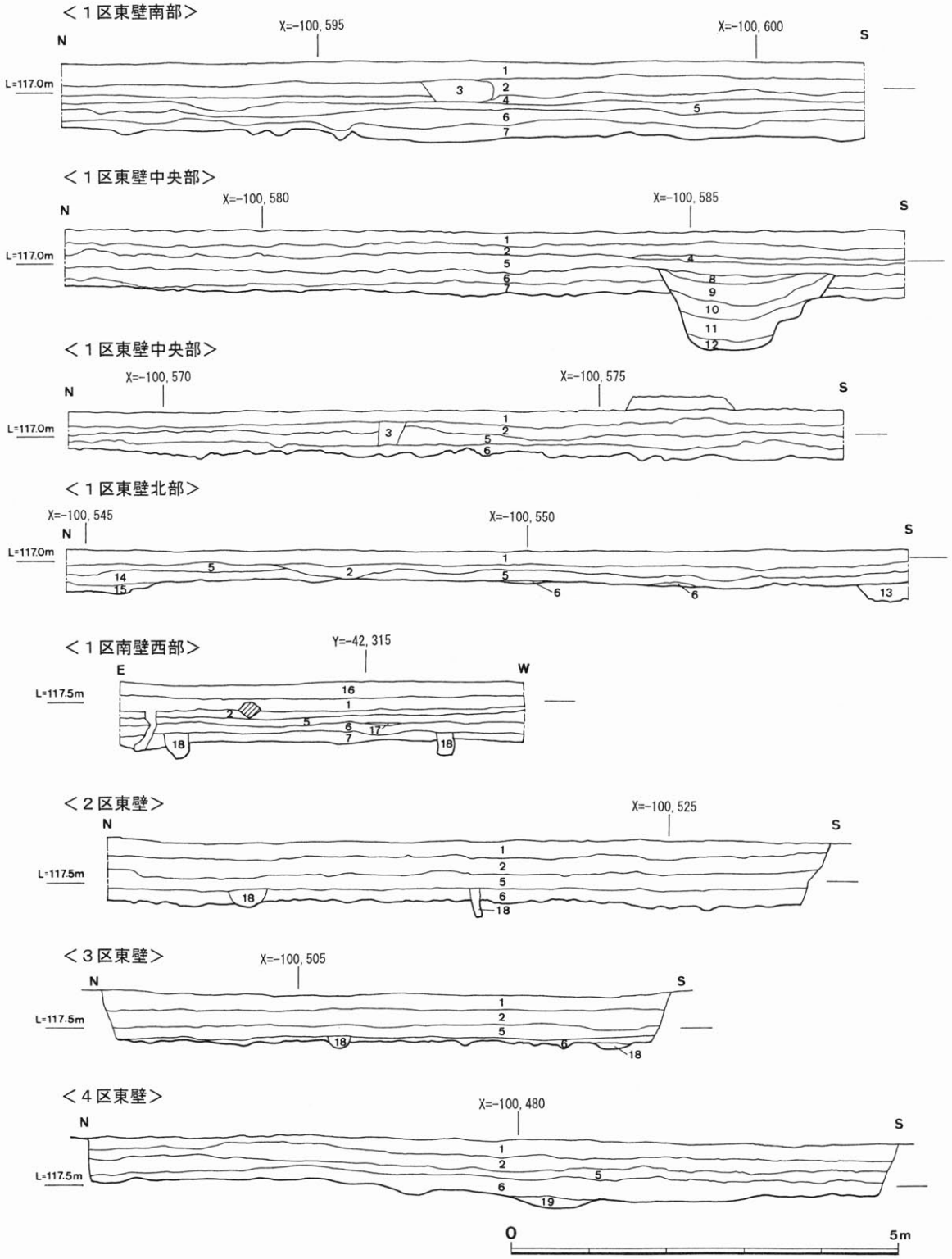

第２図　野条遺跡の過去の調査

（２）調査概要

野条遺跡第10次調査は、試掘調査として調査を開始したが、遺構の広がりを確認したため本調査を実施した。さらに調査地北端で溝などを検出したことから、従来の遺跡推定範囲より北へ遺構の広がりを想定し、北部の試掘調査を実施した（２～４区）。そのうち顕著な遺構を確認した２




第３図　野条遺跡第10次・第12次調査遺構配置図




1. 灰色粘質土（耕作土）
2. 明黄褐色粘質土（床土）
3. 灰褐色砂礫土（暗渠）
4. 明黄灰色粘質土（下層床土）
5. 灰オリーブ色粘質土
6. 黒褐色粘質土
7. 黒灰褐色粘質土
8. 暗灰色粘質土
9. 黄灰色粘質土（ＳＤ1 埋土）
10. 茶灰色粘質土（ＳＤ1 埋土）
11. 黒灰色粘質土（ＳＤ1 埋土）
12. 暗灰褐色粘質土（ＳＤ1 埋土）
13. 黒褐色粘質土（ＳＤ7 埋土）
14. 黒褐色砂礫混粘質土（ＳＸ5 埋土）
15. 黒灰色粘質土（ＳＤ201 埋土）
16. 暗灰色砂礫混粘質土（客土）
17. 灰褐色粘質土
18. 黒灰褐色粘質土
19. 黒色粘質土

第４図　野条遺跡各調査区土層断面図

区を拡張した。調査面積は第10次・12次調査をあわせ、１区1000㎡、２区230㎡を測る。

**１）基本層序**

調査地周辺は、全体に北西から南東へと徐々に低く傾斜する扇状地状の地形をなす。調査地北部（２区）で表土下約0.6m、標高約117.4mで遺構面を検出し、南部の１区南端では、表土下約0.8m、標高約116.4mで遺構面を検出した。基準層序（第４図）は、耕作土および床土を除去すると、近世遺物を包含する灰オリーブ色粘質土が約0.2mの厚さで堆積し、その下層に主に平安時代の遺物を包含する黒褐色粘質土層（６層）を検出した。この層は、いわゆる丹波黒ボク層の再堆積とみられ、この直下で遺構面を確認した。南部では黄褐色粘土層との間にさらに黒灰褐色粘質土層（７層）が確認できる。また１区北部では、近世遺物を包含する灰オリーブ粘質土層の直下でベース面を確認した。

**２）検出遺構**

本調査では、調査地北部を中心に奈良時代から平安時代中期の溝群を検出し、また南部を中心に平安時代後期の掘立柱建物跡群や井戸などの生活遺構を主に検出した。

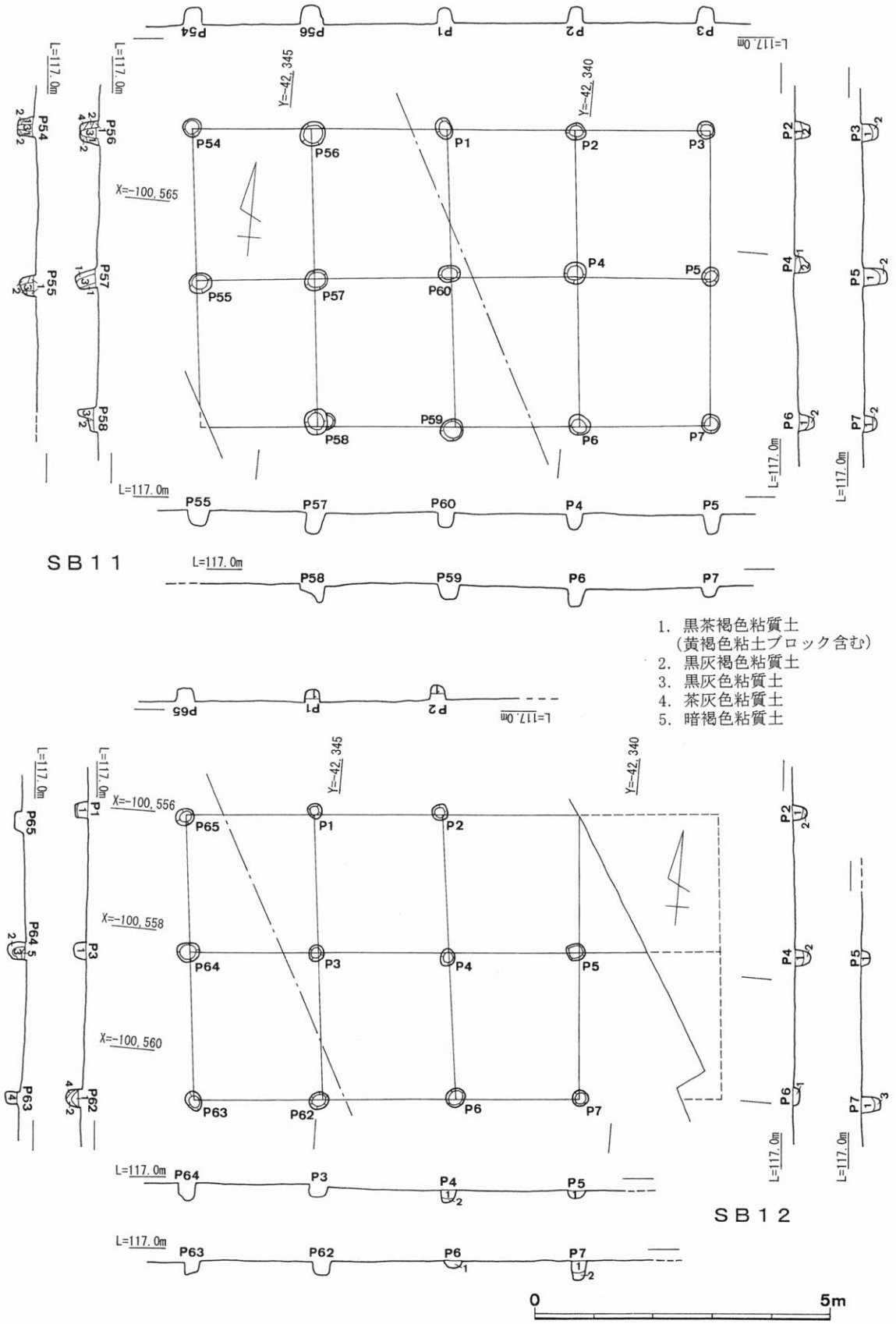
（i）**１区の調査**（第３図）

１区では、掘立柱建物跡６棟と柱列１基、井戸１基、落ち込み２基、溝３条を検出した。掘立柱建物跡群は、中央部で検出した東西方向に掘削される溝ＳＤ１を挟んで南北に展開し、いずれも主軸はほぼ正方位に向きを揃えて建てられている。掘立柱建物跡のうち、北半部の４棟は東西の桁行を合わせ、近接して南北方向に規則的に配されたと推定される規格性の高い建物群であり、倉庫群の可能性がある。

**掘立柱建物跡ＳＢ10**（第６図）　１区南部に位置する建物跡である。東西３間（約6.7m）以上、南北１間（約３m）の規模をもつ。主軸は、北から西へ５度振る。柱間の距離は、2.2～2.4mを測る。柱穴は、直径約0.3m、深さ約0.15～0.2mを測る。ＳＢ11・12よりも梁間の柱間が大きく柱構造も異なるが、埋土の検出状況や、西側の柱列を揃えることから、時期は周辺の建物跡と同じ平安時代後期に帰するものと考えられる。

**掘立柱建物跡ＳＢ11**（第５図）　１区北部で確認した総柱の建物跡である。東西４間（約8.7m）、南北２間（約５m）の規模をもつ。主軸は、北から西へ７度振る。柱の間隔は、約2.5mを測る。柱穴は、直径約0.3m前後、深さ約0.25～0.3mを測り、床面積はおおよそ約43.5㎡を測る。柱穴から土師器片が出土し、平安時代後期の建物跡と推定される。

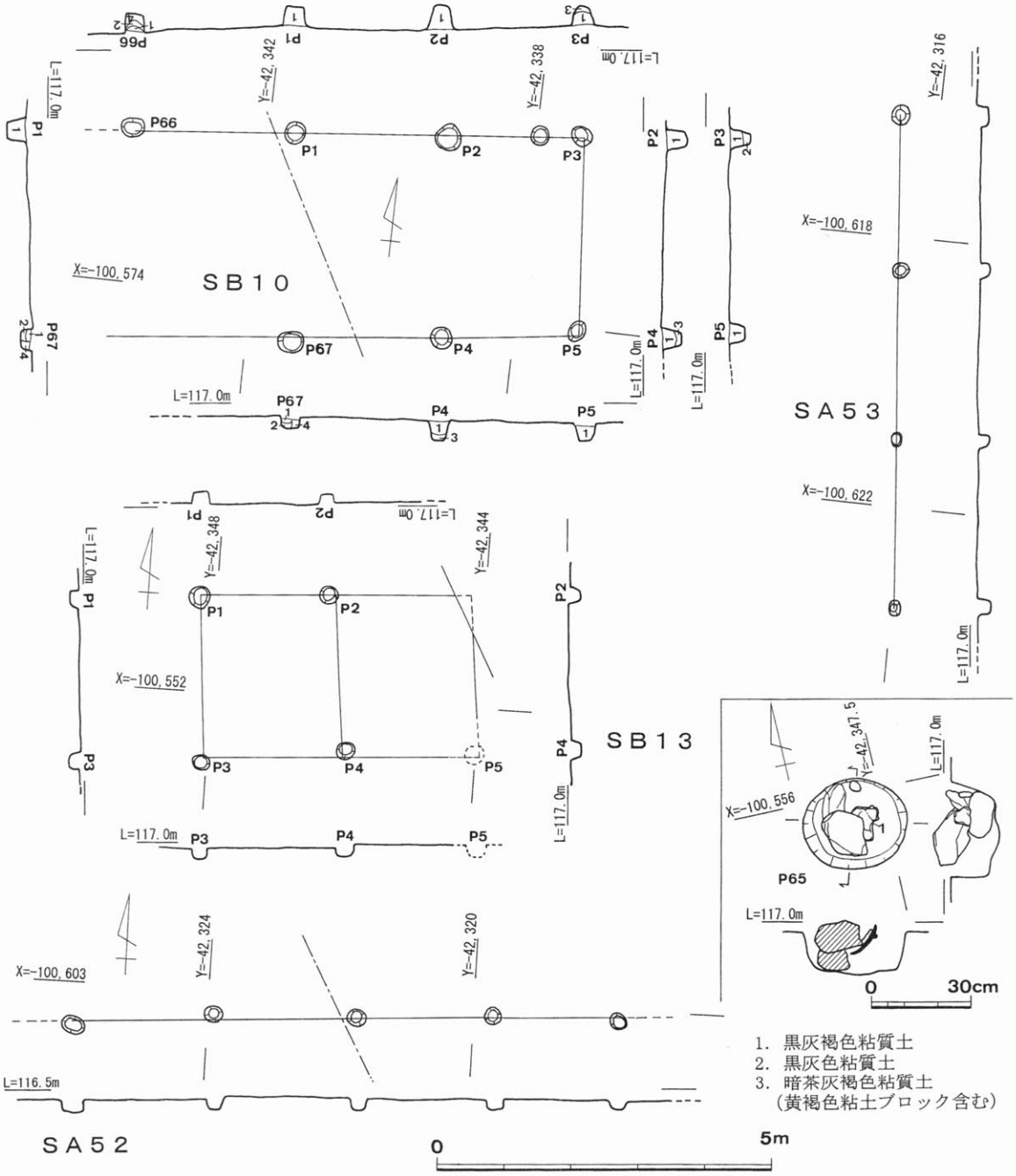
**掘立柱建物跡ＳＢ12**（第５図）　掘立柱建物跡ＳＢ11の北側で検出した総柱の建物跡である。東西３間（約6.6m）以上、南北２間（約4.8m）の規模をもつ。主軸は、北から西へ６度振る。柱の間隔は、約2.2～2.4mを測る。柱穴は、直径約0.3m、深さ約0.15～0.3mを測る。東側は調査範囲外になるが、柱構造がＳＢ11と同じで、西端の梁間柱列を南北ライン上に一致させることから、ＳＢ11と同様の規模をもつ４間×２間の建物跡と推定される。南西部の柱穴（Ｐ62）から、重量を計測する滑石製の分銅が出土した（第16図178）。また北西隅の柱穴（Ｐ65）から白磁椀（第12図１）が出土し、平安時代後期（12世紀前半）の建物跡であることが判明した。



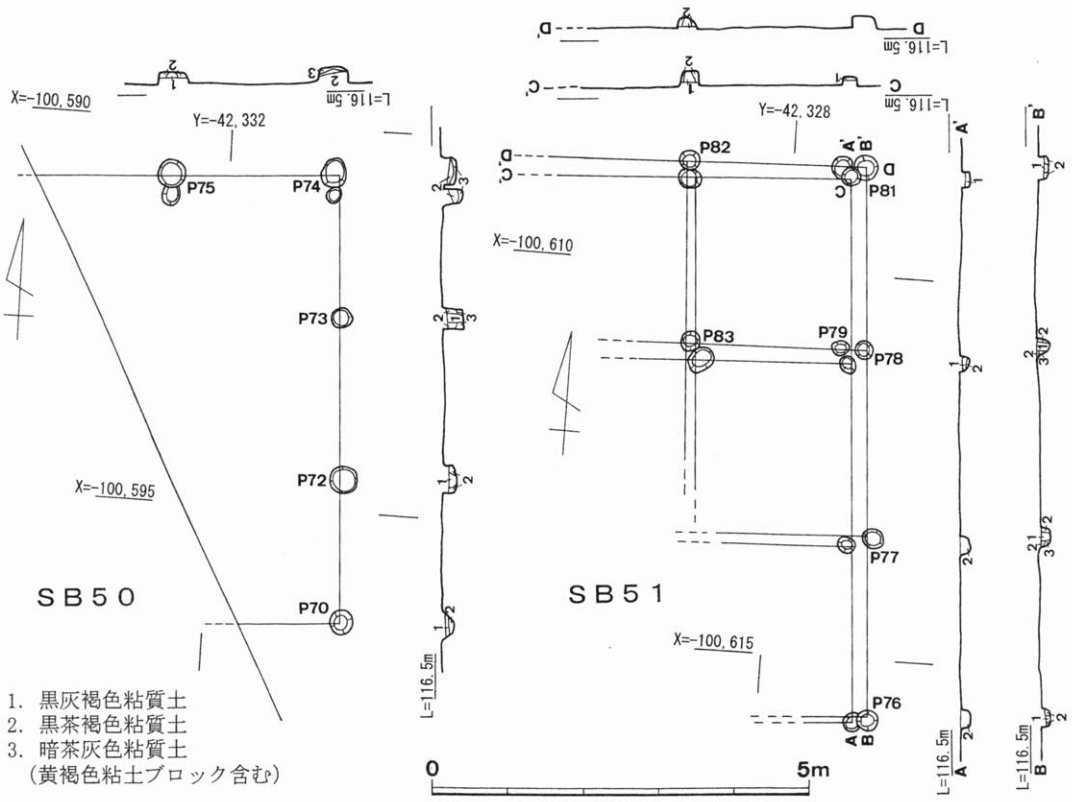

第５図　掘立柱建物跡ＳＢ11・12実測図

**掘立柱建物跡ＳＢ13**(第６図)　１区北部で検出した最も北に位置する掘立柱建物跡である。東西２間(約4.1m)以上、南北１間(約2.4m)以上の建物跡である。主軸は北から西へ５度振る。柱間の距離は約2.4mを測り、柱穴は径約0.2～0.3m、深さ約15cmを測る。西の梁間柱列は北半部の建物群とラインを揃える。東は一部調査範囲外にさらに拡張するとみられる。

**掘立柱建物跡ＳＢ50**(第７図)　東西溝ＳＤ１の南側で一部を確認した建物跡である。主軸は、北から西へ６度振る。東西２間(約3.7m)以上、南北３間(約5.8m)の建物跡である。柱間は約1.9～2.1m、柱穴の規模は、径約0.2～0.3m、深さ約0.15～0.25mを測る。北側の桁行の柱列は、




第６図　掘立柱建物跡ＳＢ10・13・柵列ＳＡ52・53・柱穴Ｐ65実測図




第７図　掘立柱建物跡ＳＢ50・51実測図

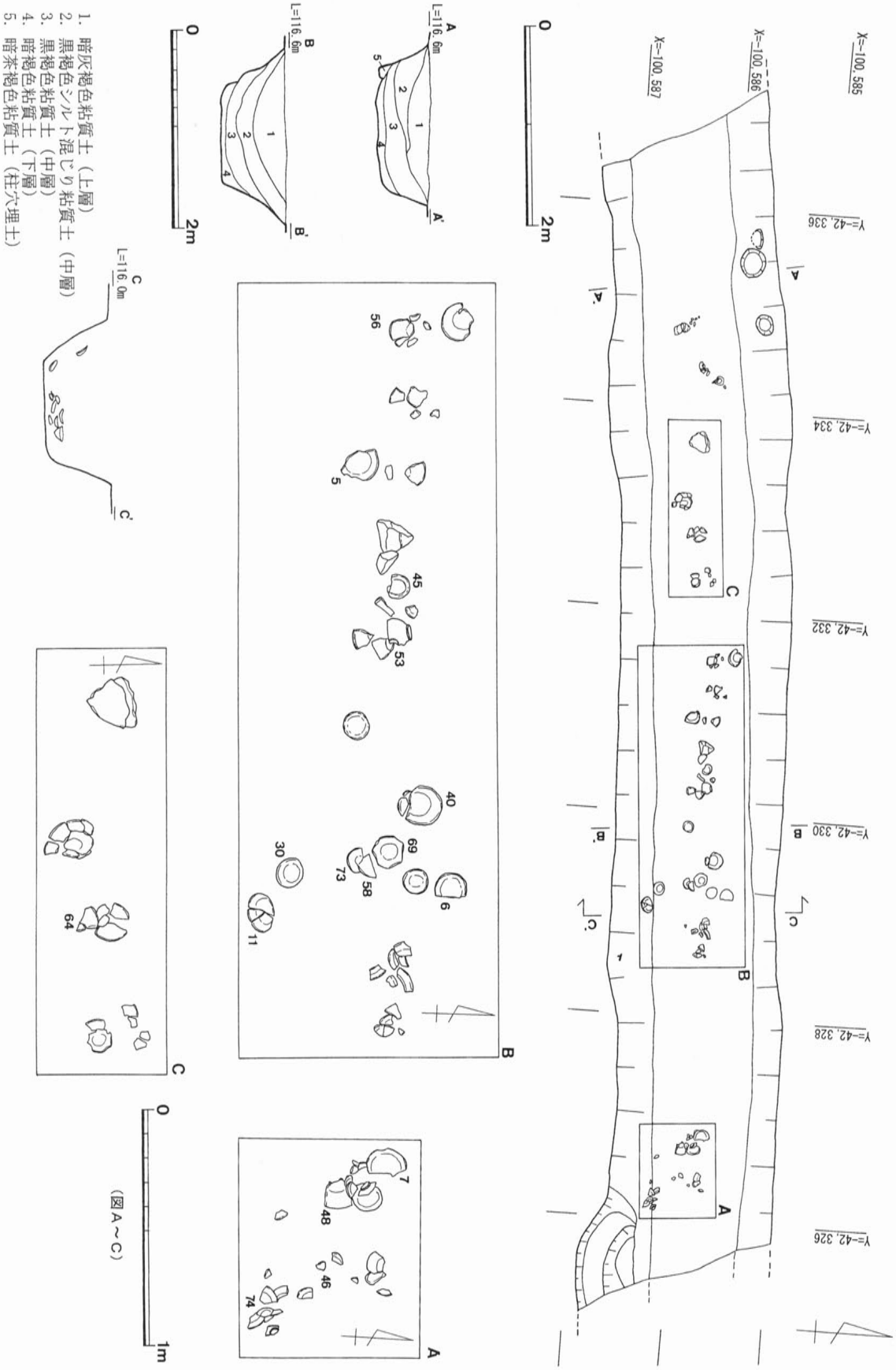
ほぼ同じ位置でそれぞれ柱穴を検出しており、建て替えられた可能性がある。南東隅の柱穴（Ｐ70）から土師皿（第12図２）が出土し、12世紀前半の建物跡であることが判明した。

**掘立柱建物跡ＳＢ51**（第７図）　１区南端で一部を確認した。東西２間以上（約3.6m）、南北３間（約７m）の建物跡で、さらに西側に広がるとみられる。主軸は、西へ６°振る。柱間は、約2.2～2.4mを測る。柱穴はいずれも２～３基が重なるように検出し、同じ位置で２～３回の建て替えが行われたと推定される。埋土から土師器細片が出土したが、時期を確定するに足る資料ではない。しかしながら、北に位置する掘立柱建物跡ＳＢ50や東に近接する井戸ＳＥ３などと同様、正方位をとることからほぼ同時期の平安時代前期の建物跡と考えられる。

**柵列ＳＡ52**（第６図）　１区南部で検出した東西方向の柵列である。４間以上の規模をもち、柱間は約1.9～2.1mを図る。径約0.25m、深さ約0.15mを測る。掘立柱建物跡ＳＢ51の北に位置し、住居跡・井戸などが配される南側の居住域を区画する機能を持っていた可能性がある。

**柵列ＳＡ53**（第６図）　１区南端で確認した柱列である。南北３間以上の規模で、さらに南に拡張するとみられる。柱間の距離は約2.4～2.5mを測り、径1.5～2.0m、深さ0.25mを測る。

**溝ＳＤ１**（第８図）　１区中央部付近で検出した東西方向の溝である。幅1.6～1.9mの規模をもち、深さ0.6～0.7mを測る。１区では長さ約12mにわたって検出したが、東の延長部が第11次調査でも確認された。東端の南の肩部は浅く段状に掘削される。また西部の北の肩部では、東西に並列して穿たれた２基の柱穴を確認した。架橋に伴う支柱痕の可能性がある。溝は、掘立柱建物跡群と方位をあわせ、平行に掘削されていることから、北側の倉庫的な施設と南側の屋敷地を区

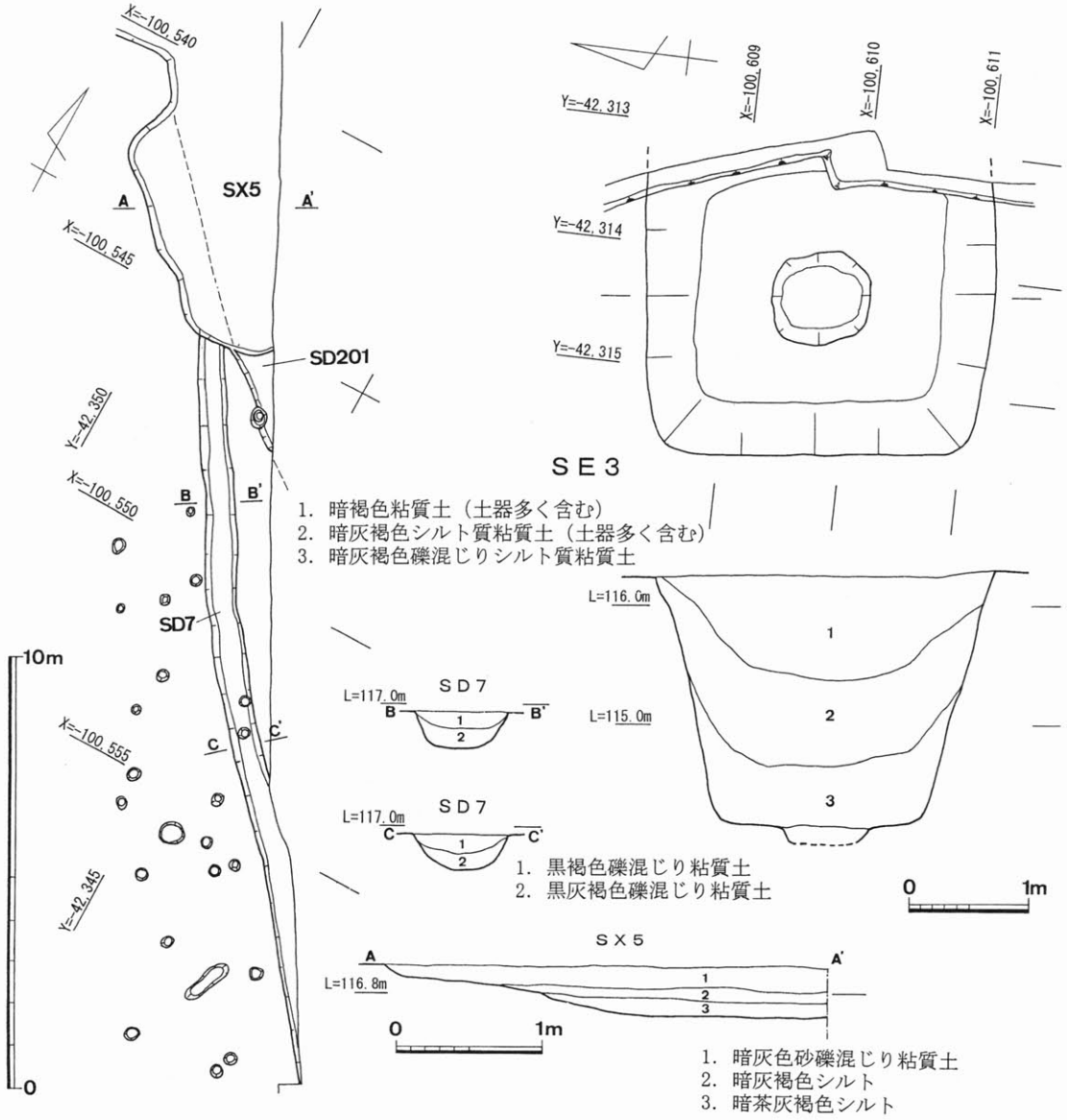



第８図　溝ＳＤ１土器出土状況図

画する溝の可能性が高い。調査地周辺では現在、方格地割がみられるが、この溝は１町四方(約109m)の大畦畔を東西半町に二分する位置にある。溝の下層を中心に瓦器椀や土師器類、白磁片などの陶磁器類が出土し、時期は平安時代後期(12世紀前半)であることが判明した。わずかながら上層から出土した遺物と下層の遺物には大きな時期差はみられない。中層下位にはシルト層が堆積し、埋没の過程で滞水した状況がみられるが、中層～上層の層位にはベースの黄褐色粘土の小ブロックなどが含まれ、人為的に埋め戻されたと考えられる。

**溝ＳＤ７**(第９図)　１区北東で検出した溝である。幅0.6～0.7m、深さ約0.25～3.0mを測る。東に隣接する第11次調査地でも検出され、北西から南東に向かって70m以上にわたって掘削されていることが判明した。遺物は検出面で青磁等を採集したが、包含層的な出土である。

**井戸ＳＥ３**(第９図)　１区南西端で検出した方形の素掘りの井戸である。一辺約2.9m、深さ約2.3m以上を測る。断面は漏斗状をなし、中央が径約0.6×0.8mの楕円形状に２段に掘削され



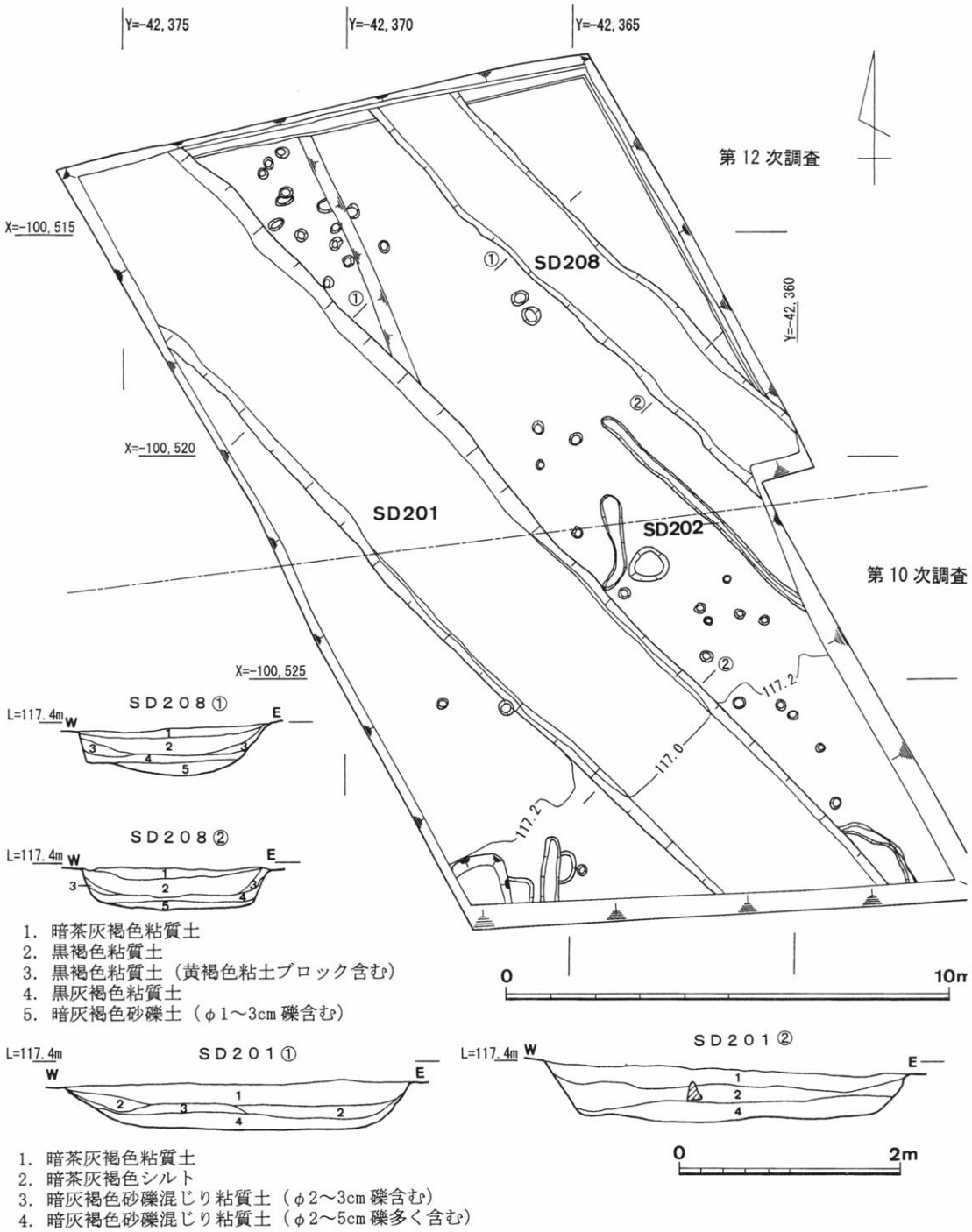

第９図　１区北東部遺構配置図・井戸ＳＥ３実測図

るが、湧水が著しく東壁の一部が崩落したため底部の完掘には至っていない。上層～中層で土器類が多く出土した。下層遺物もほぼ同時期で、掘削は平安時代後期(12世紀前半)とみられる。

**落ち込みＳＸ５**(第９図)　北東端で確認した不整形の浅い落ち込みである。深さ約0.35mを測る。埋土に砂礫を含み、周辺から流れ込んだとみられる丸瓦片などが出土した。

**落ち込みＳＸ49**(第３図)　１区南東で一部を検出した浅い楕円形状の落ち込みである。深さ約0.35mを測る。瓦器椀や土師器の細かな破片が出土し、時期は平安時代後期と推定される。

**落ち込みＳＸ72**(第３図)　北部で検出した不整形の落ち込みである。風倒木痕とみられる。




第10図　２区遺構配置図・溝ＳＤ201・ＳＤ208断面図

(ii) **2区の調査**(第10図)

野条遺跡第10次調査では、前述したように当初の遺跡推定範囲の北に遺構が広がることが想定されたため、南部の調査(1区)と並行して、3か所の試掘調査を実施した。このうち2区は試掘範囲を拡張して調査を実施した。17年度に南側の110㎡を、また18年度に北側の120㎡の対象とし、2区全体として、230㎡の調査を実施した。

検出遺構は、奈良時代後期の溝1条、平安時代中期の溝1条、素掘溝のほか、柱穴群などである。柱穴群については、柱列として捉えられるものはなく、建物を復原するには至っていない。

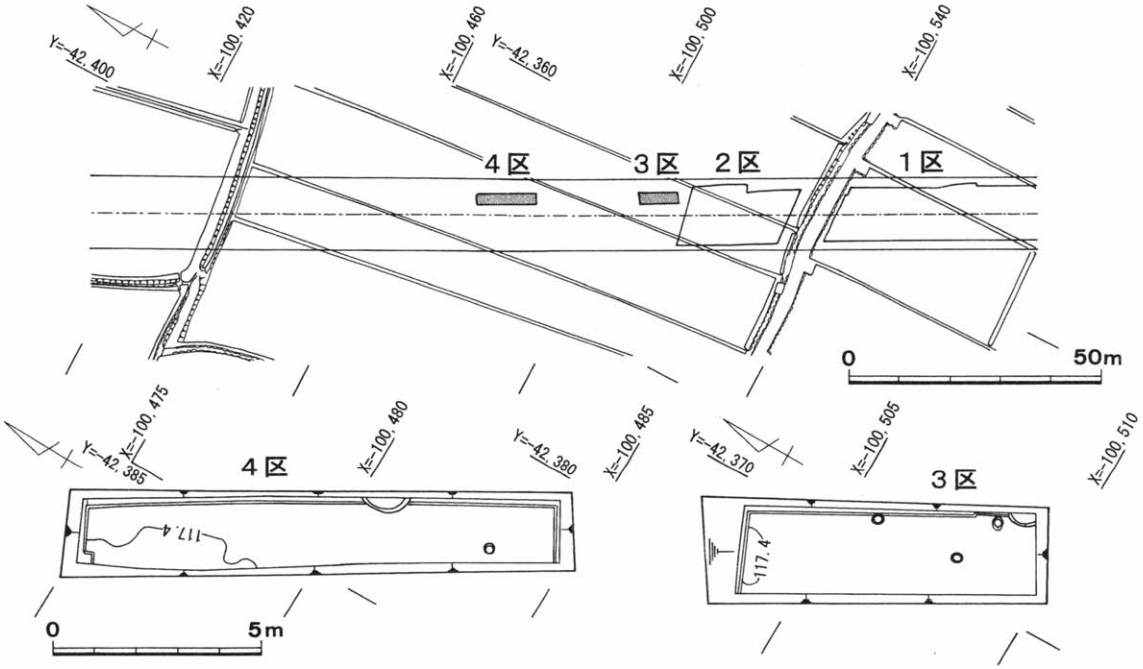
**溝SD208**(第10図)　東部で確認した幅約1.5～1.8m、深さ約0.3mの溝である。最下層は砂礫層であり、流路とみられる。出土遺物から、奈良時代後期(8世紀後半)の溝と推定される。

**溝SD201**(第10図)　西部で検出した幅約3.0m、深さ約0.5mの溝である。溝の断面は、台形状をなす。下層は砂礫層であり、流路とみられることから、灌漑用水として掘削された溝と考えられる。出土土器から、平安時代後期(11世紀後半)の溝と推定される。SD201は、1区北端で一部を確認し、第11次調査でも南東延長部を検出した。

**溝SD202**(第10図)　SD201とSD208の間で検出した溝である。幅約0.35m、深さ約0.2mを測る。SD201・SD208と平行することから、奈良～平安時代の溝と推定される。

(iii) **試掘調査**(第11図)

第10次調査と並行して実施した試掘は、南部の調査において、現在、周辺に残る1町を基準とする地割の半町の位置に溝SD1が掘削されていることが判明したため、北部についても半町(4区)と4分の1町の位置(3区)に試掘区を設定した。調査面積は、3区は16㎡、4区は24㎡を測る。南側の3区は、柱穴3基と土坑状の落ち込みの一部を検出した。また北側の4区でも、柱穴1基と土坑状の落ち込みの一部を検出したが、遺物は包含層中からも出土していない。




第11図　野条遺跡試掘調査区配置図

（３）出土遺物

野条遺跡第10次調査と第12次調査における出土遺物は、多くが同一遺構の連続する部分から出土しており、一括して報告する。遺物の総量は、整理箱約16箱を数える。

(i)土器

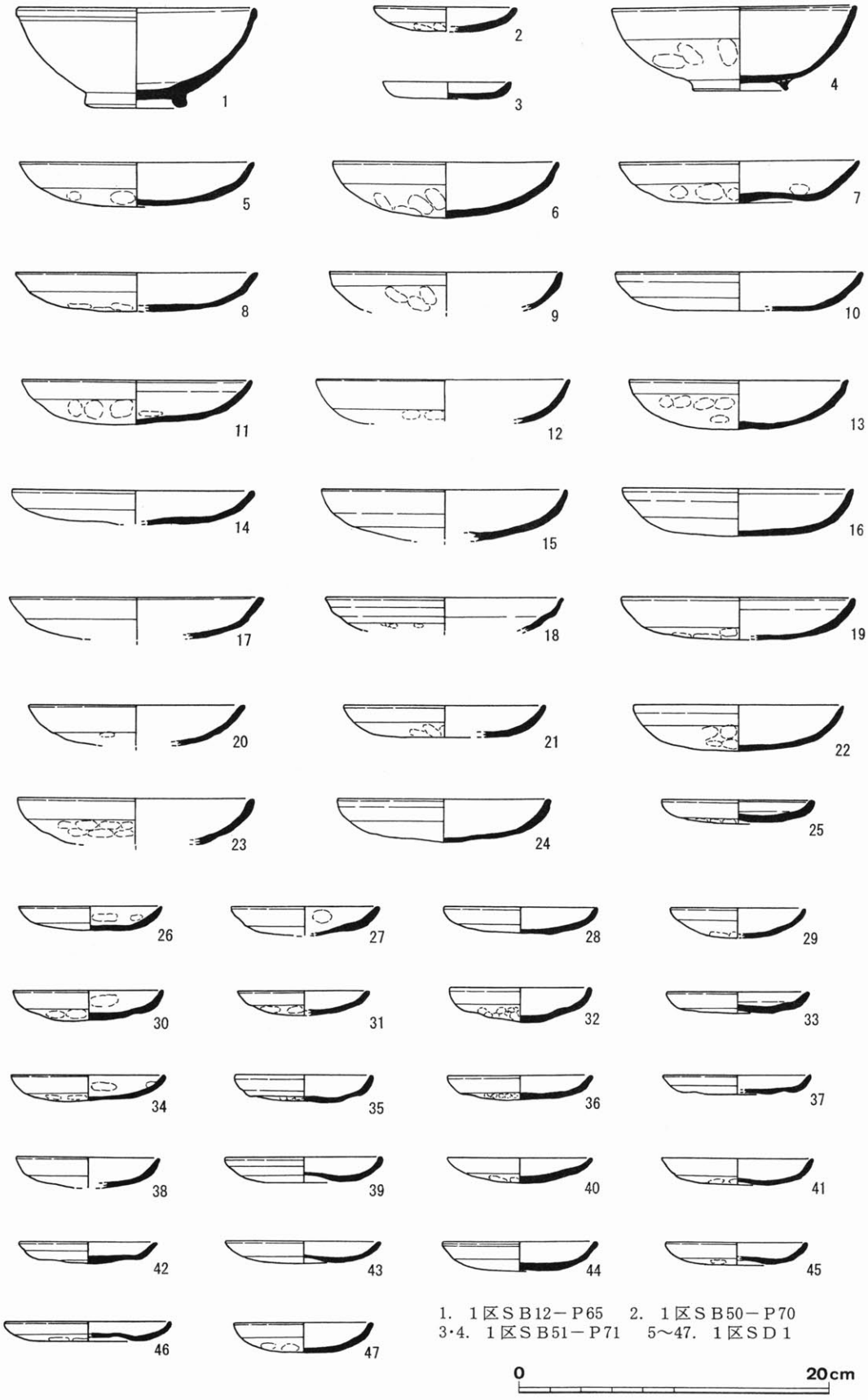
**掘立柱建物跡ＳＢ12**(第12図)　１は、北西隅の柱穴Ｐ65から出土した白磁椀である。口径15.0cm、器高6.5cmを測る。白磁Ⅳ類に分類され[注2]、12世紀前半の資料とみられる。

**掘立柱建物跡ＳＢ50**(第12図)　２は、南西隅の柱穴Ｐ70から出土した土師器小皿である。口縁部はやや内湾し、端部は丸く納める。褐色系を呈する。口径9.0cm、器高2.5cmを測る。

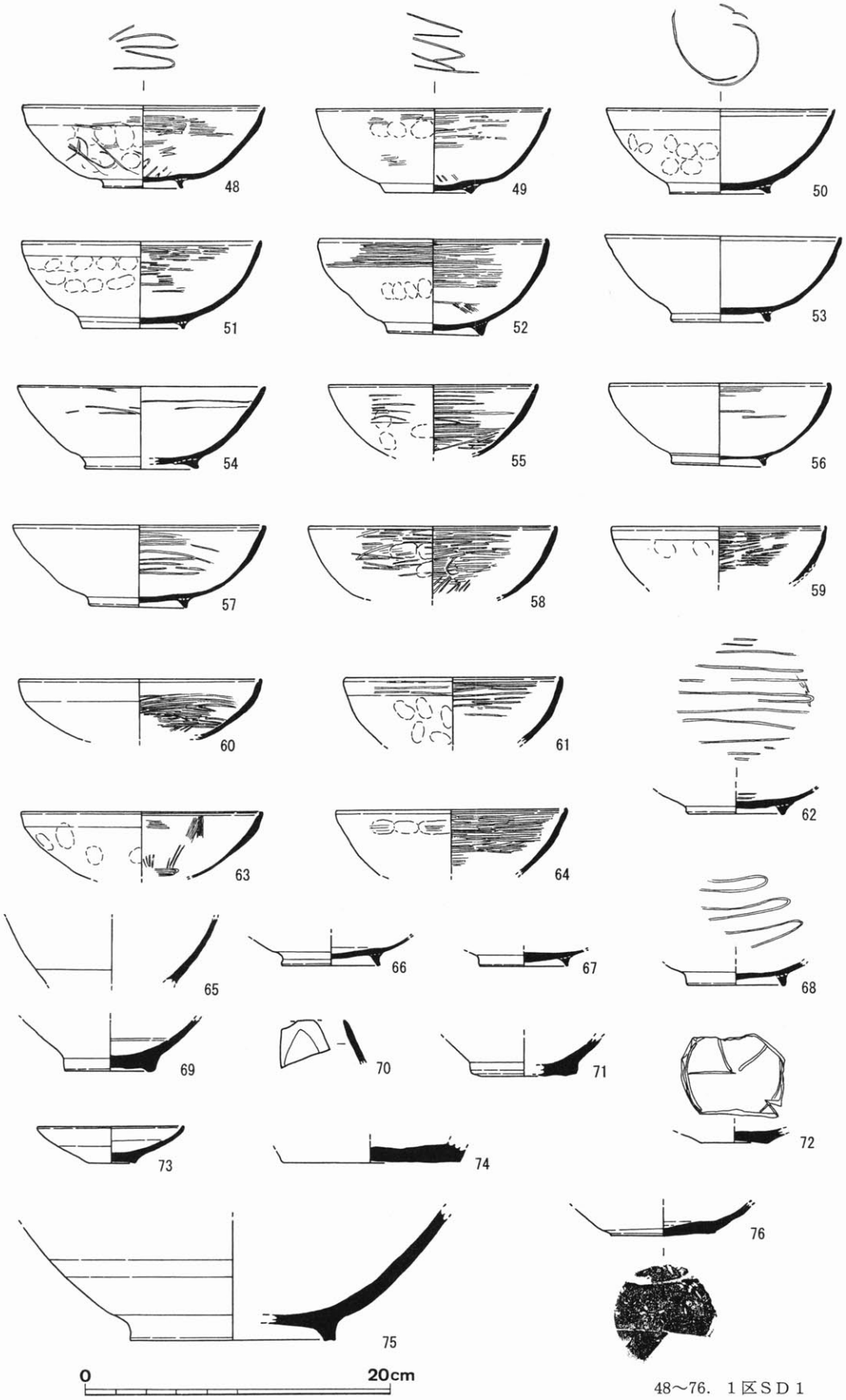
**柵列ＳＡ51**(第12図)　３・４は、南端の柱穴Ｐ71から出土した。３は土師器小皿で、口縁部が肥厚し、短く屈曲して立ち上がる。外面に１段のナデが施される。口径8.2cm、高さ1.1cmを測る。４は瓦器椀で、口縁部内面に沈線がみとめられる。摩耗が著しくヘラミガキは確認できない。口径15.7cm、高さ5.5cmを測る。時期は12世紀前半に帰するものと考えられる。

**溝ＳＤ１**(第12・13・14図)　５～47(第12図)、48～76(第13図)、77～84(第14図)は、ＳＤ１から出土した。５～76は第10次調査で出土し、77～84は第12次調査で出土したものである。遺物の多くは中層下部から下層で出土し、３ｍ以上離れた地点(第８図Ａ群とＣ群)の遺物が接合するものがある。時期はおおよそ12世紀前半に位置づけられる。

５～24は、土師器大皿である。口縁部に横方向の２段のナデが施されるものを基本とする。口径は14.5～15.5cmを測るが、口径13.5cm前後のやや小ぶりのものが含まれる(22・24)。口縁部は断面がやや内湾するものを基本とし、一部に直線的に延びるもの(７)、外反するもの(17)がみられる。また口縁端部は上方に上げるもの(９・13・16・24)がある。色調は、乳灰褐色系や、淡灰色系のものを主体とし、褐灰色を呈するものを含む(13・19)。25～47は、土師器小皿である。口縁部は外面に横方向の２段のナデが施され、断面がやや内湾するものを主体とするが、底部から口縁部にかけて明瞭な屈曲をもち、断面が外反するものもみられる(44)。口径は8.5～10.5cmとややばらつきがあるが、おおよそ9.0cm前後(33・42・45・47)と、10.0cm前後(25・26・28・30・39・41・44)に集中する。また口縁端部は丸く納めるものが基本であるが、外傾し面をなすものもみられる(44)。底部は指頭圧痕が丁寧に施され、中央部がやや上方に湾曲するものがある(25・33・39・43)。色調は、乳灰褐色系および淡褐色系からなり、大皿と同様、橙褐色系を含まれない。48～67は、瓦器椀である。体部内面に密な圏線ヘラミガキ、外面上半に分割ヘラミガキが施されるものを主体とする。見込みの暗文は、粗いジグザグ状のもの(48・49・62・77)が多いが、連結輪状を施すもの(50)もある。器壁は全体に薄く、口縁端部は約90％以上が沈線をもつ。高台はやや厚みのある三角形状をなすものを主体とし、薄くシャープに仕上げるもの(48)や台形状を呈するものがみられる(77・81・82)。高台の断面が台形状をなす。77は焼成が特に良好で、色調は他より薄い淡灰色系を呈する。完形のものの法量は、48が口径15.8cm・器高5.3cm、(以下同様に)49が15.4cm・5.5cm、50が15.0cm・6.6cm、51が15.7cm・5.7cm、52が14.8cm・6.1cm、53が15.5cm・5.6cm、56が14.4cm・5.5cm、57が16.4cm・5.4cm、77は15.4cm・5.5cmを測る。ＳＤ１




第12図　野条遺跡出土遺物実測図（1）




48～76．１区ＳＤ１

第13図　野条遺跡出土遺物実測図（２）

出土資料全体の平均値はおおよそ口径15.2cm、器高5.6cmである。

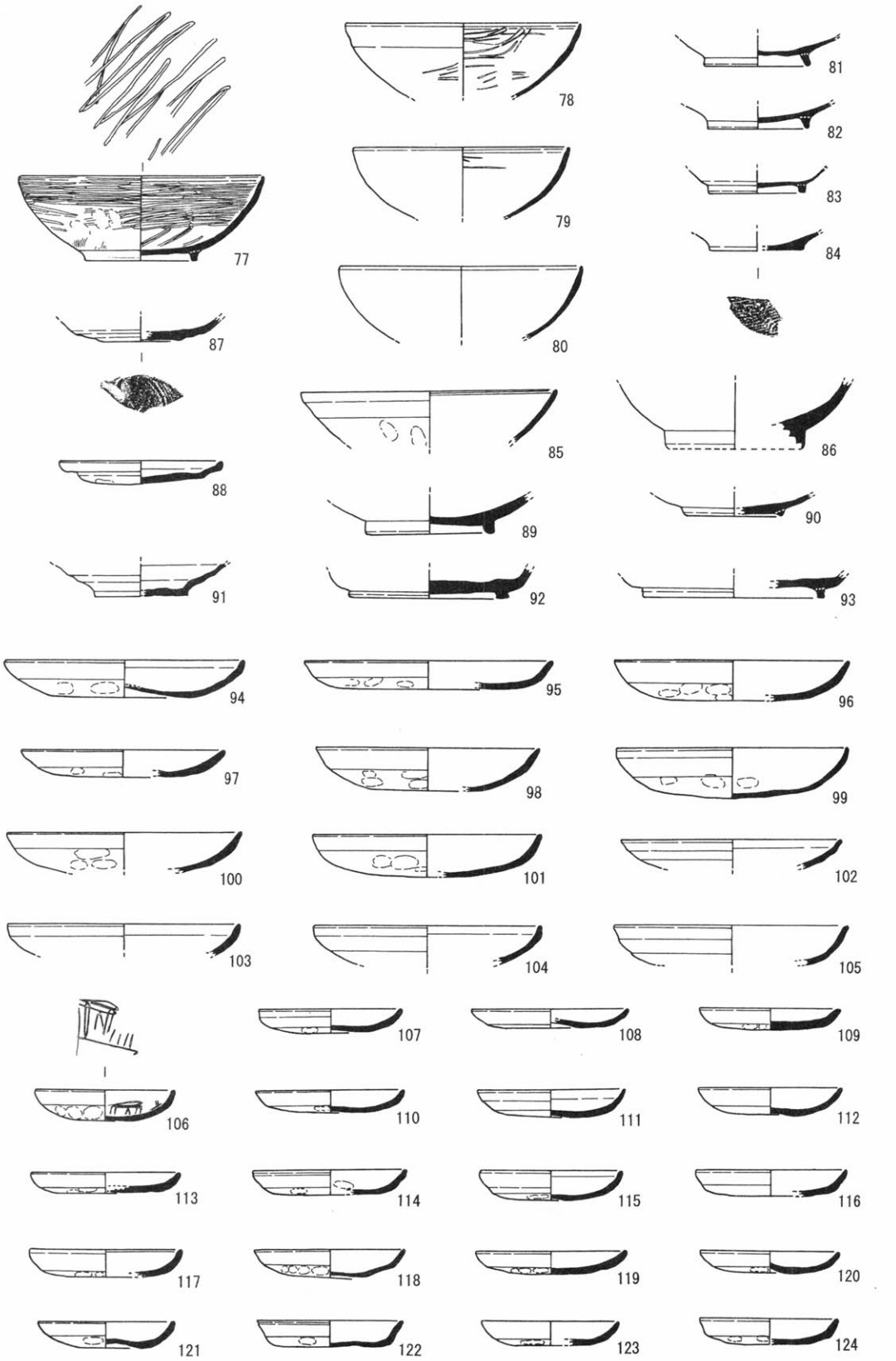
68・69・71～73は、白磁である。69・71は低い削り出し高台をもつ白磁Ⅳ類である。72・73は白磁皿で、72は見込みに陰刻文を施す。75は東播系の須恵器鉢である。76・84は体部に連続するヨコナデを施し、底部に糸切り痕をもつ土師器椀である。70は、龍泉窯系の鎬蓮弁の青磁椀である。なお細片だが、濃緑色の施釉がなされる近江系緑釉陶器片(図版第37)が出土した。

**溝ＳＤ７**(第14図)　85・86は溝上層から出土した。85は瓦器椀である。摩耗が著しく、ヘラミガキは確認できない。口径16.2cmを測る。86は、最上層から出土した龍泉窯系青磁椀底部である。器壁は厚く貫入による細かな罅割れがみられる。

**溝ＳＤ201**(第14図)　87・91は土師器椀である。体部に連続するヨコナデを施し、底部に糸切り痕がみられる。88はいわゆる「て」字状口縁の土師皿で、11世紀後半に帰属する。器壁はやや厚く、口径10.2cm、高さ2.0cmを測る。89は削り出し高台をもつ緑釉陶器で、高台の内側にも施釉される。９世紀頃の所産で、混入とみられる。90は低い貼り付け高台をもつ灰釉陶器である。

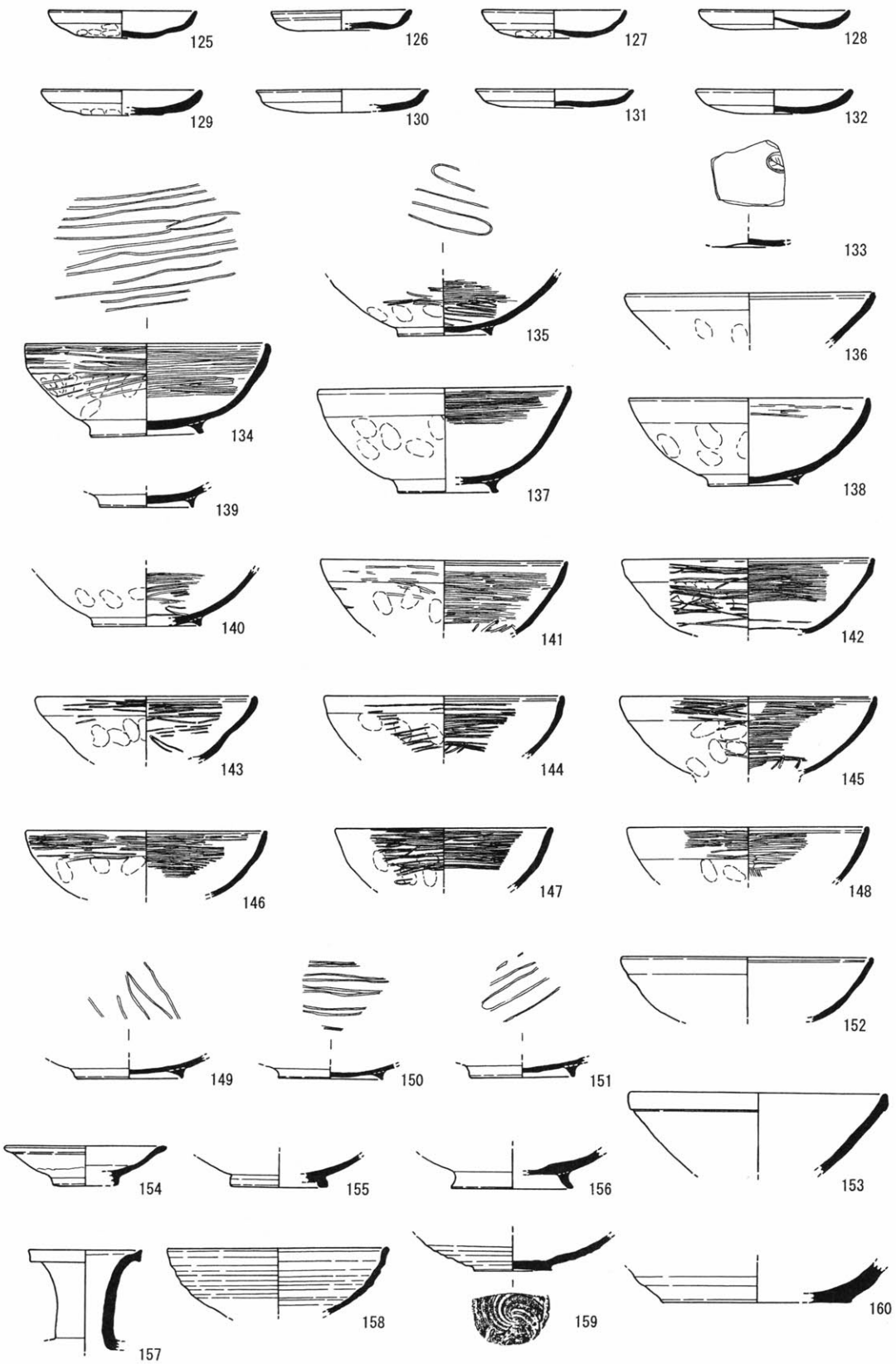
**溝ＳＤ208**(第14図)　92・93は、須恵器杯Ｂ底部である。92は底径10.0cm、93は11.6cmである。高台は内寄りに付き、おおよそ平城宮土器Ⅳ～Ⅴ期[注3]、奈良時代後半に帰属する。

**井戸ＳＥ３**(第14・15図)　94～160は、ＳＥ３から出土した。94～105は、土師器大皿である。口縁部外面は、２段にナデを施すものが基本である。口縁の断面は内湾気味に立ち上がるものが主体だが、そのなかでも端部を直立させるものがほぼ半数を占める(94・99・100・102・103・104)。ほぼ完形に復元できる94は、底部が上方に内湾する。口径15.2cm、器高2.4cmを測る。95は、内面立ち上がり部分に薄く炭化物が付着し、燈明皿として用いられたとみられる。97・102は、内面を薄く丹塗りした土師皿で、焼成前に塗布されたとみられる赤色顔料が残る。97は径13.0cm、器高1.7cm、102は口径14.0cm、器高1.8cmを測る。105は、口縁部外面の上段のナデが強く施され、やや外反気味に立ち上げ、端面に沈線をもつ。口径は15.9cm、高さ2.5cmを測る。土師器大皿の口径は14.0cm～15.0cmのものが多く、平均はおおよそ14.5cmである。この数値は、ＳＤ１の一括資料よりもやや小さい。また色調は、橙褐色系が多く、この点もまたＳＤ１資料と異なるところである。106は、瓦器皿である。内面見込みにジグザグ状の暗文がみられる。107～124は、土師器小皿である。体部は横方向のナデを２段に施すもの(107・111・121)があるが、１段に施すものが主体となるようである。口縁部は内湾気味に立ち上がるものが基本だが、屈曲して直線的に立ち上げるもの(124・131)、外反するもの(122・130)がある。端部外面には沈線を施すものがある(114・122)。また端部は丸く納めるものが主体である。底部は上方に湾曲するものが特徴的にみられる(108・120・121・127・128)。口径は8.7～10.0cmのなかにあり、その平均は9.3cm、高さの平均は1.5cmを測る。125～128はＳＥ３下層から出土した。土師器大皿・小皿ともに法量はＳＤ１の一括資料よりも小さく、また色調は橙褐色系を基本とする点でも異なる。12世紀中葉以降出土量が増える瓦器皿が共伴することも勘案して、帰属時期はＳＤ１出土資料よりもやや新しいおおよそ12世紀中葉に帰属するものとみられる。133は、土師器大皿の一部であるが、内面に葉脈様の線刻が認められるため、図化したものである。乳白系を呈する。134～152は瓦器




77～84．１区ＳＤ１　85･86．１区ＳＤ７　87～91．２区ＳＤ201
92･93．２区ＳＤ208　94～124．１区ＳＥ３上層～中層

第14図　野条遺跡出土遺物実測図（３）




125～128．１区ＳＥ３下層
129～160．１区ＳＥ３上層～中層

第15図　野条遺跡出土遺物実測図（４）

椀である。134は、外面上半にやや粗いヘラミガキを施し、内面に圏線ヘラミガキ、見込みに粗いジグザグ状のヘラミガキが施すものを基本とする。口縁部断面がやや肥厚するものが特徴的にみられる(136・134・138・142・143・145・146)。高台は三角形状を呈するもの(135・138・140・149～151)が主体であるが、台形状を呈するもの(134・137)も含まれる。また口縁端部には沈線が施されるが、丸く納めるものもわずかに(147)みられる。法量は完形に復元できるものでは、134は径15.4cm、器高6.0cm、137は口径15.8cm、器高6.6cm、138は口径15.2cm、器高5.5cmを測る。134～141はＳＥ３上層～中層から出土し、142～150は下層から、さらに151は最下層から出土した。154は口縁端部を外方に薄く引き出す白磁皿である。見込みに段をなす。口径10.0cm、高さ2.6cmを測る。155は、緑釉陶器である。高台内側には施釉されず、篠窯産とみられる。156は、東海系の灰釉系須恵器の底部である。貼り付け高台で、外方に短く外反する。153は、白磁椀である。大きな玉縁状の口縁部をなすⅣ類である。157は、篠窯跡群産とみられる須恵器小形壺の口縁部である。口縁端部に面をなし、上方に立ち上げる。158～160は須恵器椀である。158は外面に連続するヨコナデ調整を施す。口径14.0cm、器高4.4cmを測る。159・160は、平底の底部に糸切り痕がみられる。154～160は、いずれもＳＥ３上層～中層で出土した。出土遺物の時期は、前述したようにＳＤ１の一括資料よりやや新しい様相をみせ、おおよそ12世紀中葉とみられる。

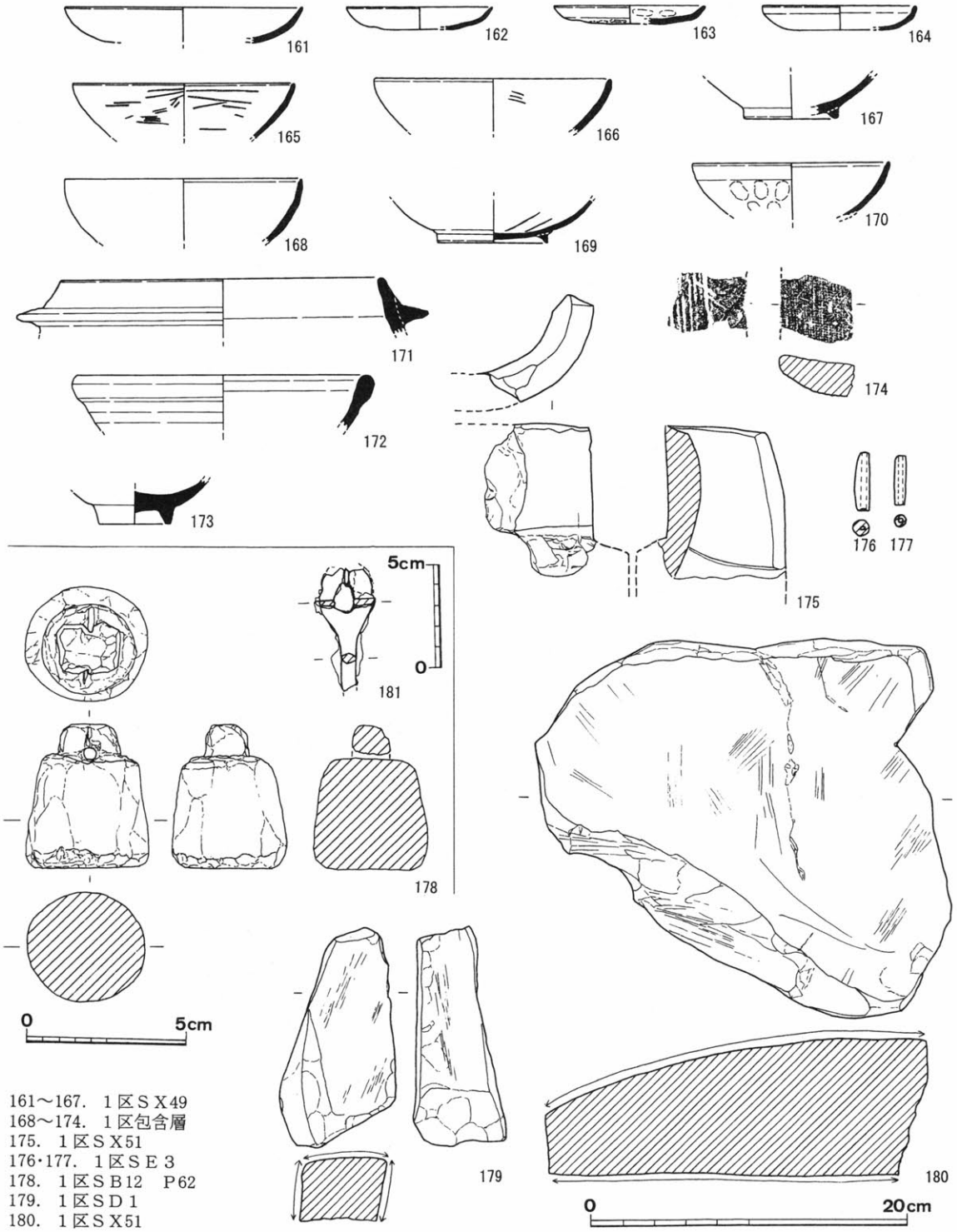
**落ち込みＳＸ49**(第16図)　161～167は、ＳＸ49から出土した。161は土師器大皿、162～164は土師器小皿である。法量・色調ともにＳＥ３と同様の傾向がある。165～167は、瓦器椀である。

**包含層**(第16図)　168～173は、１区包含層中から出土した。168～170は南部から出土した瓦器椀である。171は羽釜口縁部、172は須恵器鉢、173は瀬戸・美濃系の天目茶碗である。

**(ii)土製品・瓦・石製品・鉄器**

**掘立柱建物跡12**(第16図)　178は、１区掘立柱建物跡ＳＢ12の柱穴Ｐ62から出土した滑石製の石製品である。秤量具である分銅とみられる。底部幅3.6cm、体部上端の幅2.6m、高さ4.5cmを測る。本体の外形はおおよそ円柱状を呈するが完全な正円柱ではなく、４面をある程度意識した丁寧な研磨仕上げを行っている。釣り手の部分は、長さ1.0m、厚さ1.4cmを測る。釣り手の中央に前後に縦の鋭利な工具による溝状の削り込みが施され、本体上面にも釣り手と直交して溝状の削り込みがなされる。また底部にも丁寧な研磨痕がみられる。一方、体部裾には連続する細かい打割痕がみられるが、研磨等による仕上げはされていない。釣り手の溝状の削り込みは、釣り手に通した紐を棹に安定して取り付けるためのものであろう。ＳＢ12は建物を構成する柱穴の一つから白磁椀が出土し、時期は12世紀前半と推定されることから、この分銅についても12世紀前半に帰属するものとみておきたい。重量は89.1ｇを測る。平安時代の度量衡については、基本的に唐制にならった大宝律令にみる大両(約41.9ｇ)、小両(約13.9ｇ)が用いられていたと考えられており[注4]、その場合はおおよそ２両の重さに対応する。

**溝ＳＤ１**(第16図)　179・180は砥石である。179は軟質花崗岩あるいはアプライト製とみられ、２面に研磨痕がある。180は砂岩製で、上面に研磨痕がみとめられる。179は、長さ25cm、厚さ




161～167．１区ＳＸ49
168～174．１区包含層
175．１区ＳＸ51
176･177．１区ＳＥ３
178．１区ＳＢ12　Ｐ62
179．１区ＳＤ１
180．１区ＳＸ51

第16図　野条遺跡出土遺物実測図（５）

10cm、重さ650ｇを測る。180は、長さ14cm、厚さ5.5cm、重さ81ｇを測る。

**井戸ＳＥ３**（第16図）　176・177は、小形の管状土錘である。176は長さ3.7cm、厚さ0.95cm、177は長さ3.1cm、厚さ0.7cmを測る。重さは、176が３ｇ、177が1.4ｇを測る。

**落ち込みＳＸ５**（第16図）　175は丸瓦の玉縁の一部である。被熱痕跡がみられる。181は円環状をなす不明鉄製品である。把手金具などの可能性がある。残存長は、5.7cmを測る。

## ４．室橋遺跡第５次の調査

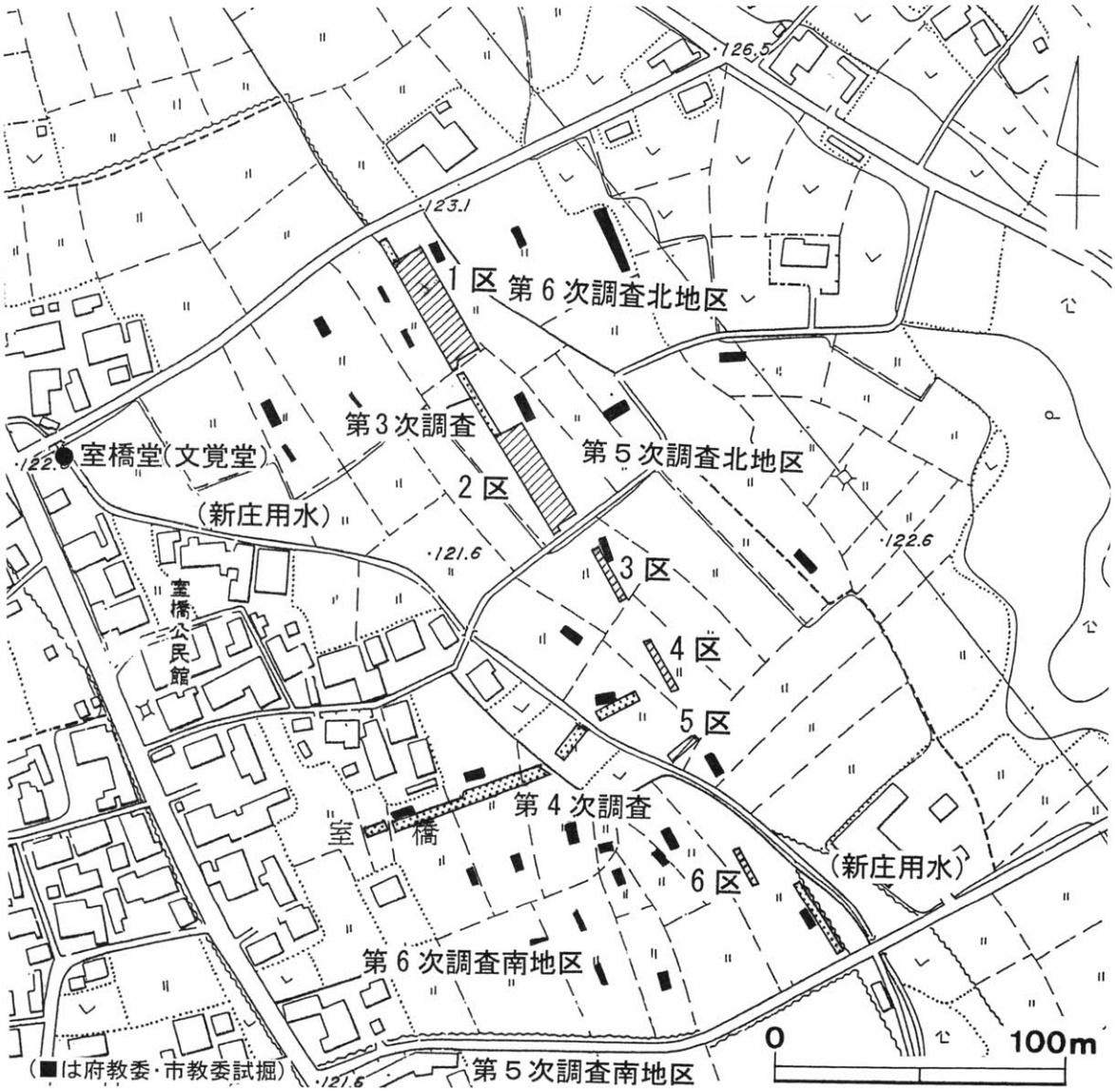
### （１）既往の調査

室橋遺跡では、平成18年度までに10次にわたる調査が行われている。第１次・２次調査は府営圃場整備に伴い八木町教育委員会によって、北部を中心に面的な試掘調査が行われた。その成果

第17図　室橋遺跡調査区配置図

付表２　室橋遺跡の調査次数一覧

| 調査名 | 調査主体 | 調査年度 | 面積 | 主要遺構 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 室橋遺跡第１次 | 八木町教育委員会 | 平成10年度 | 40㎡ | 柱穴等（古代～中世） | 試掘 |
| 室橋遺跡第２次 | 南丹市教育委員会 | 平成17年度 | 170㎡ | 竪穴式住居（古墳）・柱穴（奈良～平安）、溝（平安）等 | 試掘 |
| 室橋遺跡第３次 | 当センター | 平成17年度 | 200㎡ | 柱列（奈良～平安）・竪穴式住居・溝（鎌倉）等 | 試掘 |
| 室橋遺跡第４次 | 当センター | 平成18年度 | 400㎡ | 竪穴式住居（古墳中期）・溝（平安）等 | 本調査 |
| 室橋遺跡第５次 | 当センター | 平成18年度 | 1230㎡ | 竪穴式住居（古墳後期）・溝（平安）等 | 本調査 |
| 室橋遺跡第６次 | 京都府教育委員会 | 平成18年度 | 236㎡ | 竪穴式住居（古墳中期）・掘立柱建物（奈良）等 | 本調査 |
| 室橋遺跡第７次 | 京都府教育委員会 | 平成18年度 | — | 竪穴式住居（古墳中期）・溝・土坑等 | 立会調査 |
| 室橋遺跡第８次 | 南丹市教育委員会 | 平成18年度 | 280㎡ | 竪穴式住居(古墳後期）・溝・柱穴等 | 本調査 |
| 室橋遺跡第９次 | 南丹市教育委員会 | 平成18年度 | 250㎡ | 溝・柱穴（平安）等 | 試掘 |
| 室橋遺跡第１０次 | 京都府教育委員会 | 平成18年度 | 257㎡ | 竪穴式住居（古墳中・後期）・溝（平安） | 本調査 |




第18図　室橋遺跡北地区調査区配置図

を受け、当センターによる第４次調査が実施され、古墳時代中期の竪穴式住居跡群や、平安時代の断面Ｖ字形の大溝などが検出された。同じく北部で本調査と並行して行われた京都府教育委員会による第６次調査では、遺跡範囲の北東部(第６次北部地点)で、奈良時代の掘立柱建物跡群が検出された。今回の調査は府道建設に伴うもので、平成17年度の当センターによる北部路線区を対象にした第３次試掘調査の成果を受け、実施したものである。

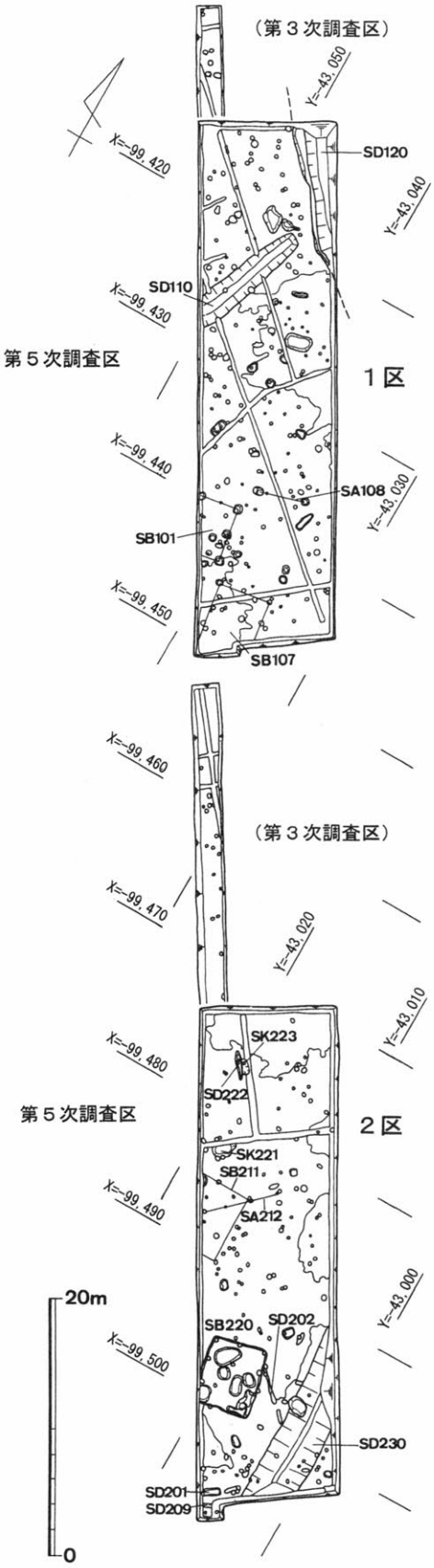
**(２)調査概要**

室橋遺跡の道路建設予定地内における調査対象地は、大きく南北の地点に分かれる。今回の調査では、全体で約1,230㎡を調査対象とし、北地区に６箇所を、また南地区に３箇所の調査区を配置した(第17図)。１区から９区までの距離は、南北約700ｍを測る。北地区のうち、１・２区は本調査を実施したもので、３～６区はこれと並行して実施した試掘調査である。北地区の調査面積は、１区は440㎡、２区は410㎡を測り、試掘面積を合わせて980㎡を測る。南地区は、７～９区を合わせて250㎡を測る。

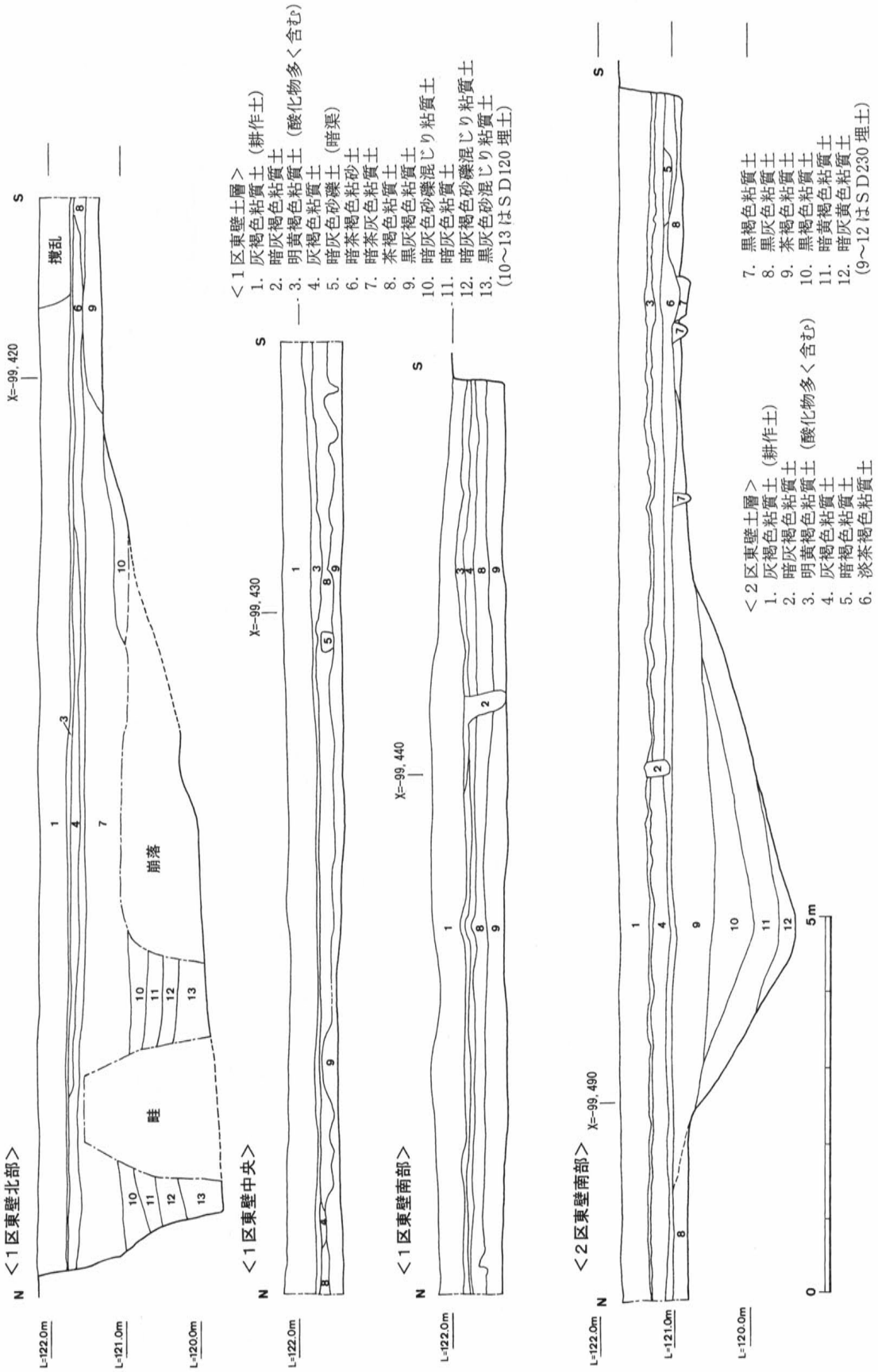
**１)北地区の調査**

**(i)基準層序**

調査対象地における表土の標高は、１区北部で約122.2ｍ、２区南部で121.7ｍを測り、北から南へ向けて低く傾斜している。基準層序は１区では、耕作土および床土を除去すると、上層から近世遺物の包含層である灰褐色粘質土(第20図１区４層)、中・近世遺物を包含する茶褐色粘質土(同８層)、黒灰褐色粘質土(同９層)の順に堆積する。９層は黒ボクの再堆積層とみられる。遺構面は９層上層にあり、おおよそ標高121.7ｍで検出した。またこれより低い２区の基本層序は、２区南端で上層から近世遺物の包




第19図　室橋遺跡１区・２区平面図



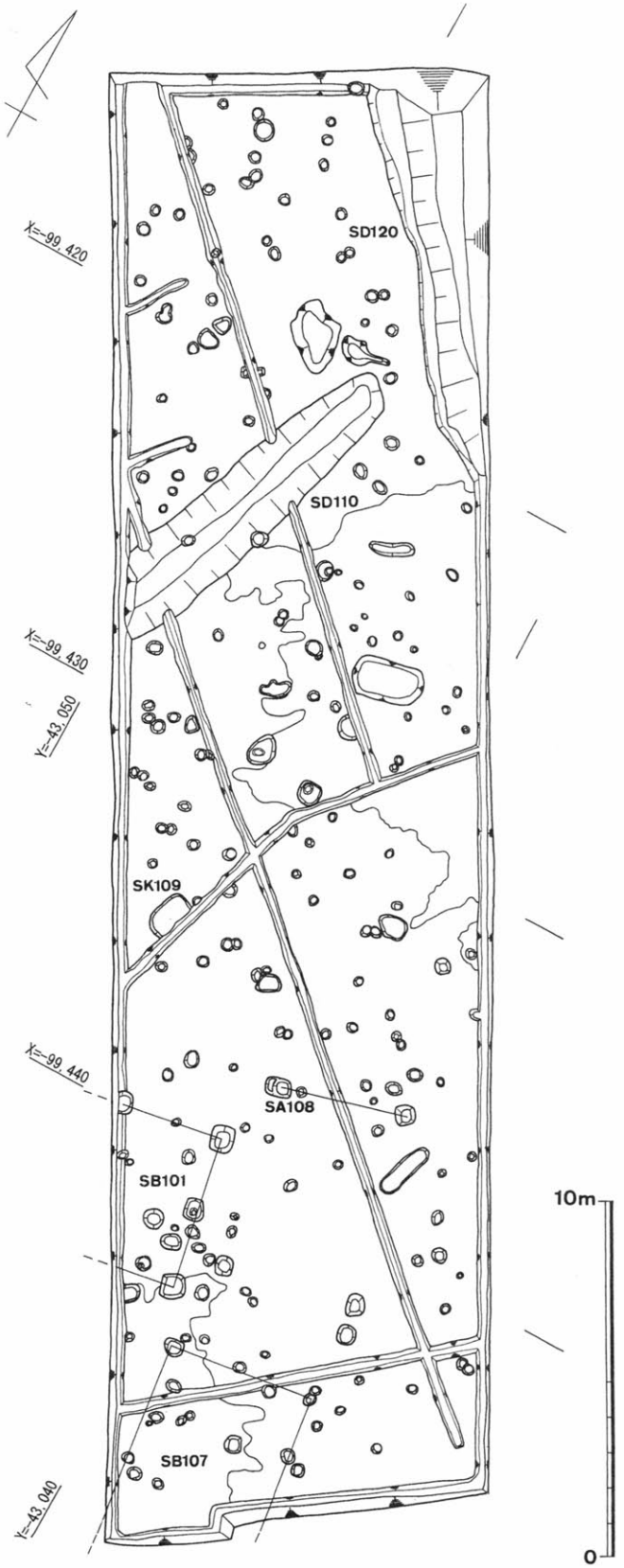

第20図　室橋遺跡1区・2区土層断面図

含層である灰褐色粘質土(第20図２区４層)、中・近世遺物を包含する淡茶褐色粘質土(同６層)・黒ボクの再堆積とみられる黒灰褐色粘質土の順で堆積する。遺構面は、標高おおよそ121.0mの黒灰褐色粘質土上層で検出した。

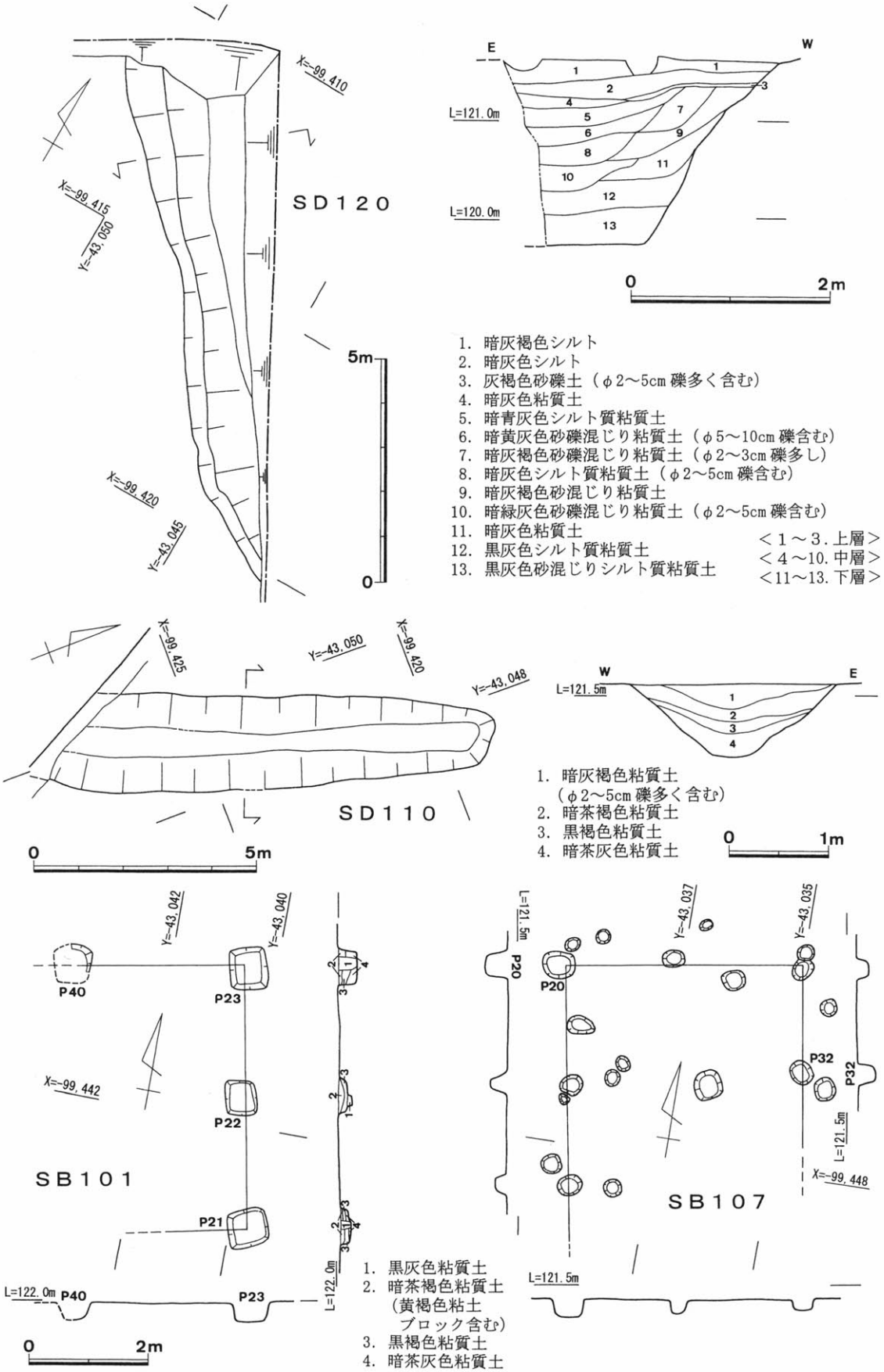
**(ii) １区の検出遺構**(第21図)

１区では、弥生時代後期と推定される溝１条や、奈良時代の掘立柱建物跡１棟と柱列１基、奈良～平安時代と推定される掘立柱建物跡１棟、平安時代の溝１条、柱穴、土坑等を検出した。

**溝ＳＤ120**(第22図)　調査区北端で検出した大規模な溝である。北西から南東に向けて掘削され、規模は、検出面での幅3.5m以上、深さ約1.8mを測る。一部を確認したにすぎず、正確な規模や形状は復元できないが、底部に東側の立ち上がりは確認できないことから、幅おおよそ５～６mの大規模な溝と推定される。断面形は台形状を呈するとみられる。堆積状況は、下層はシルト性の堆積がみられ、中層はシルトと砂礫層の互層が確認できる。中層では、滞水する時期と上流域から土砂が流れ込む時期があったとみられる。中層と上層の間に確認される第３層(第22図)は砂礫層の不整合面であり、上層はシルト性の堆積に変化している。この砂礫層直上で奈良～平安時代の土器が出土した。上層は長




第21図　室橋遺跡１区遺構配置図




第22図　溝ＳＤ120・ＳＤ110・掘立柱建物跡ＳＢ101・ＳＢ107実測図

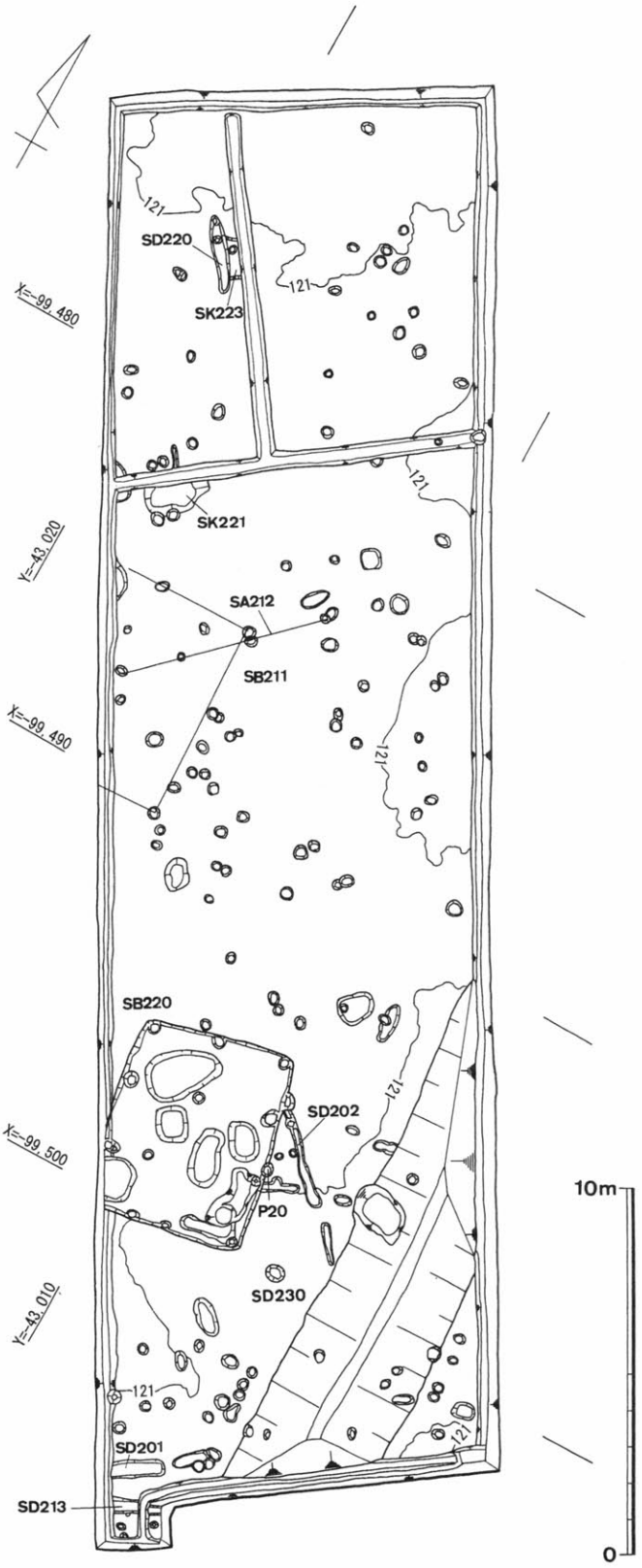
期にわたって落ち込みを形成し、滞水する状況があったとみられる。溝の時期は、出土した下層の遺物から、おおよそ弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と推定される。

**掘立柱建物跡ＳＢ101**（第22図）調査区南西部で検出した。主軸は、10度西に振る。東西２間以上×南北２間の規模をもち、柱間は約2.7～2.9mを測る。柱穴は一辺約0.5～0.6mの方形の掘形をなし、深さ0.2～0.3mを測る。柱穴内から、土師器片や土錘が出土し、奈良時代の建物跡と推定される。

**掘立柱建物跡ＳＢ107**（第22図）ＳＢ101の東側で検出した。東西２間×南北２間以上の規模をもち、柱間は約1.8～2.1mを測る。主軸は、10度西に振る。柱穴埋土や検出レベルから、奈良～平安時代にかけての建物跡と推定される。

**柱列ＳＡ108**（第21図）　南部で検出した東西２間の柱列である。柱間は約3.5mを測る。柱間が広く、門跡などの可能性がある。遺物は出土していないが、主軸は西側のＳＢ101と同じく正方位にあり、埋土の状況も類似することから、同時期の関連遺構と推定される。

**溝ＳＤ110**（第22図）　ＳＤ120の西側で検出した溝である。北東から南西に向けて約９mわたって掘削される。最大幅は、約2.5m、深さ約0.7mを測る。溝内の遺物から平安時代の溝とみられる。



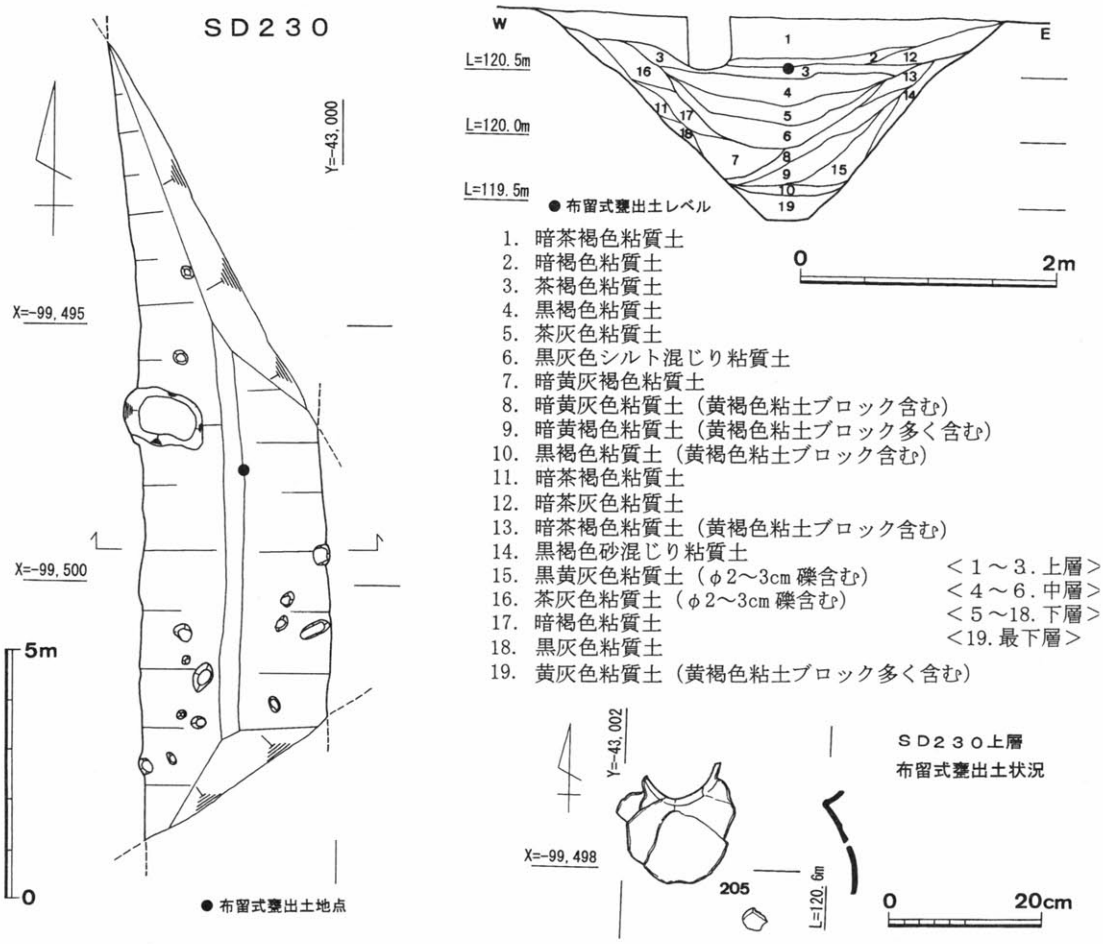

第23図　室橋遺跡２区遺構配置図

(iii) **2区の検出遺構**(第23図)

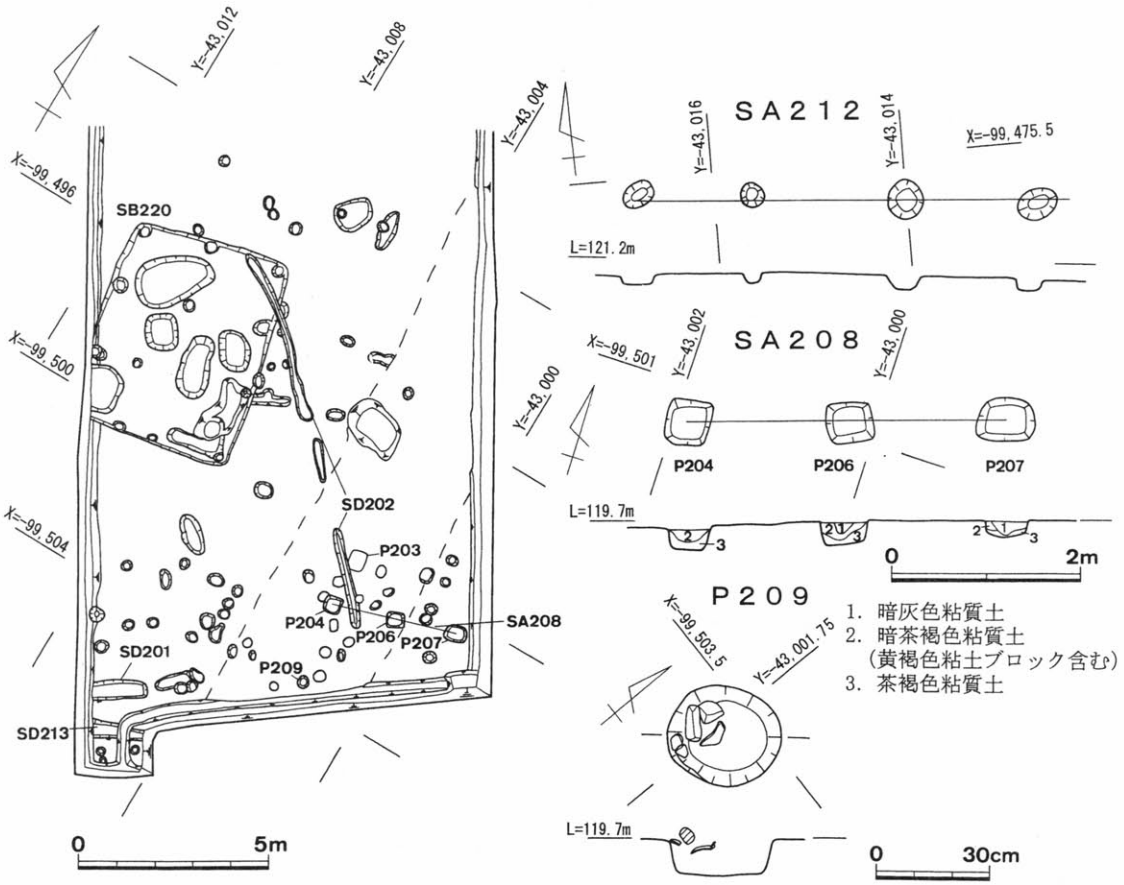
2区では、弥生時代後期～古墳時代前期と推定される大規模な溝1条や、奈良時代の建物跡1棟と柱列1基、平安時代と推定される柱穴群や小規模な溝などを確認した。

**溝ＳＤ230**(第24図)　南東で検出した大規模な溝である。北から南に向かって掘削され、幅約4ｍ、深さ約1.5ｍの規模をもつ。断面形はＶ字状をなし、その傾斜面から柱穴群が検出された。溝の埋土の堆積状況は、おおよそ最下層・下層・中層・上層に大きく分かれる。下層の堆積状況は、東側から先に土砂が流入し埋没した状況がうかがええ、ベースの黄褐色粘土の小ブロック塊が多く含まれることから、埋め戻された可能性がある。一方、中層にはシルト性の堆積がみられ、この段階には滞水する環境にあったとみられる。上層の第3層(第24図)から布留式甕1点が出土した。最下層から中層における遺物は認められず、布留式土器は、最終的な埋没の段階に廃棄されたものと考えられる。時期は古墳時代前期初頭に帰属し、溝の掘削はそれ以前に遡るものと推定される。調査範囲が限られたものではあるが、1区で検出した溝ＳＤ120とは、断面形や埋土の堆積状況が大きく異なり、現状では同一の溝とみることは困難である。

**掘立柱建物跡ＳＢ211**(第25図)　調査区中央西側で検出した建物跡である。東西1間以上×南北2間以上、柱間は約2.6～3.0ｍを測る。柱穴から土師器破片が出土したが、時期を確定できる資料ではない。柱穴の埋土や検出レベルから奈良時代から平安時代の建物跡と推定される。




第24図　溝ＳＤ230実測図

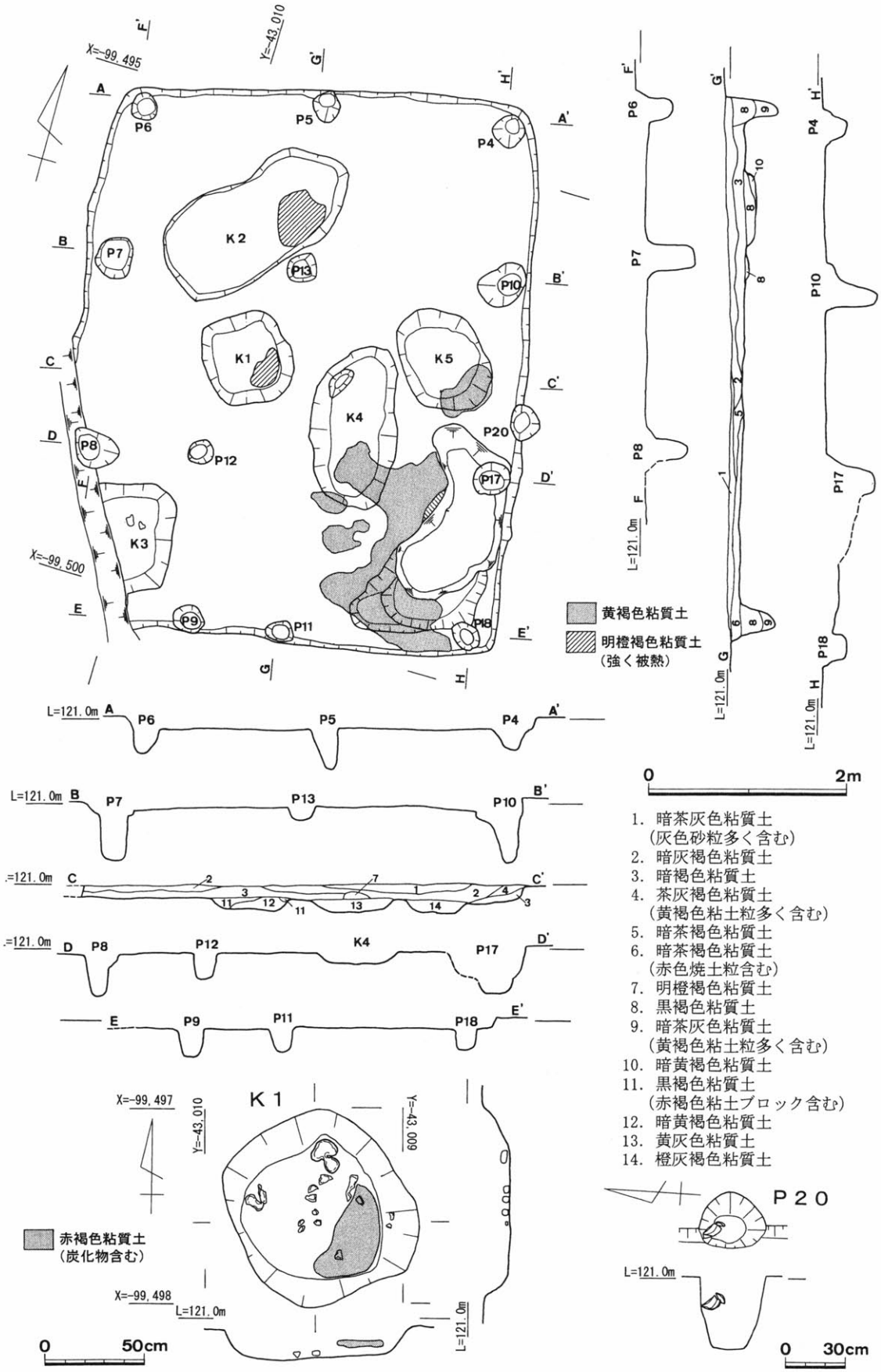



第25図　２区上層遺構配置図・柱列ＳＡ212・柱列ＳＡ208・柱穴Ｐ209実測図

**柱列ＳＡ208**(第25図)　調査区南東で検出した。東西方向に２間以上の規模をもつ柱列である。柱間の距離は、約1.7mを測る。方形の掘形をもつ柱穴から構成され、柱穴の規模は一辺約0.4mを測る。奈良～平安時代の柱列と考えられる。

**柵列ＳＡ212**(第25図)　中央西寄りで検出した。３間以上の規模をもち、柱間は1.8～2.0mを測る。平安～鎌倉時代のＳＤ201と主軸を揃えることから、同時期の柵列の可能性が高い。

**建物跡ＳＢ220**(第26・27図)　調査区南部で検出した建物跡である。長辺5.7m×短辺4.6mの掘形をもつ。検出面での深さは約0.15mを測る。柱構造は２間×３間に構成され、柱間の距離は、桁行中央が約2.0m、桁行のその他の柱間および梁間は1.8mを測る。柱は掘形の周囲に沿うように配置される。床と柱の構造から、床面を土間にした掘立柱建物跡と推定される。桁行の中央１間分の柱は、周辺よりも規模が大きく深く掘削されていることから、大きな柱材を用い、主屋を高く保つ工夫がなされていたと考えられる。南東の壁寄りに火処を設けるが、東側は削平を受けている。部分的に検出したものであるが、竈にみられる壁体は認められず、周辺に被熱した黄褐色粘質土が広く確認された(第27図)。通常の竈ではなく、蔽部をもつ炉状の構造をなす可能性がある。床面には大小の土坑が掘削され、ＳＫ２土坑の北側では椀形滓１点やガラス質の融着物(図版40ａ・ｂ)が出土し、周辺は一部赤変した部分が認められた。また竈(あるいは炉)の前提部を中心に約20点以上の土錘が出土した。土錘は焼成が不十分なものを含み、床面の土坑(ＳＫ１)

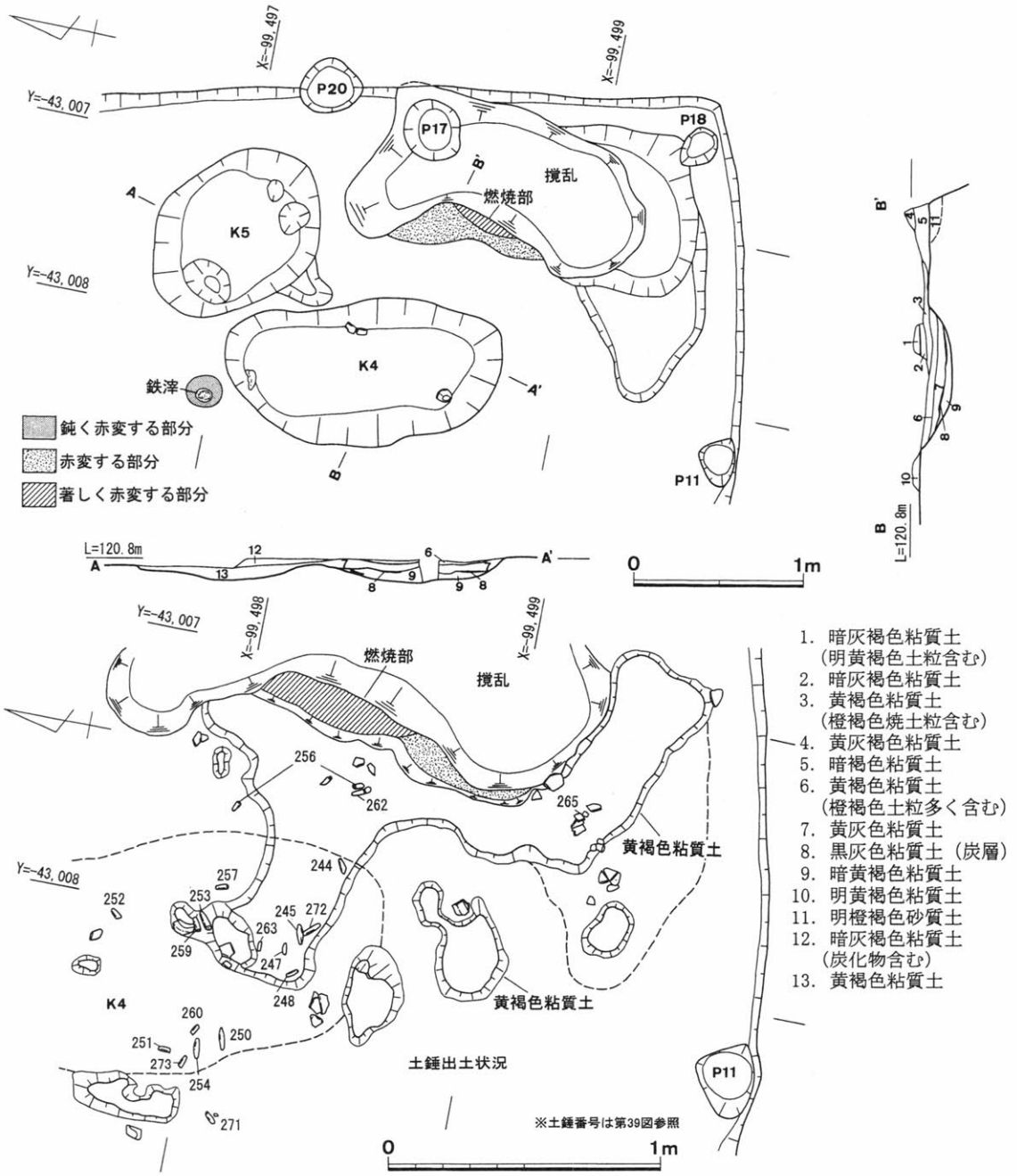



第26図　建物跡ＳＢ220実測図

から白色粘土の小さな塊が多く出土していることから、住居内で土錘を製作し、焼成を行っていた可能性がある。土間をなし、主屋を高く保つなど、火の扱いに適する工夫がなされていることから、手工業品に関わる工房と推定される。出土した土器から、奈良時代後期(８世紀後半)の建物跡であることが判明した。

**溝ＳＤ201・213**(第25図)　南西端で検出した溝群である。幅約0.4m、深さ約0.2mを測り、平行する。ＳＤ201から瓦器椀が出土し、平安時代末～鎌倉時代初期の溝であることが判明した。

**溝ＳＤ202**(第25図)　南部で検出した北西から南東に向けて掘削される溝である。幅約0.2～0.3m、深さ0.2mを測る。主軸はＳＤ201・203と直行し、同時期の溝の可能性がある。




第27図　建物跡ＳＢ220床面土坑検出状況・土錘出土状況

### 2）南地区の調査

南部調査区は、京都府教育委員会の試掘調査を受け、新たな遺跡の拡がりが確認された室橋遺跡の南部を中心に3箇所の地点に調査区を設定した（第28図）。北に7区・8区を隣接して設定し、約200m南に9区を設定した。9区は、北部調査区から南北に約600mの地点にある。周辺の地形は、北西から南西へ緩やかに傾斜する。

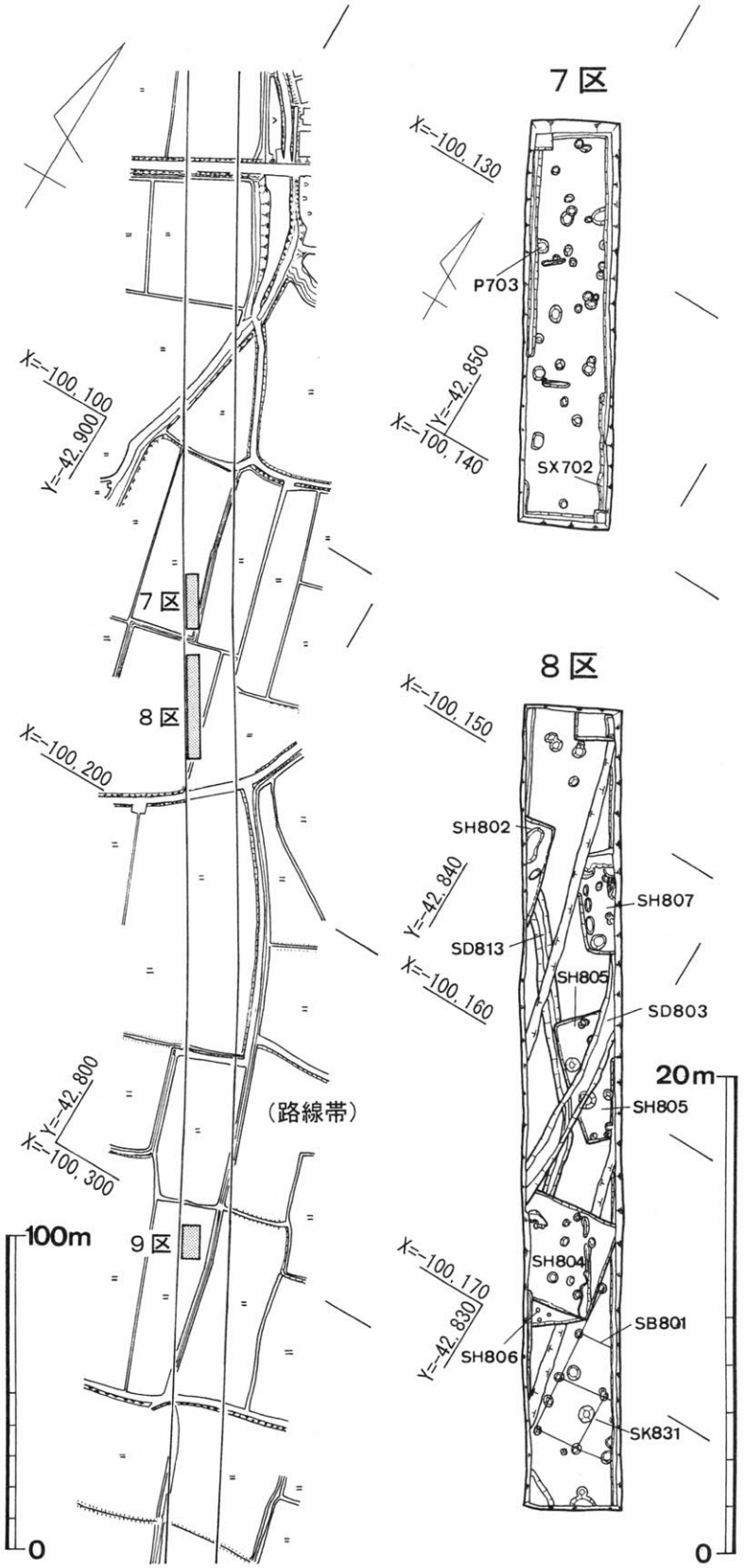
#### (i)基準層序

基準層序は、耕作土および床土を除去すると、北の7・8区では、上層から近世遺物包含層である淡灰色粘質土、黒褐色粘質土、黒灰褐色粘質土の順に堆積する。黒灰褐色粘質土はいわゆる丹波黒ボク層の再堆積とみられ、遺物は出土していない。この層位上面の標高約119.3m前後で遺構面を検出した。

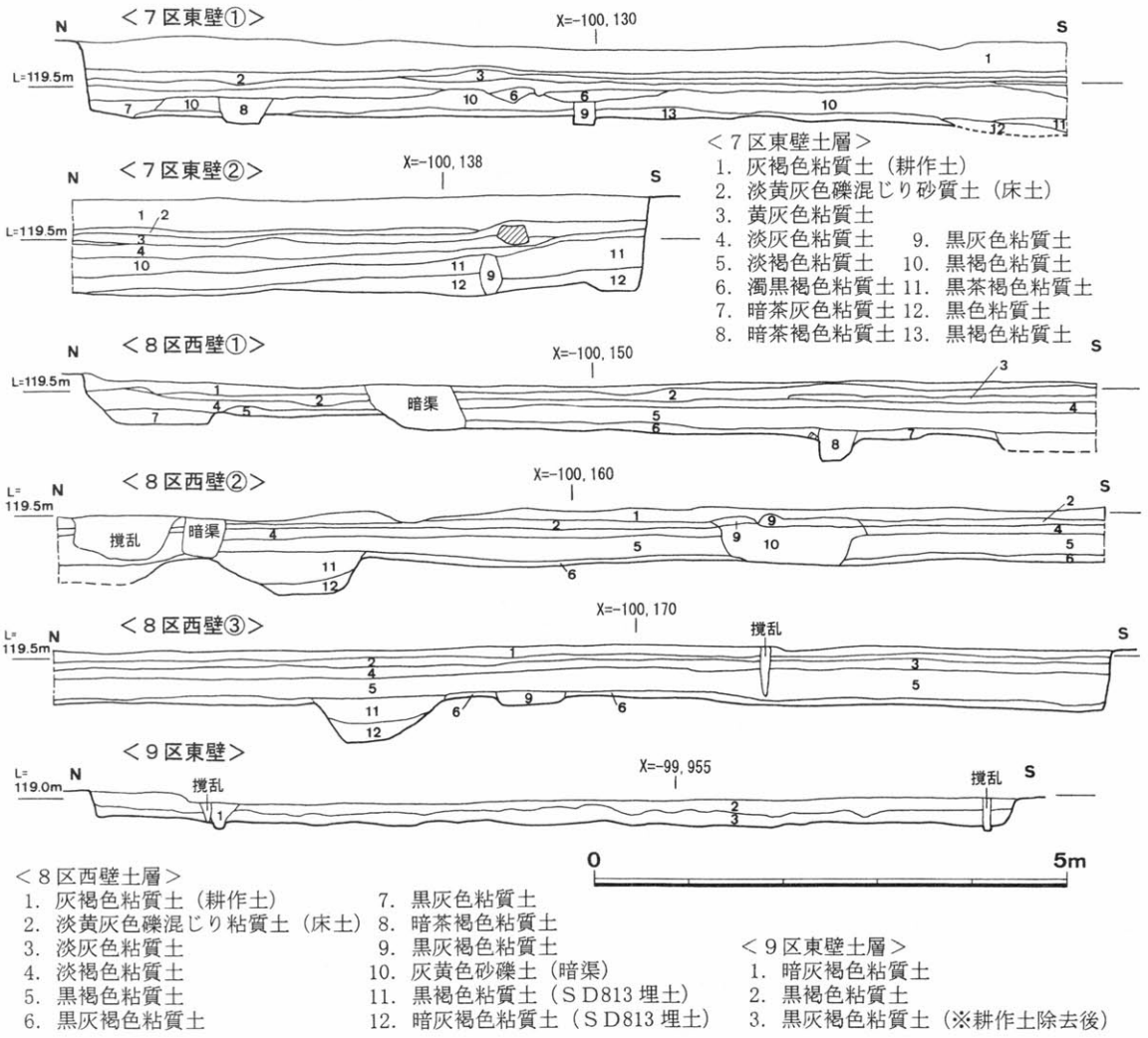
南の9区では、試掘段階に上層は除去され、黒褐色粘質土、黒灰褐色粘質土の順に堆積する。黒灰褐色粘質土の上面の標高約118.9mで遺構面を検出した。

#### (ii) 7区の検出遺構

7区は、16m×4mの調




第28図　室橋遺跡南地区調査区配置図・7区・8区平面図




第29図　室橋遺跡７～９区土層断面図

査区を設定し、64㎡を調査対象とした。遺構は、柱穴群、落ち込み１基を検出した。

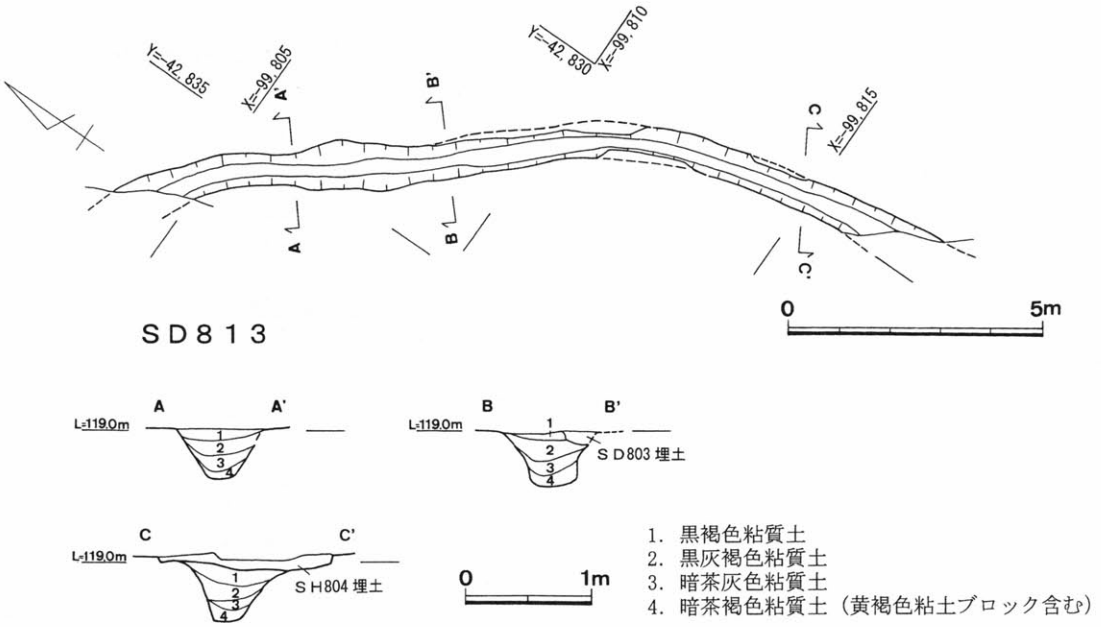
**落ち込みＳＸ702**（第28図）　調査区の南東隅で検出した。東壁に平行して検出したが、調査範囲外へ広がり、一部を確認したにすぎない。長さ5.2m以上、検出面での幅は約0.2m、深さは0.2mを測る。東へ向かってさらに傾斜するように下がる。溝の肩部か、竪穴式住居の一部とみられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

**柱穴Ｐ703**（第28図）　調査区の中央西端で検出した柱穴である。直径約0.3m、深さ0.2m測る。柱穴内から、土師器高杯の一部が出土した。時期は、古墳時代中期前半に帰属するものとみられる。

柱穴は20基以上検出したが、遺物は出土していない。調査範囲のなかでは、建物跡や柱列を復元するには至らなかった。

**(iii) ８区の検出遺構**

８区は、７区の南東に34m×４mの調査区を設定した。調査面積は、136㎡を測る。検出遺構は、弥生時代中期の溝１条、古墳時代後期の竪穴式住居跡５基、平安時代の掘立柱建物跡１棟、奈良～平安時代の溝１条、土坑等である。遺構面は２面あり、上面では古墳～平安時代の遺構を



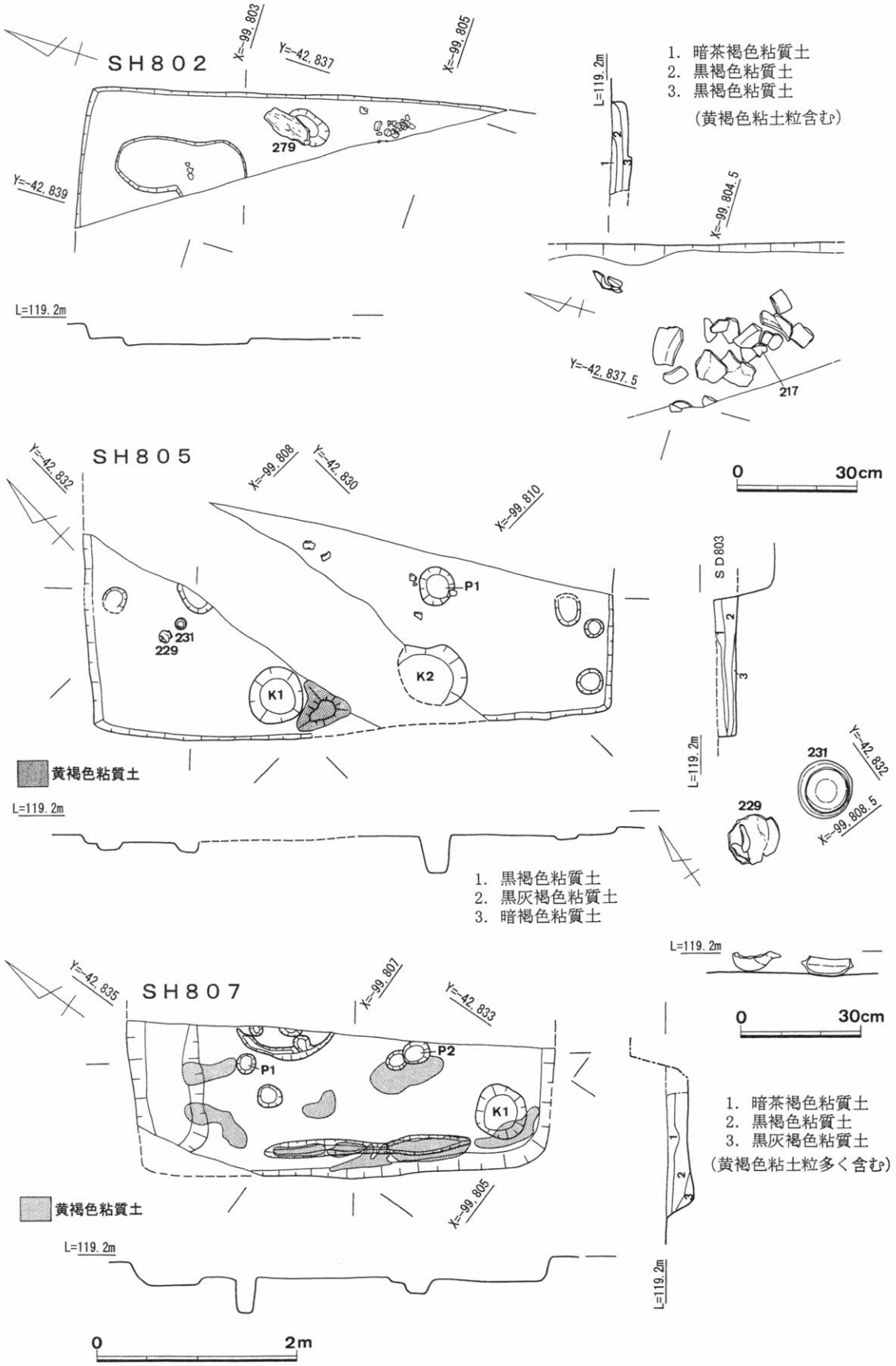

第30図　溝ＳＤ813実測図

検出し、約10cm下層で弥生時代中期の遺構を検出した。

**溝ＳＤ813**(第30図)　調査区中央西寄りで検出した溝である。北西から南へ向けて掘削され、溝の中央で緩やかに屈曲する。長さ約17mにわたって検出した。規模は、幅約0.8～1.1m、深さ約0.5mを測り、断面は台形状をなす。埋土に砂礫をほとんど含まず、シルト性の堆積も顕著でないことから、区画溝として掘削され、比較的短期間のうちに埋没したとみられる。溝内から、壺(第38図236)の一部や甕の体部片が出土し、時期は弥生時代中期後半と推定される。

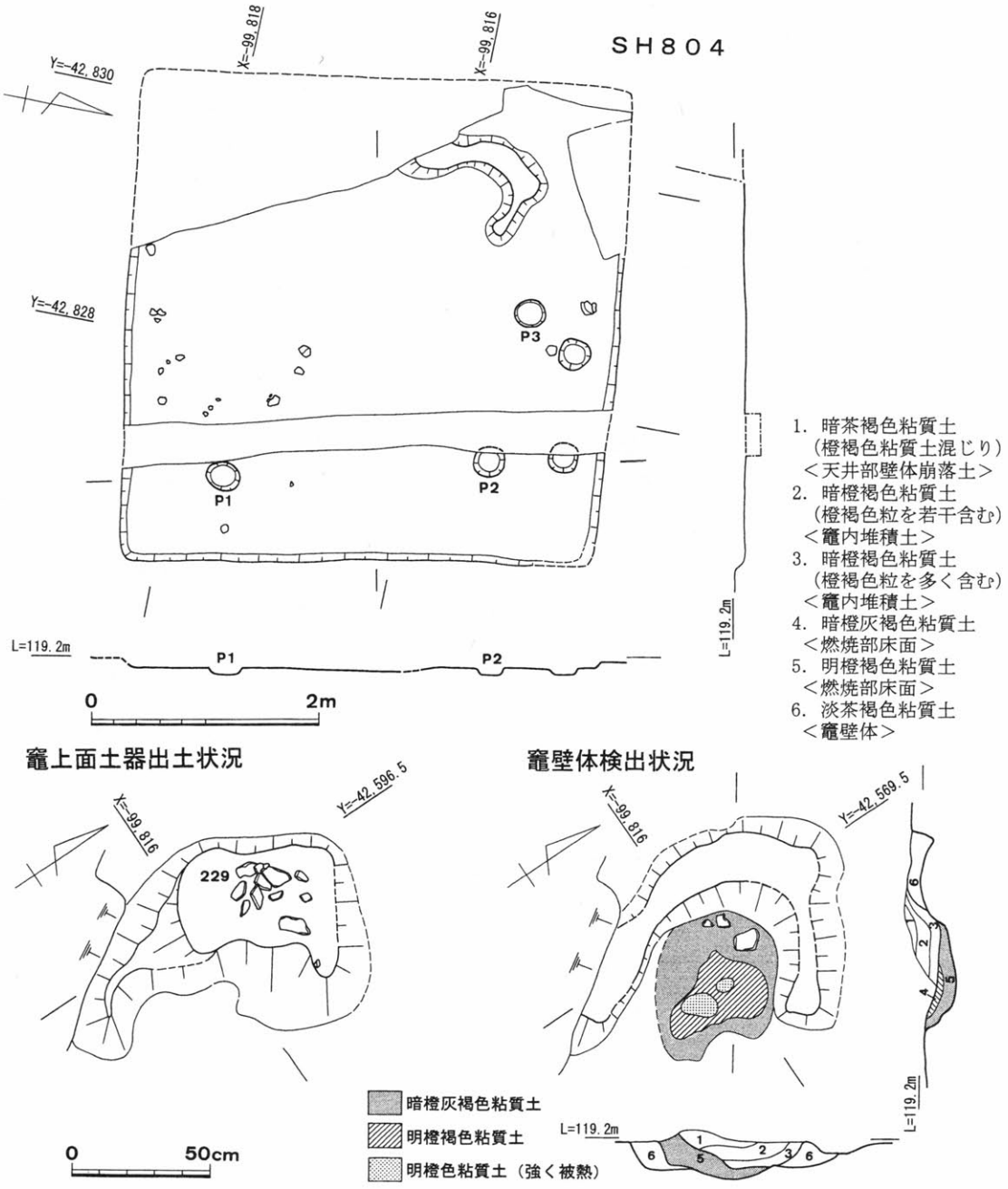
**竪穴式住居跡ＳＨ802**(第31図)　北部で検出した住居跡である。住居床面の一部を検出した。方形プランであるが、規模等は不明である。残存長は、東辺で約4.2m、深さ約0.2mを測る。床面からは小形の土坑と、楕円形状の広がりをもつ浅い土坑を検出した。楕円形状の土坑は長さ約1.3m、幅約0.6mの規模をもつ。出土遺物は、小形土坑の周囲で台石とみられる大形の粘板岩が出土し、楕円形土坑からは土師器甕の一部が、また床面南側で土師器甕(第38図217)が出土した。出土土器から、時期は古墳時代中期末～後期前葉とみられる。

**竪穴式住居跡ＳＨ805**(第31図)　調査区中央部で検出した方形の住居跡である。住居床面の西側を検出したが、床面中央は溝ＳＤ803によって大きく削平される。規模は１辺約5.3m、深さ約0.3mを測る。床面から柱穴群と２基の土坑を検出した。柱構造は、南東床面の柱穴(Ｐ１)が周囲の柱穴よりも深く、主柱穴と考えられる。本来、対応する位置にある北西の柱穴は、溝ＳＤ４によって削平されたとみられることから、対角をなす４基の主柱で構成されるものと推定される。また住居の南西辺に平行に配置される２基の土坑(Ｋ１・Ｋ２)は、規模をほぼ等しくし、直径約0.6m、深さ約0.3mを測る。出土遺物は、床面北西で須恵器杯身１点(第38図231)と土師器甕１点(同229)が出土した(第31図)。また埋土から、土師器甕や須恵器が出土している。出土土器のうち、須恵器は陶邑編年ＴＫ23～47型式に帰属するものであり、古墳時代中期末～古墳時代後期前葉とみられる。




第31図　竪穴式住居跡ＳＨ802・ＳＨ805・ＳＨ807実測図

**竪穴式住居跡ＳＨ807**(第31図)　調査区北部で検出した方形の住居跡である。住居の西半分を検出し、規模は１辺約4.2m、深さ約0.25mを測る。床面から柱穴４基と土坑１基を検出した。主柱穴は、床面の北西(Ｐ１)と東西(Ｐ２)にあり、径0.25～0.3m、深さ約0.35mを測る。南西床面で検出した土坑は、直径0.5m、深さ0.3mの円形を呈する。また住居南西の壁体に沿って、周壁溝を検出した。幅約0.2m、深さ約0.1mの規模をもつ。さらに住居北西の壁体に沿って、幅0.7m、深さ0.1mの溝状遺構を検出した。周壁に沿ってこうした幅広の溝が巡る古墳時代の竪穴式住居は、南丹波では南丹市池上遺跡や亀岡市余部遺跡にも類例があり、除湿の機能にかかわる

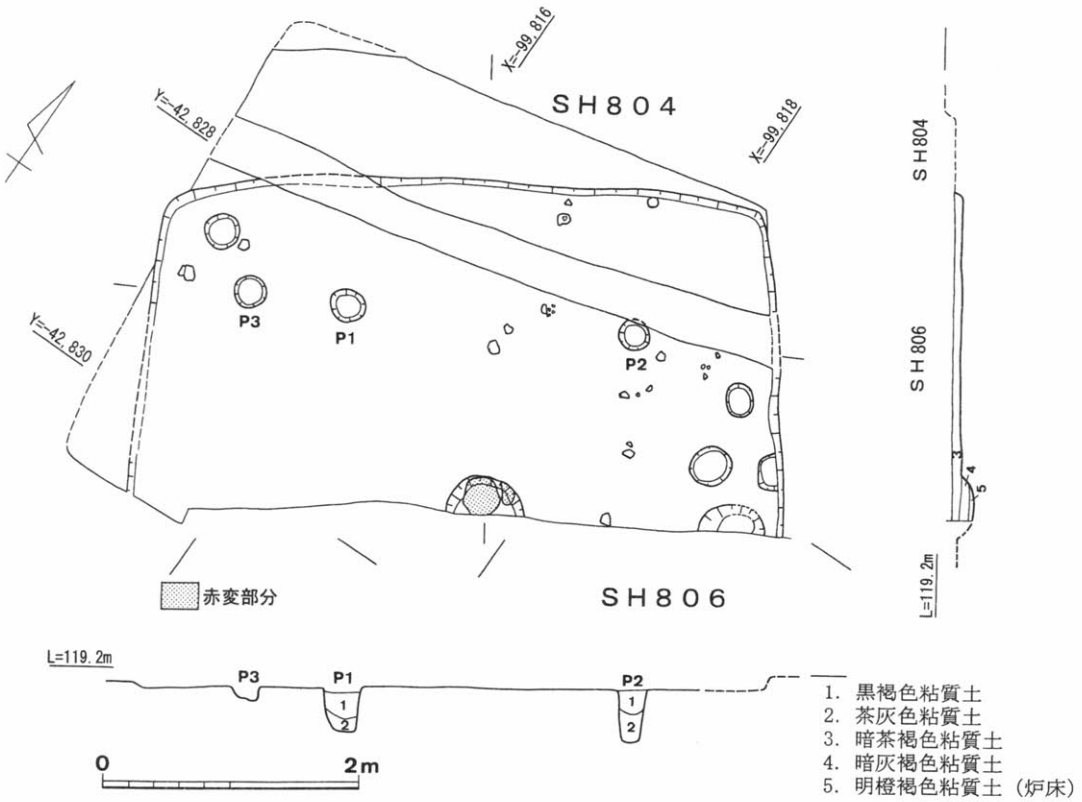



第32図　竪穴式住居跡ＳＨ804実測図

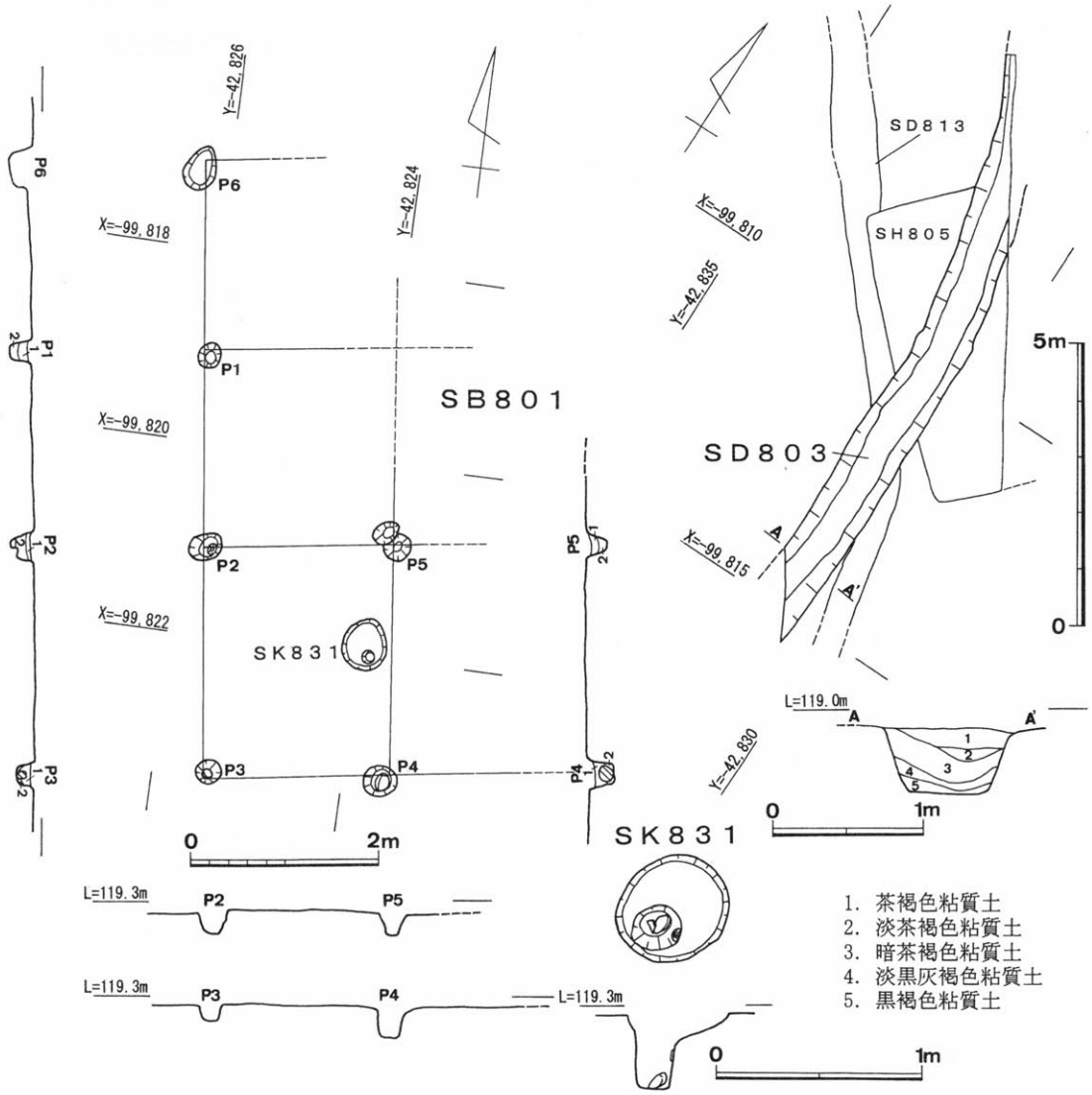
と推定される。住居の中央寄りでは、弧状に巡る幅0.1m、深さ５cmの溝状遺構を部分的に検出した。また床面には広く黄褐色粘質土の広がりが確認できる。床面直上で検出されるものが多く、住居屋根上から落ち込んだものとは考えられない。壁体に沿って特に多く出土している。出土遺物はわずかながら甑の一部が出土し、時期は古墳時代中期～後期前葉とみられる。

**竪穴式住居跡ＳＨ804**(第32図)　調査区南部で検出した竪穴式住居跡である。ＳＨ806の床面を大きく削平して構築されている。規模は、１辺約4.3mを測る。平面プランは方形で、北西隅に造り付け竈をもつ。主柱は、３基(Ｐ１～Ｐ３)を検出した。柱構造は４基から構成されるとみられるが、南西隅は調査範囲外にあたる。また竈寄りの主柱穴(Ｐ３)は対角線上にはなく、西寄りに配置される。竈は北西隅で検出した。幅約0.9m、長さ約0.8mの馬蹄形状を呈する。また燃焼部中央には石製支脚が据えられている。出土遺物は、竈内から土師器椀(第38図223・226)が出土し、埋土中から布留式甕の一部や須恵器が出土した。土師器椀は竈の廃絶に伴う祭祀に関わる可能性がある。埋土中から出土した須恵器は陶邑ＴＫ23～47型式であり、土師器椀とおおよそ同時期に帰属し、住居の時期を古墳時代中期末～後期前葉とみることができる。細片となり出土した布留式甕は、先行するＳＨ806に伴うものとであろう。

**竪穴式住居跡ＳＨ806**(第33図)　ＳＨ804と重複して検出した方形の住居跡である。１辺約5.2mを測る。ＳＨ806の床面は、ＳＨ804によって大きく上層が削平されるが、ＳＨ804よりも約５～10cm深く、床面はほぼ遺存していた。主柱穴は、北西と北東の床面で検出し(Ｐ１・Ｐ２)、４主柱で構成されるとみられる。主柱穴の規模は、径約0.3m、深さ約0.4mを測る。住居の中央床




第33図　竪穴式住居跡ＳＨ806実測図




第34図　掘立柱建物跡ＳＢ801・土坑ＳＫ831・溝ＳＤ803実測図

面で、炉跡とみられる強い被熱痕跡をもつ焼土坑を検出した。径約0.6m、深さ約0.1mを測る。出土遺物は、図化するに足る資料は出土していないが、ＳＨ804の埋土中に含まれる布留式甕の一部が伴うものである可能性が高く、時期は古墳時代中期中葉と推定される。

**掘立柱建物跡ＳＢ801**（第34図）　調査区南部で検出した総柱の建物跡である。東西１間以上×南北３間の規模をもち、東側の調査区外に広がる。柱間は、約2.0～2.3mを測る。主軸は６度西に振る。柱穴の規模は、径0.25～0.35m、深さ0.2～0.35mを測る。南辺の柱列には、根石をもつ柱穴（Ｐ３・４）が認められる。柱穴から土師皿が出土し、平安時代後期～末の建物跡と推定される。

**土坑ＳＫ831**（第34図）　ＳＢ801と重複して検出した円形の土坑である。規模は、径約0.5m、深さ0.35mの円形を呈する。断面は２段に掘り込まれ、２段目の掘形は、径約0.5m、深さ0.25mを測る。遺物は、土師器羽釜の一部、土師皿が出土した。時期は、平安時代後期～末と推定され、ＳＢ801の関連遺構の可能性がある。

**溝ＳＤ803**(第34図)　調査区中央で検出した溝である。ほぼ正方位をとり、北から南に向けて、約10mにわたって検出した。溝の断面形は逆台形状をなす。埋土には砂礫を多く含まないことから、流路ではなく区画溝として機能していたと考えられる。溝の幅は約1.1m、深さ約1.2mを測る。出土遺物は、竪穴式住居ＳＨ805を削平した際の混入とみられる土器以外に認められないが、調査区南部で検出したＳＢ801と主軸を揃えることや、検出レベルや、埋土の状況から平安時代に帰属する溝と推定される。

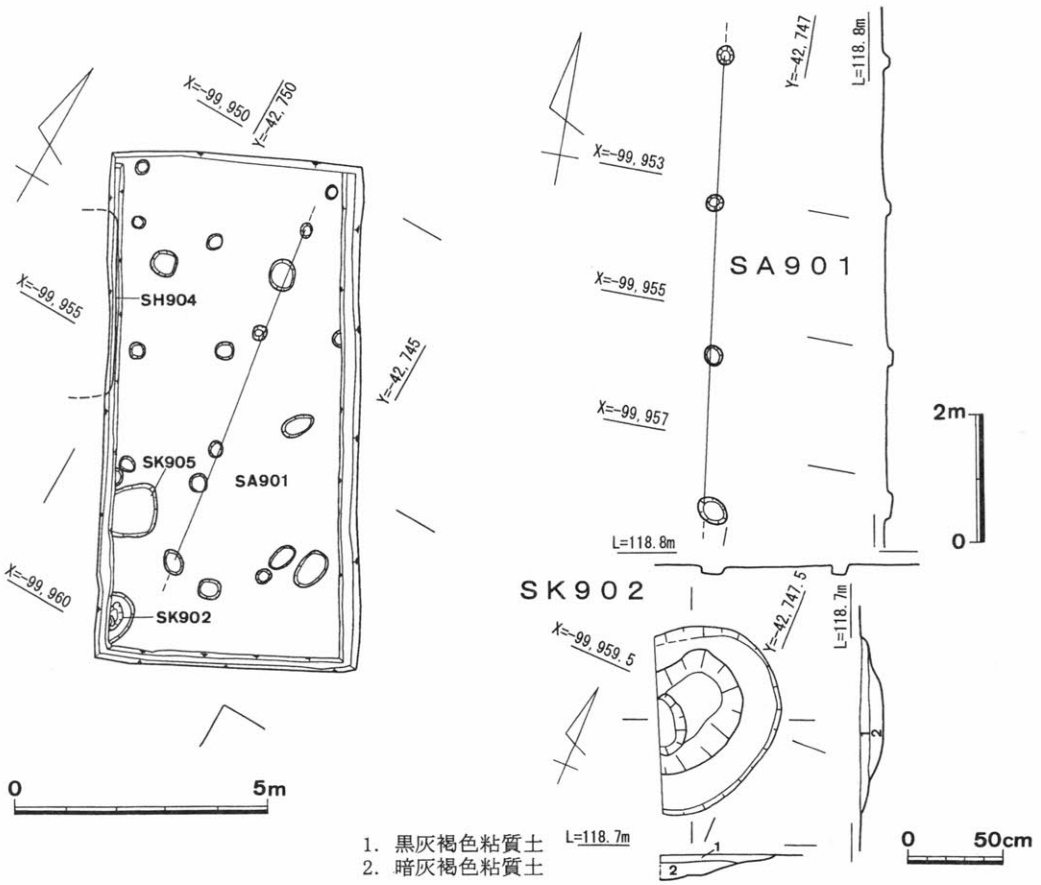
**（iv）９区の検出遺構**

９区は、最も南に位置する調査区で、８区南端から約200m離れた地点にある。調査区は10m×５mに設定し、50m²を対象とした。検出した遺構は、竪穴式住居跡１基、柱列１基を含む柱穴群、土坑２基等である。

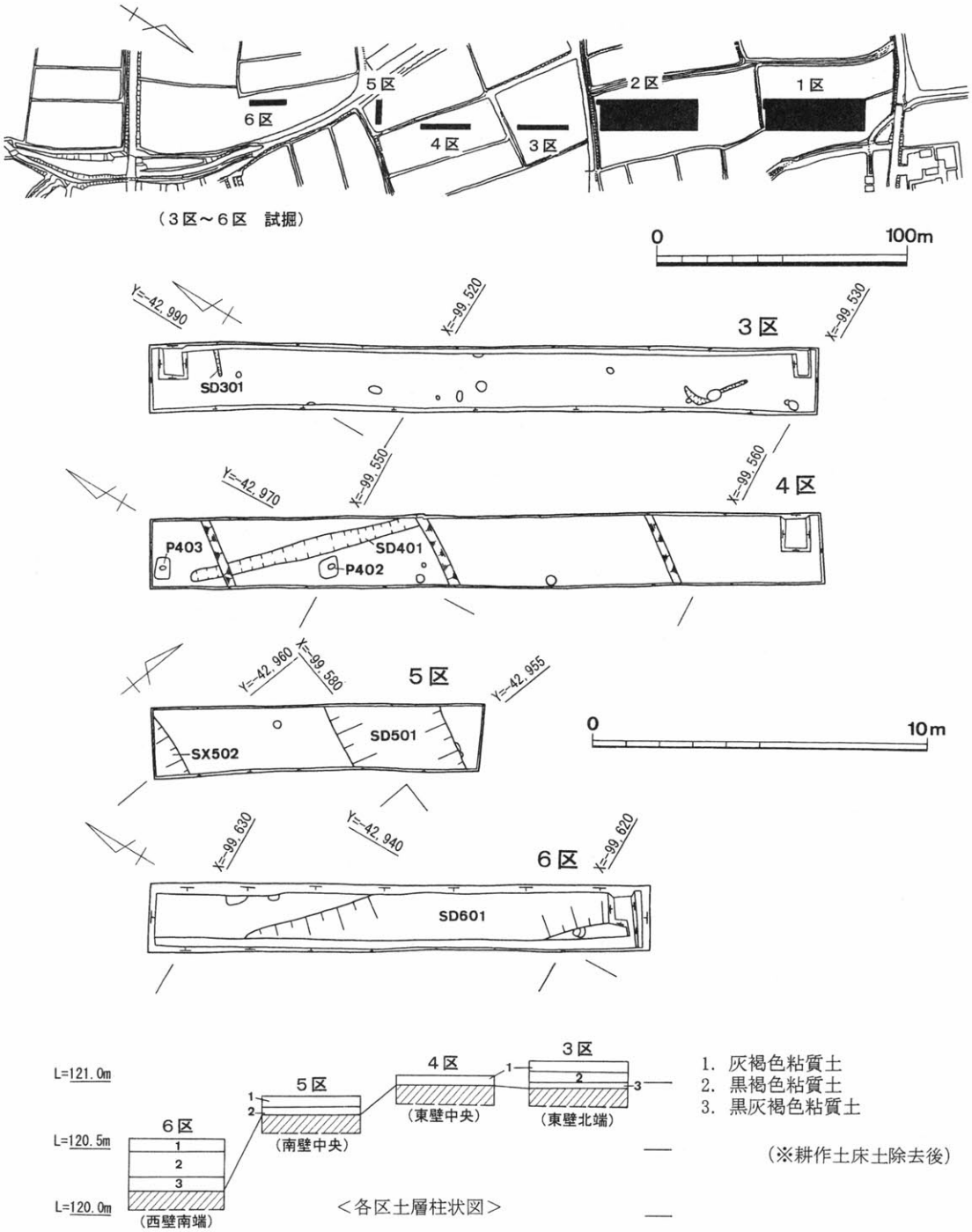
**竪穴式住居跡ＳＨ904**(第35図)　調査区のほぼ中央西端で１辺約3.9mの方形の掘形を検出した。西側のほとんどは調査区外となり一部を検出したに過ぎないが、隣接して行われた試掘の成果などから、古墳時代の竪穴式住居跡とみられる。

**柱列ＳＡ901**(第35図)　調査区中央を斜めに走る南北方向の柱列である。南北に３間以上の規模をもち、柱間の距離は約2.3mを測る。主軸は５度西に振る。時期は不明である。

**土坑ＳＫ902**(第35図)　調査区南西で検出した土坑である。平面形は楕円形状をなし、径約1.0m、深さ約0.15mを測る。断面は２段に掘り込まれる。遺物は出土せず、時期は不明である。




第35図　９区遺構配置図・柱列ＳＡ901・土坑ＳＫ902実測図




第36図　室橋遺跡試掘地点遺構配置図

### 3）試掘調査

室橋遺跡５次調査に並行して、北部調査地点において４箇所の試掘調査を実施した（第36図）。３～６区を合わせて調査面積は、130㎡を対象とした。

３区は、耕作土下、灰褐色粘質土・黒褐色粘質土・黒灰褐色粘質土の順に堆積し、黒褐色粘質土の上層で遺構面を検出し、耕作に伴う素掘り溝とみられる溝１条のほか、柱穴群を検出した。

４区は、耕作土の直下で、遺構面を検出した。耕作に伴うとみられる素掘り溝１条、１辺約50cmの方形の掘形をもつ柱穴２基を検出した。

５区は地形的な制約から東西方向に調査地を設定した。層位は、耕作土の下に灰褐色粘質土が堆積し、その直下でベース面を確認した。東西方向に調査地を設定し、幅約3.0mの溝１条と西側へ傾斜する落ち込み１条を検出した。

６区は、耕作土下、灰褐色粘質土、黒褐色砂礫混じり粘質土の順に堆積し、その直下のベース面で遺構を検出した。検出遺構は、幅約3.5mの溝１条と柱穴３基を検出した。

（３）出土遺物

（i）１区出土土器

**溝ＳＤ120**（第37図）　182・183は、溝の下層から出土した弥生土器である。182は、直口壺の口縁部で、口径11.9cmを測る。183は、擬凹線文系の有段口縁壺である。口径13.2cmを測り、口縁部に４条の擬凹線を施す。胎土には、石英・長石のほか泥岩やチャートを含む。色調は淡褐色を呈する。時期は弥生時代後期後葉～古墳時代初頭とみられる。184～186は、溝上層から出土した。184は、土師器の鍋である。口径46.2cmを測る。185は須恵器壺の肩部である。時期はおおよそ奈良時代後期に帰属するとみられる。

**１区包含層**（第37図）　186～188は包含層から出土した。186は、須恵器壺底部である。187は、龍泉窯系青磁椀である。内面に陰刻文が施される。188は、東海の灰釉椀である。内面を施釉し、外面は露胎である。口径15.0cm、高さ5.7cmを測る。

（ii）２区出土土器

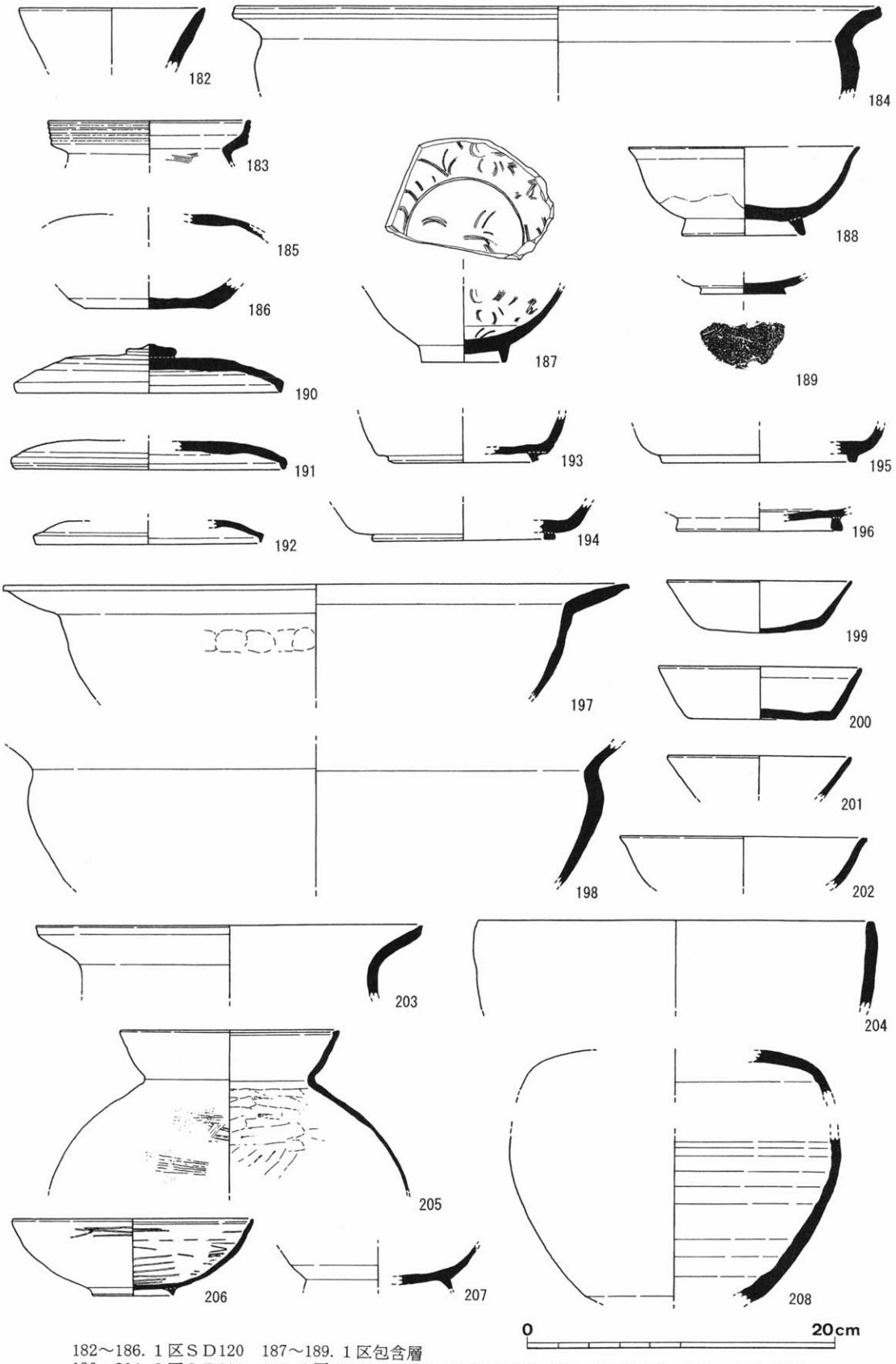
**掘立柱建物跡ＳＢ220**（第37図）　189～204はＳＢ220から出土した。189は底部に糸切り痕をもつ須恵器椀である。190・191は、須恵器杯蓋である。190は、宝珠つまみをつけ、口径17.2m、高さ3.2cmを測る。193～196は、高台をもつ須恵器杯Ｂである。199・200は須恵器杯Ａである。199は、口径12.0cm、高さ3.5cm、200は口径13.2cm、高さ3.4cmを測る。197・198は、土師器鍋である。197は、口径約40.8cmを測る。203は、土師器甕口縁である。口径25.3cmを測る。須恵器はおおよそ平城宮Ⅲ～Ⅳ期に該当し、８世紀中葉～後葉に帰属する。

**溝ＳＤ230**（第37図）　205はＳＤ230から出土した布留式甕である。口縁部は長く上方に拡張し、口縁端部の肥厚は短く薄く仕上げられている。体部は特に丁寧なヘラケズリが施され、器壁は極めて薄く約３㎜の厚さを保つ。器表は摩耗しているが、肩部に横方向のハケが認められる。胎土は花崗岩組成で細砕した石英・長石を多く含む。甕の型式は布留１式に該当し、時期は古墳時代前期前葉と推定される。

**溝ＳＤ205**（第37図）　206は、試掘段階の第３次調査で出土していた瓦器椀である。外面には粗いヘラミガキが上半部のみに認められ、内面にやや粗い圏線ヘラミガキ、見込みに粗いジグザグ状のヘラミガキがわずかに確認できる。口縁端部には沈線が施され、底部は断面三角形の高台をつける。口径15.6cm、器高5.2cmを測る。おおよそ12世紀後半に帰属する。

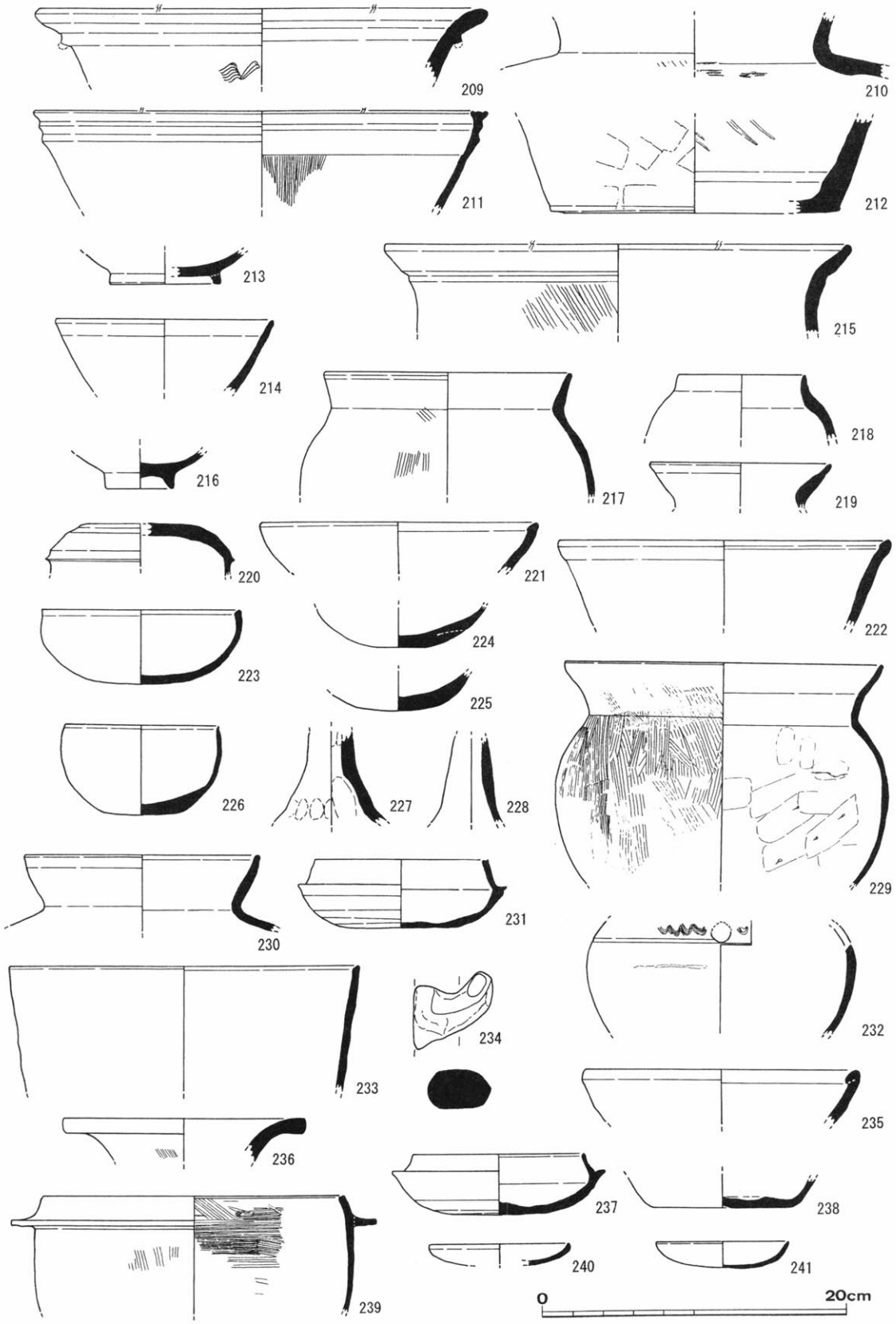
**柱穴Ｐ117**（第37図）　207は、調査区南西隅の柱穴から出土したものである。高台をもつ須恵器杯である。破片であるため、時期の確定は困難だが、おおよそ平安時代前期と推定される。

**２区包含層**（第37図208・第38図209～213）　208～213は、２区包含層中から出土した。208は、




182～186．１区ＳＤ120　187～189．１区包含層
190～204．２区ＳＢ220　205．２区ＳＤ230　206．２区ＳＤ205　207．２区Ｐ117　208．２区包含層

第37図　室橋遺跡出土遺物実測図（１）




209～213. ２区包含層　214. ４区Ｐ401　215. ６区ＳＤ601　216. ７区包含層　217～219. ＳＨ802
220～229. ８区ＳＨ804　230～232･234. ８区ＳＨ805　235. ８区ＳＨ807　236. ８区ＳＤ813　233. ＳＤ803
237. ８区北部包含層　238. ８区東排水溝　239･240. ８区ＳＫ831　240. ８区ＳＢ801－Ｐ２

第38図　室橋遺跡出土遺物実測図（２）

調査区南部で出土した須恵器壺である。壺の肩部は大きく張り、時期はおおよそ平安前期と推定される。209・210は、須恵器壺である。南部包含層から出土した。209は、口縁外面に断面三角形の突帯を付す壺口縁部である。口径28.3cmを測る。時期は、古墳時代後期と推定される。212は、調査区の南東隅で出土した。大形の壺底部の一部である。平安時代に帰属するものとみられる。211は、丹波焼の擂り鉢である。調査区南部で出土した。江戸前期と推定される。213は、高台付きの須恵器である。

(iii) 4区～7区出土土器

**柱穴Ｐ401**　214は、試掘調査区の6区で出土した須恵器杯である。平安時代に帰属する。

**溝ＳＤ601**　215は、土師器甕の口縁部である。平安時代前期の資料と推定される。

**7区包含層**　216は、染付底部である。江戸時代前期と推定される。

(iv) 8区出土土器

**竪穴式住居跡ＳＨ802**　217～219は、ＳＨ802から出土した。217は、「く」の字口縁をなす土師器甕である。口径は、16.2cmを測る。218・219は、土師器小形壺である。

**竪穴式住居跡ＳＨ804**　220～229は、ＳＨ804から出土した。220は須恵器杯蓋である。口径が小さくシャープな稜をなす。陶邑ＴＫ23～43型式と推定され、古墳時代中期末～後期前葉とみられる。221・222は、布留式甕の口縁部である。重複して検出したＳＨ806からの混入遺物とみられる。223～226は、土師器椀であり、227・228は高杯脚部、229は、粗製の甕である。

**竪穴式住居跡ＳＨ805**　230～233は、ＳＨ805から出土した。230は、「く」の字甕の口縁部で口径15.4cmを測る。231は須恵器杯身である。口径11.4cm、器高4.6cmを測る。232は、大形の須恵器ハソウの体部である。

**竪穴式住居跡ＳＨ807**　235は、布留式甕の口縁部である。古墳時代中期中葉と推定される。

**溝ＳＤ813**　236は、小形広口壷の口縁部である。口径約15.8cmを測る。弥生時代中期後半と推定される。

**溝ＳＤ803**　233は、甑の口縁部とみられる。口径約23.0cmを測る。住居からの混入であろう。

**北部包含層・東排水溝**　237は、北部包含層から出土した須恵器杯身である。陶邑ＴＫ10型式に該当し、古墳時代後期中葉とみられる。238は、東排水溝から出土した須恵器壺底部である。

**土坑ＳＫ831**　239は土師器羽釜で、240は土師器小皿である。12世紀後半の資料である。

**掘立柱建物跡ＳＢ801－Ｐ２**　241は、土師器小皿である。12世紀後半と推定される。

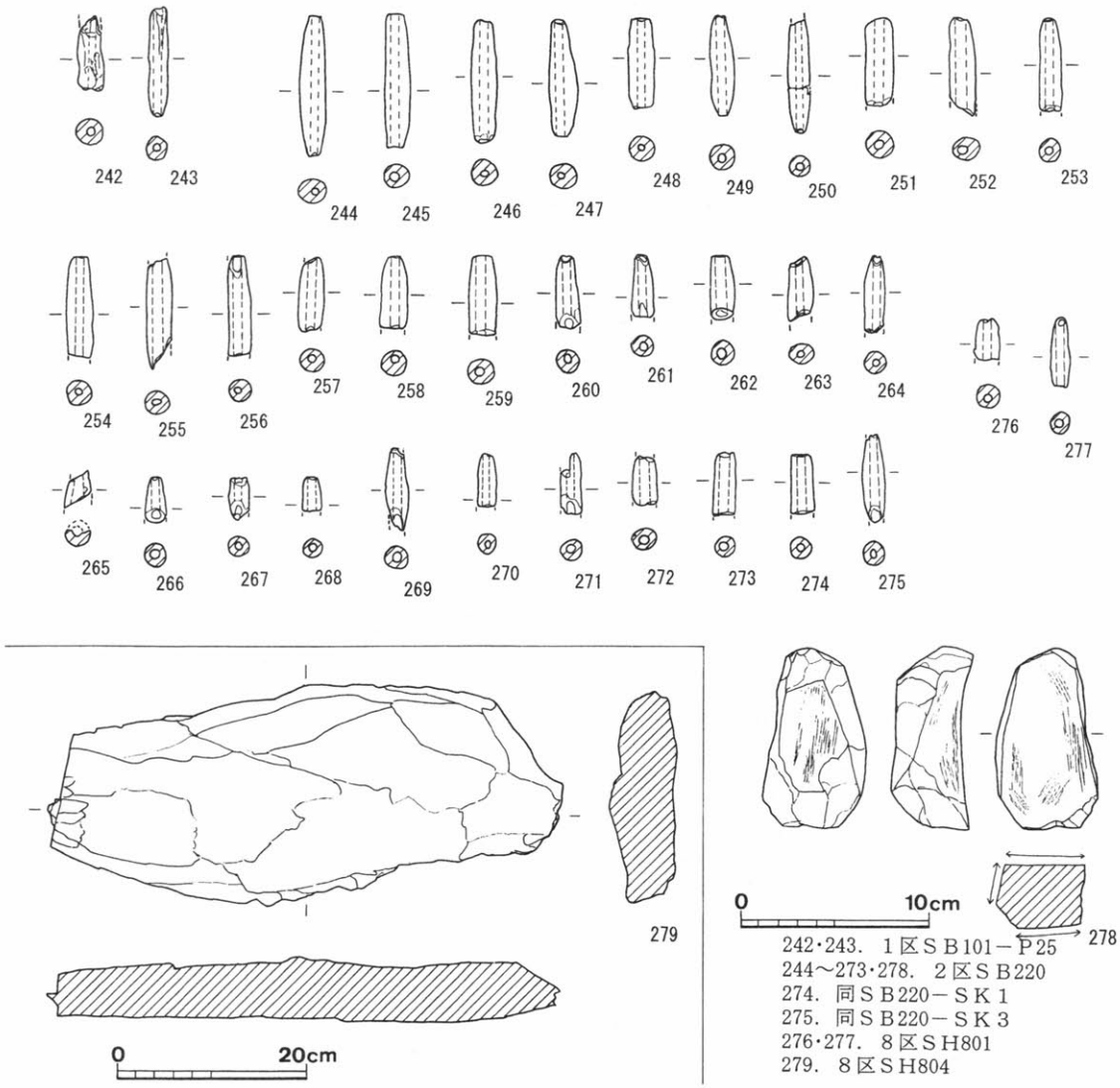
(v) 1～8区出土土製品・石製品（第39図）

1区

**掘立柱建物跡ＳＢ101**　Ｐ25から出土した。242・243は、土錘である。243は、長さ5.7cm、重さ6.96ｇを測る。器表の剥離が著しい。

2区

**掘立柱建物跡ＳＢ220**　244～275は、土錘である。完形品はわずかであるが、長さは7cm前後のもの(244～247)と、5cm前後のもの(248・249)と、大きく2タイプに分けることができる。長




第39図　室橋遺跡出土遺物実測図（３）

いタイプは、約11～13ｇを測り、短いタイプは約６～９ｇを測る。全体に厚みがあり、厚さ約1.4～1.5cmのものを基準とする。250・253・258・263・265・269は、焼成不良である。278は、頁岩製の砥石である。全長9.6cmを測る。仕上げ砥石とみられ、砥面は３面に認められる。

８区

**掘立柱建物跡ＳＢ801**　276・277は、土錘である。ほぼ完形の277は、長さ3.6cm、厚さ1.25cmを測る。ＳＢ220出土の土錘より小さく、重さは3.3ｇを測る。

**竪穴式住居跡ＳＨ804**　279は、床面から出土した粘板岩製の台石である。長さ54cmを測る。

## ５．まとめ

野条遺跡の調査では、奈良時代の溝や、平安時代の掘立柱建物跡群、井戸、溝などを検出した。平安時代の遺構は、主に、後期のものであるが、11世紀後半と、12世紀前半～中頃に大きく分かれる。11世紀後半の遺構は溝が主なものであるが、12世紀前半～中頃の遺構は掘立柱建物跡や井戸などがあり、この時期には集落が営まれていたことが判明した。

調査地における12世紀の遺構群は正方位をとり、１区の北半部では規格性の高い掘立柱建物群を検出した。東西の桁行長を揃え、南北に近接して建てられていることから、穀倉などの倉庫群の可能性がある。さらに１区では、中央で東西の溝(溝ＳＤ１)を検出し、その南で掘立柱建物群や柵列、井戸などを検出し、南北において建物配置が大きく異なることが判明した。北部は公的な建物を配置し、南部は居住空間として屋敷地とし、溝ＳＤ１は区画溝として機能していたと推定される。ただし部分的な検出であるために、溝ＳＤ１が北部建物群か南部の屋敷地のどちらか一方を囲繞する溝である可能性も否定できない。北部の建物群が倉庫群であるとすれば、溝は区画溝として防御的な機能をも兼ね備えていた可能性もある。

現在、周辺では、耕作地の畦畔は正方位を向き、方格地割が確認できる(注5)(第40図)。調査地東に位置し天井川となっている官山川は、諸木山北部の山裾から流れ、調査地南東で直角に東へ屈曲し、１町分を東進したところで南折する。北から東へ大きく屈曲する調査地南東の屈曲点の周辺には「六ノ坪」とする小字名が残る。条里制の「千鳥式」の坪付では、１町四方の南西隅は「六

第40図　野条遺跡周辺の地割

坪」にあたり、小字名との関連をうかがわせる。官山川の東西１町分の流路を北に展開する一町四方の区画の南辺と捉えて一帯の条里型地割を復原した場合、官山川の屈曲する流れは里境に対応し、調査地周辺に残る地割は条里型地割が反映している可能性が高い。そのうえで、今回検出した溝ＳＤ１の位置を条里型地割のなかに位置づけると、１町四方の区画のほぼ半町を画する位置にあることがわかる。溝を境に正方位をとる建物群と合わせ、12世紀の遺構配置は計画的な土地利用に基づくものであったと考えられる。こうしたことから現在周辺にみられる方格地割は、古代の土地区画制度である条里制に由来するものと考えられる。

12世紀前半の集落が、この地割に沿って営まれたと考えられる一方、８世紀の奈良時代の溝（ＳＤ208）、11世紀後半の溝（ＳＤ201）は、北西から南東に向けて斜行して掘削され、方格地割との関係を想定することはできない。溝ＳＤ201は特徴的な砂礫の堆積状況を示すことから流路とみられ、灌漑用水と考えられるが、これと規模・堆積状況の酷似した溝が、南西第９次調査地点でも検出され、出土遺物から同時期に掘削された溝と考えられる。両地点は約350m以上離れており、12世紀前半の大規模開発に先行して、少なくとも11世紀代にも周辺一帯に斜行するこれらの溝を中心とした灌漑用水の整備が広く行われたとみられる。そして一帯の従来の地割を一変させる大規模な区画整備と開発は、規格性の高い建物群の出現に一致する12世紀前半に行なわれたと考えられる。野条遺跡の調査のなかで特に注目される遺物としては、滑石製の分銅とみられる石製品がある。12世紀前半の掘立柱建物跡ＳＢ12の柱穴から出土したもので、秤量具として用いられたと考えられる。古代の権衡資料は都城、官衙遺跡を中心に出土しているが、その類例は少なく、帰属時期の確実なものではこれまで30例程度が明らかになっているにすぎない。(注6) 秤量具の素材は様々であるが、奈良時代には都城を中心に銅製が多く出土し、平安時代にはより入手しやすい材質の石製品が増加する（第41図）。野条遺跡にみられるような石製分銅は平安時代に地方官衙の周辺で出土する傾向がある。今回検出した遺構群は、地割に沿った規格性の高い配置をなし、さらに建物群の柱穴から度量衡にかかわる秤量具や白磁が出土したことから、一般集落ではなく、受領や在地領主などの屋敷地あるいは荘園経営に関連する建物群と推定される。

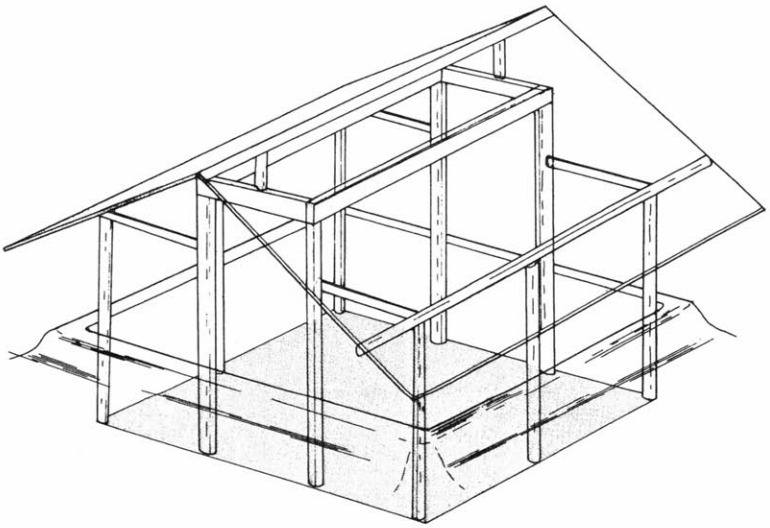
第41図　石製分銅（石錘）の諸例

次に、室橋遺跡の調査では、弥生時代から平安時代にかけての遺構を南北約500mにわたる広い範囲で確認し、室橋遺跡が長期にわたって営まれた大規模な複合集落遺跡となることを確認した。北部調査地点の１区では、弥生時代後期～古墳時代初頭と推定される溝

ＳＤ120を、また２区でも最終的な埋没が古墳時代前期前葉とみられる断面Ｖ字形の大溝ＳＤ230が検出され、弥生～古墳時代前期と推定される２条の大規模な溝が掘削されていることが判明した。溝ＳＤ120と溝ＳＤ230は、一部を確認したにすぎないが、溝の規模や断面形、さらに埋土の堆積状況が異なり、現状では同一の溝とみるに足る資料は得られておらず、その評価については今後の調査の進展を待ちたい。これまでの調査成果では、溝の西側の低地部で弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は検出されていないことから、東の微高地から諸木山の山麓部を中心に集落が展開するとみられ、溝ＳＤ120・230は集落の縁辺部に掘削された大溝と推定される。

南部調査地点の８区では、弥生時代中期の溝１条のほか、古墳時代中期から後期の竪穴式住居跡群を検出した。弥生時代中期の溝をはじめて検出し、周辺において中期集落の存在をうかがわせる資料となった。また古墳時代中期の集落は、北部の第４次調査や南部の第７次調査でも古墳時代中期の住居跡群が検出され、古墳時代中期～後期にかけて、新たな開発が進み、集落規模が急激に拡大することが判明した。

歴史時代の遺構群は、北部調査地点で奈良時代の掘立柱建物跡、工房とみられる建物跡や、平安時代の溝などを検出した。工房とみられる建物跡は、２間×３間の柱構造をもち、その床面に竪穴状の掘形を伴う特殊な構造で、床面を土間にした掘立柱建物跡と推定される。こうした竪穴を伴い、半地下式の構造をもつ掘立柱建物は、近年、福井県の興道寺遺跡などでも検出され[注7]、工房的な建物跡とされる。今回検出した建物跡は桁行の中央１間分の柱は、規模が大きく深く掘削されていることから、梁間を３間の柱列におき、大形の柱材を用い、主屋を高く保つ工夫がなされていたと考えられる[注8]（第42図）。焼成等の作業に適した建物構造を有することに加えて、白色粘土やわずかながら鉄滓やガラス質の融着物などが出土していることから、手業品にかかわる工房的な建物と推定される。この建物では複数の手工業品が製作されていたと考えられるが、土壌洗浄では土坑内の埋土を中心に洗浄したが鍛造剥片などは出土していない。出土遺物には漁撈具の管状土錘があり、焼成不良のものを含むことや、小粘土塊でまとめられた白色粘土が出土していることから、これらの製作・焼成も行われていたとみられる。従来、基本的には使用者が製作したと考えられていた簡易な手工業品をも工房で専業的に製作している点は、社会的分業の進展を考える上でも注目されよう。



第42図　建物跡ＳＢ220主柱穴の柱構造推定復原図

室橋遺跡の今回の調査で

は、北部調査地点で溝、南部調査地点で平安時代の建物跡や溝を検出したが、いずれも大規模なものではない。室橋遺跡や野条遺跡の立地する八木町東部は、平安時代の伝承が多く残されている地域である。この一帯はもと清和源氏の所領であったものが、平家の知行を経て、丹波国知行国主であった藤原成親の私領となったとされる。成親は、承安四年(1174年)に私領宇都郷に周辺５郷を加え、後白河院法華堂に寄進し、この時に「丹波国吉冨庄絵図写」の原図が描かれたという。この立荘時に加えられた５郷が吉冨新荘と呼ばれ、野条遺跡・室橋遺跡を含む八木町はほぼ全域が新荘とされた。(注9) 12世紀後半～末には後白河院から神護寺に寄進され、神護寺を再興した文覚の主導により文治四年(1188年)に新庄用水に繋がる灌漑用水が引かれたという。このように野条・室橋周辺の荘務権は12世紀に目まぐるしく変化し、遺構群の歴史的な評価を考えるうえで、検出遺構の詳細な時期の検討が必要となっている。室橋遺跡で過去に調査された大規模な溝は平安時代前期の９世紀に帰属するが、吉冨新荘として立荘される以前には国衙領とみられており(10)、受領や在庁官人による国衙支配の強化のなかで、灌漑用水の整備が行われたものとみられる。平安時代後期～末期の大規模な溝は検出されておらず、文覚が引いたという灌漑用水に該当する溝はこれまでの調査では確認されていない。一方、野条遺跡の調査では８世紀後半に小規模な灌漑用水がみられ、11世紀後半に広い範囲で灌漑用水を整備していることが判明した。室橋遺跡・野条遺跡一帯では12世紀前半に行われた条里型地割の施工に伴う大規模開発に先行して、何段階かの灌漑用水の整備があったと推定される。今回の調査では、12世紀前半の一帯の開発が、奈良時代以来の地割の改変を伴う大規模なものであることが判明した。11世紀から12世紀には、各地で条里型地割の整備あるいは再施工が行われていること明らかにされているが、この地域にあっても全国的にみられる国衙領の拡大や荘園経営の活発化の動きと連動し、受領や在地領主による管理支配が急速に拡大したものとみられる。

(高野陽子)

注１　調査参加者は以下のとおりである(敬称略、順不同)

**作業員**　松本孝子・西垣久江・松本敏子・三觜均・松本安治・山本千代子・松倉和美・浅田あさの・明田弘之・三村保彦・川勝千代・笠浪恒正・麻田昇司・岡崎博信・大内亨・宅間文治・八木辰男・松本拓・浅田博・齋藤優子・平井美登里・桑原芳郎・国府京子・松本幸男・西田恵美子

**補助員**　天池佐栄子・宮城一木・大沢彩子・草薙大蔵・杉江貴宏・出畑歩美・國府恵利・中川慎也・広瀬慶典・松本亨太・野中洋志・松本景太・高屋敦史・桂啓輔・松岡利昌・小森太賀・長谷川託布・中田魔可也・古座昭宏・高屋敦史

**整理員**　松下道子・春日満子・井上聡・藤井矢壽子・稲垣あや子・天池佐栄子・草薙大蔵・出畑歩美・國府恵利

注２　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』４)1978

注３　西広海「土器」『平城宮発掘調査報告』Ⅶ　奈良国立文化財研究所　1976
巽淳一郎「土器」『平城宮発掘調査報告』XIII　奈良国立文化財研究所　1991

注４　宮本佐知子「国内出土の権衡資料」（『大阪市文化財論集』　大阪市文化財協会）　1994

注５　八木町北東部の一帯では、昭和初期に耕作地の区画整理が行われた記録が残るが規模は明らかでなく、元の大畦畔を利用する形で進められたのではないかとされる。また、現地では当センター理事高橋誠一先生に現地指導を頂き、大字の境が条里の里境と対応すると考えられる場合、古い地割を遺存している可能性が高いとのご教示を得た。調査地南西でみられる官山川のＬ字の屈曲ラインは、これを境に南東を諸畑、北西を室橋、南を野条としており、大字の境界に一致し、古い地割を残しているとみられる。

注６　平安時代の度量衡は、唐制にならったとされる大宝律令以来、大きな変化はなく基本的に同様であったと考えられており、魏の衡の基準である大両41.3cmを基準としているとされる（前掲注４文献）。錘は、定量であれば分銅とされ、基本的に天秤ばかりに用いる秤量具とされる。日本出土の古代の錘には定量とみられるものがあり、天秤ばかりの使用の可能性があるとされるが、天秤ばかりの出土は17世紀以降に下り、絵巻物などにも天秤は描かれていないという問題が指摘されている。しかしながら発掘調査例にはほぼ定量とみなして分銅と報告されているものが多く、棹に分銅をつけた可能性がある事例もみられることから、今回の資料も分銅として報告した。

注７　美浜町教育委員会『興道寺廃寺と興道寺遺跡　―古代若狭のテラとムラそしてシオ―』　2006

注８　建物跡の柱構造の復原については、京都府教育委員会文化財保護課小宮睦氏、同森下衛氏のご教示を得た。また建物跡の構造復元に加え、類例などについて、当センター理事石野博信先生のご指導・ご教示を得た。

注９　吉冨荘と南丹地域をめぐる古代から中世にかけての問題は以下の文献に詳しい。特に上島亨氏は、丹波国府について詳しく論究され、これまで有力な推定地であった亀岡市千代川町拝田と八木町屋賀から亀岡市池尻周辺について、当初から一貫して丹波国府は後者にあったとされる。近年、池尻周辺の発掘調査では、官衙関連遺構の可能性がある奈良時代の大形掘立柱建物跡群が検出されている。

仲村研「丹波国吉冨庄の古絵図について」（『史朋』２号）　1963

飯沼賢司「丹波国吉冨荘と絵図」（『民衆史研究』第30号）　1986

上島亨「池上院と神護寺・丹波国府－新史料の紹介と僧皇慶の活動をめぐって」（『郷土誌八木』第10号）　2000　上島亨「丹波国府と吉冨荘」（『京都と京街道―京都・丹波・丹後―』）　2002

注10　前掲注９上島論文

福島孝行「室橋遺跡第６次調査」（『京都府埋蔵文化財調査報告書』（平成18年度）　京都府教育委員会）　2007

# 図　　版

(1)野条遺跡調査地全景(北西から)

(2)野条遺跡調査地全景(南東から)

(1)野条遺跡１区全景(上が南西)

(2)野条遺跡１区北部全景(上が南西)

(1)野条遺跡調査前全景
（南東から）

(2)野条遺跡１区東壁土層断面

(3)野条遺跡２区東壁土層断面

(1)野条遺跡１区北部全景(第10次調査、南東から)

(2)野条遺跡１区北部全景(第12次調査、南東から)

(1)野条遺跡１区北部掘立柱建物跡群(南から)

(2)野条遺跡１区溝ＳＤ１(北東から)

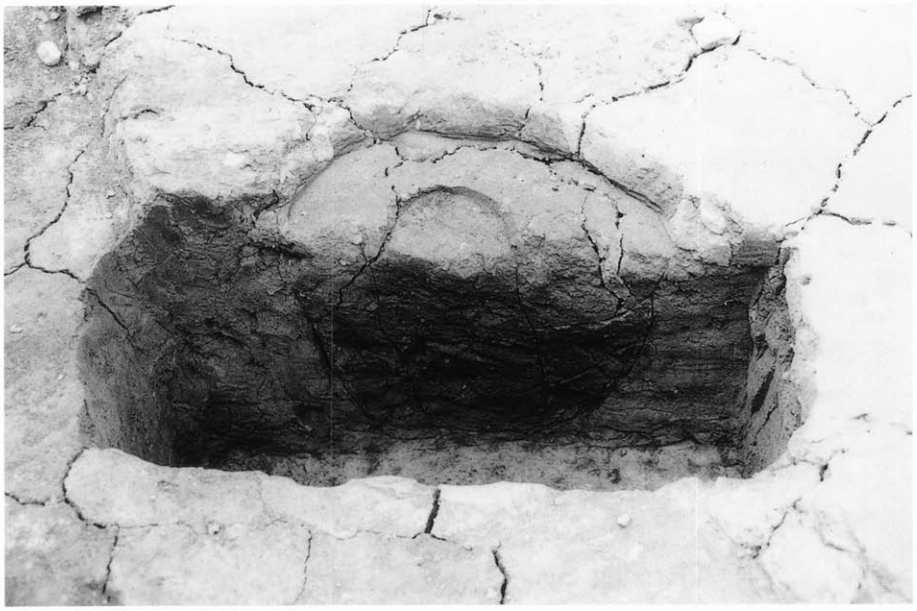
(1)野条遺跡１区全景(北西から)

(2)野条遺跡１区
掘立柱建物跡ＳＢ11(南から)

(3)野条遺跡１区
掘立柱建物跡ＳＢ51(北西から)

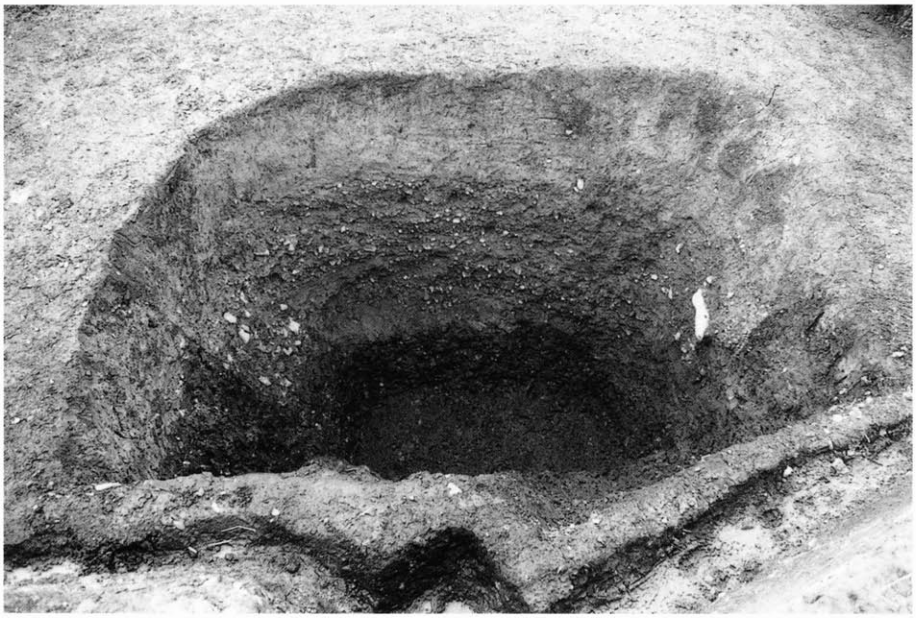
(1)野条遺跡１区掘立柱建物跡
ＳＢ12柱穴Ｐ62(南東から)

(2)野条遺跡１区掘立柱建物跡
ＳＢ12柱穴Ｐ65(北東から)



(3)野条遺跡１区掘立柱建物跡
ＳＢ11柱穴Ｐ57土層断面
(東から)

(1)野条遺跡１区井戸ＳＥ３
（西から）



(2)野条遺跡１区井戸ＳＥ３
（東から）

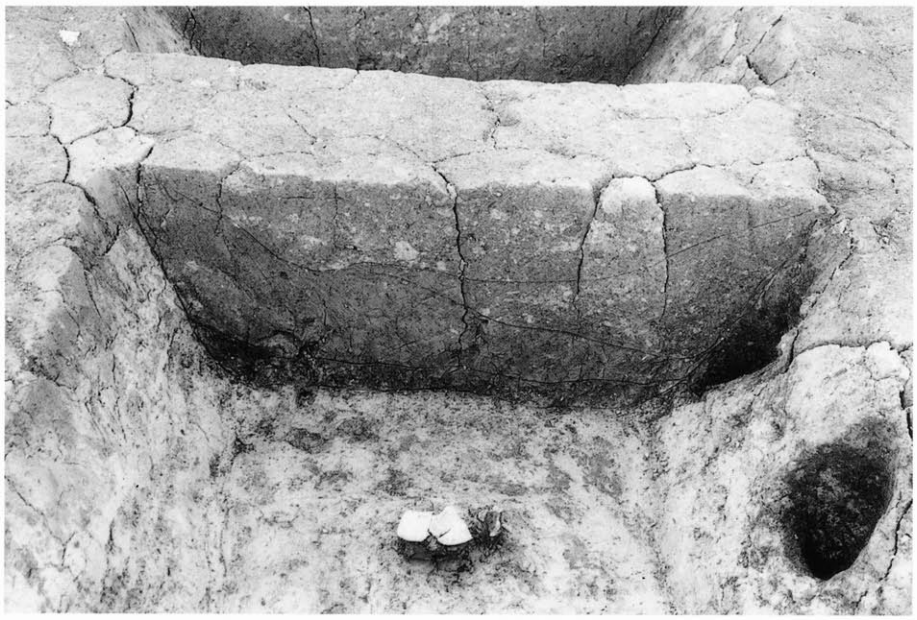
(3)野条遺跡１区落ち込みＳＸ５
（北西から）

(1)野条遺跡１区溝ＳＤ１
遺物出土状況
（第10次調査、西から）

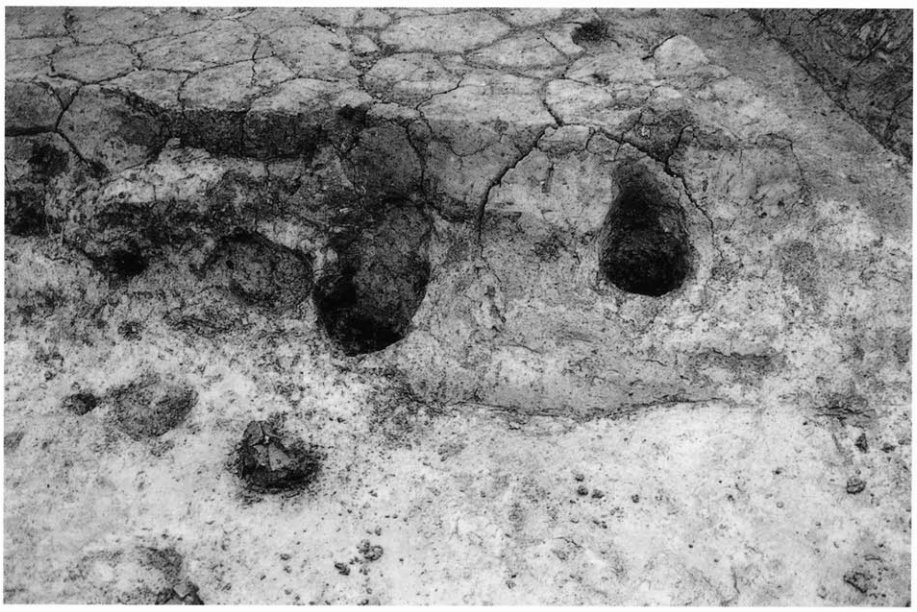
(2)野条遺跡１区溝ＳＤ１
土層断面（第10次調査、西から）

(3)野条遺跡１区北部完掘後全景
（第10次調査、南東から）

(1)野条遺跡１区溝ＳＤ１
（第12次調査、北東から）



(2)野条遺跡１区溝ＳＤ１
土層断面
（第12次調査、東から）

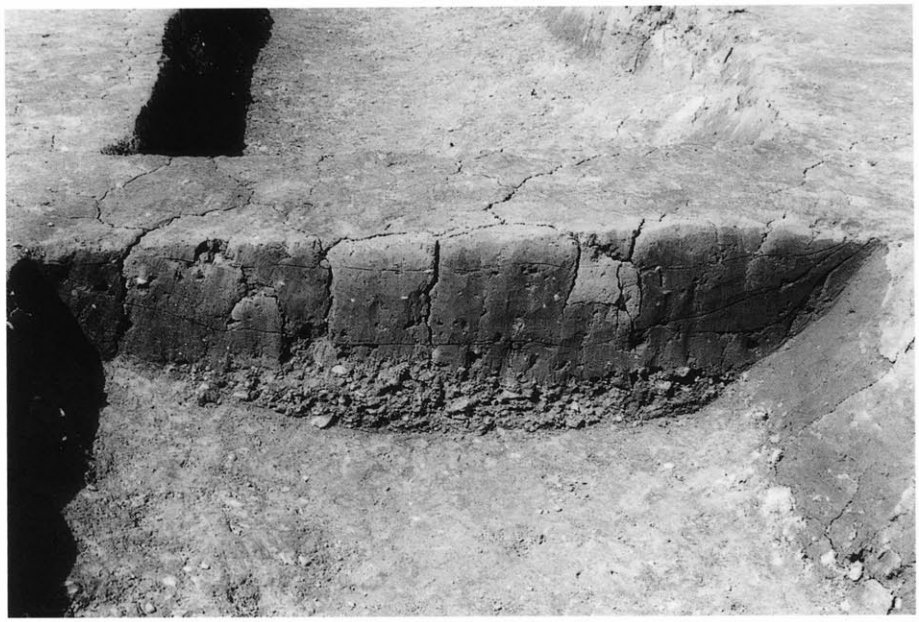


(3)野条遺跡１区溝ＳＤ１
柱穴検出状況
（第12次調査、南から）

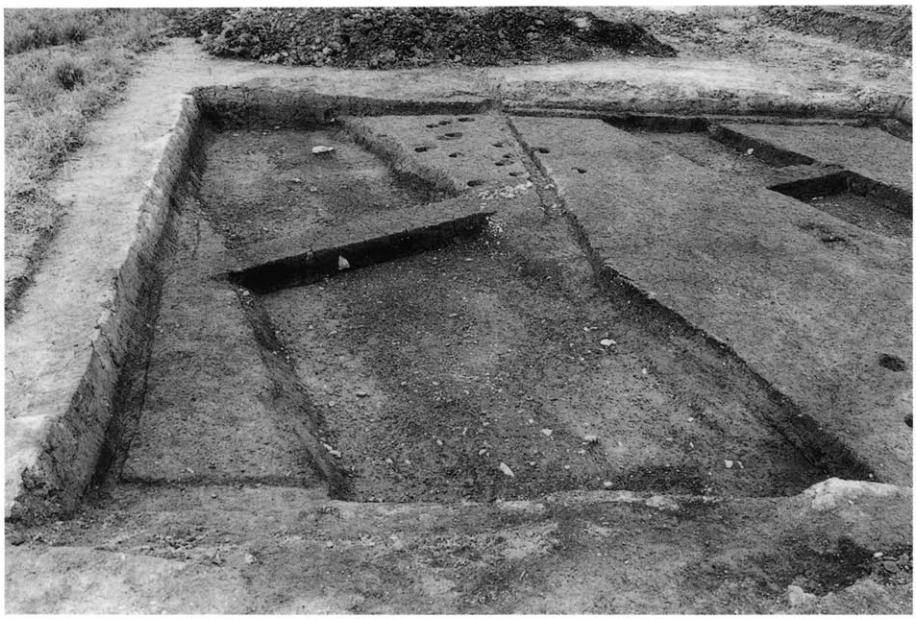
(1)野条遺跡調査地北部全景
（上が南西）

(2)野条遺跡２区全景
（第12次調査、南から）

(3)野条遺跡２区溝ＳＤ208
（南東から）



(1)野条遺跡２区溝ＳＤ208
土層断面(南東から)



(2)野条遺跡２区溝ＳＤ201
(南から)

(3)野条遺跡２区溝ＳＤ201
土層断面(南東から)

(1)野条遺跡３区全景(南東から)

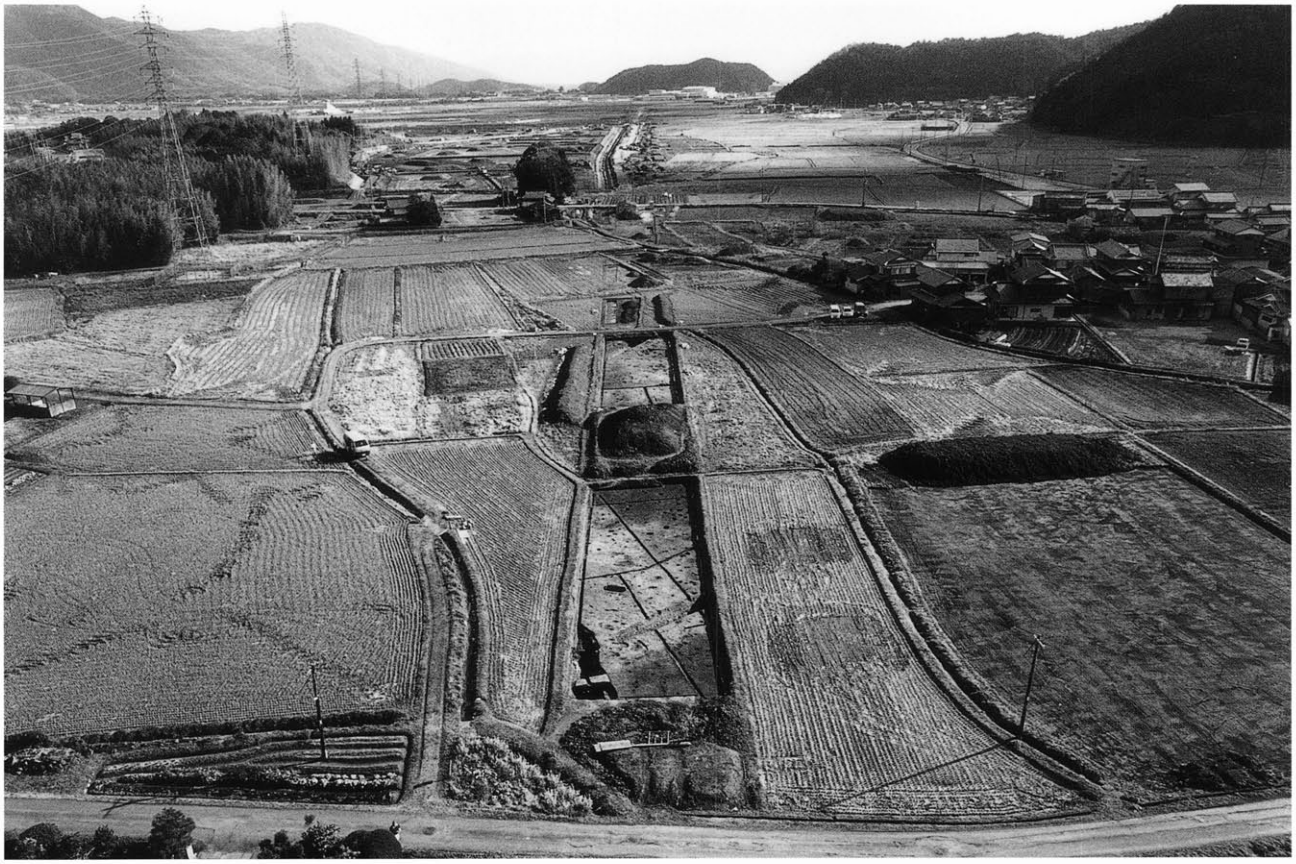
(2)野条遺跡４区全景(南東から)

(3)野条遺跡４区東壁土層断面

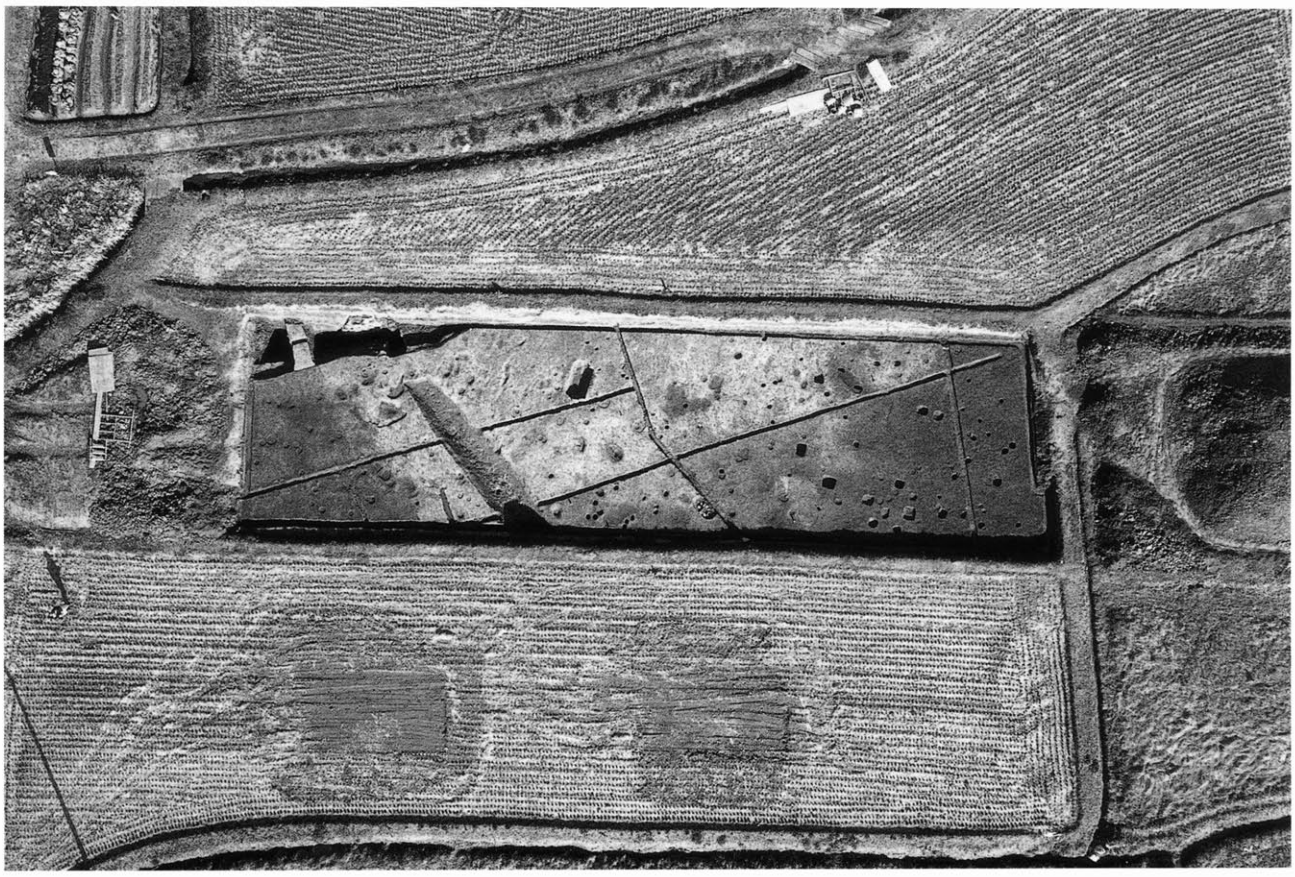
(1)室橋遺跡遠景(南東から)

(2)室橋遺跡調査地北部全景(北東から)

(1)室橋遺跡調査地北部全景(南東から)



(2)室橋遺跡調査地北部全景(北西から)



(1)室橋遺跡１区全景(上が北東)

(2)室橋遺跡２区全景(南西から)

(1)室橋遺跡北部調査前全景
（北西から）

(2)室橋遺跡１区東壁土層断面

(3)室橋遺跡２区東壁土層断面

(1)室橋遺跡１区全景(北西から)

(2)室橋遺跡２区全景(南東から)

(1)室橋遺跡１区溝ＳＤ120
（南東から）

(2)室橋遺跡１区溝ＳＤ120
（北西から）

(3)室橋遺跡１区溝ＳＤ120
土層断面（北西から）

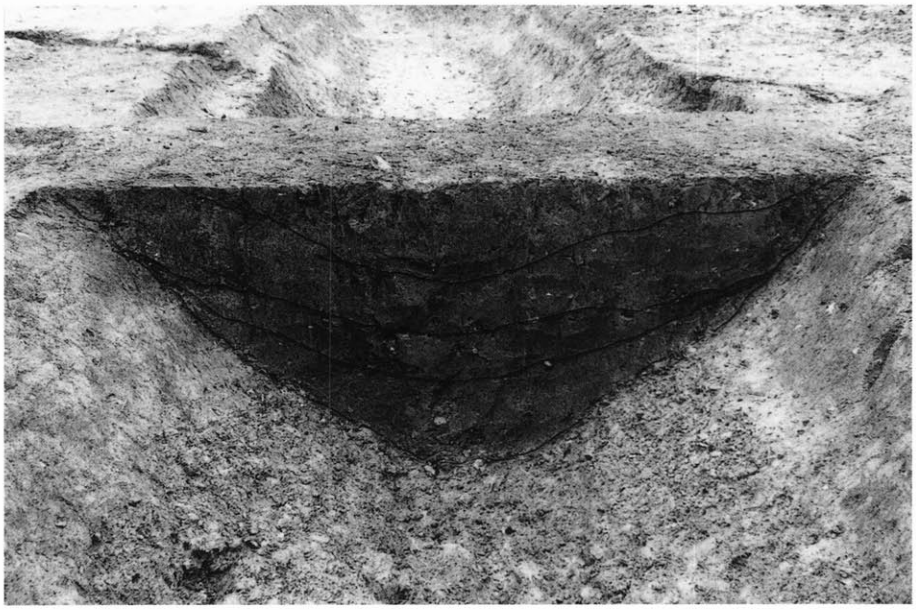
(1)室橋遺跡１区全景(南東から)

(2)室橋遺跡１区掘立柱建物跡
ＳＢ101(南東から)

(3)室橋遺跡１区掘立柱建物跡
ＳＢ101柱穴Ｐ23(東から)

(1)室橋遺跡１区南部柱穴群
検出状況(北東から)

(2)室橋遺跡１区溝ＳＤ110
検出状況(南西から)



(3)室橋遺跡１区溝ＳＤ110
土層断面(南西から)

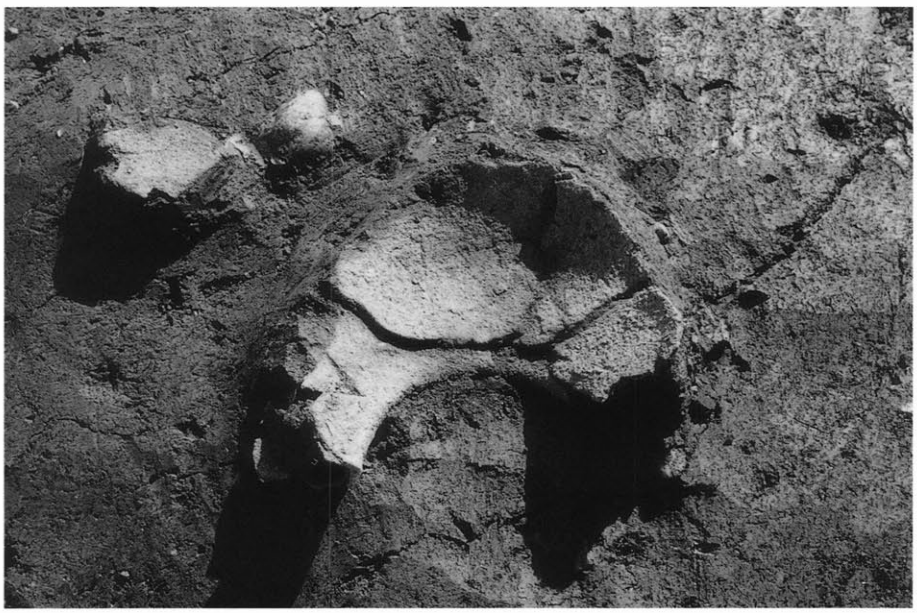
(1)室橋遺跡２区全景(北西から)

(2)室橋遺跡２区全景(南東から)

(3)室橋遺跡２区溝ＳＤ120
掘削風景(北東から)

(1)室橋遺跡２区溝ＳＤ230
土層断面(南から)

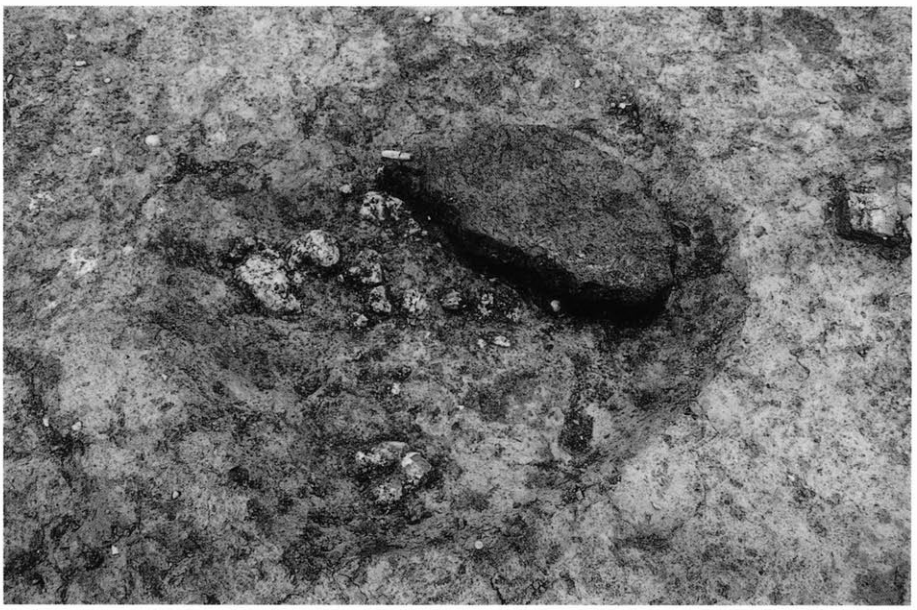
(2)室橋遺跡２区溝ＳＤ230
(南東から)



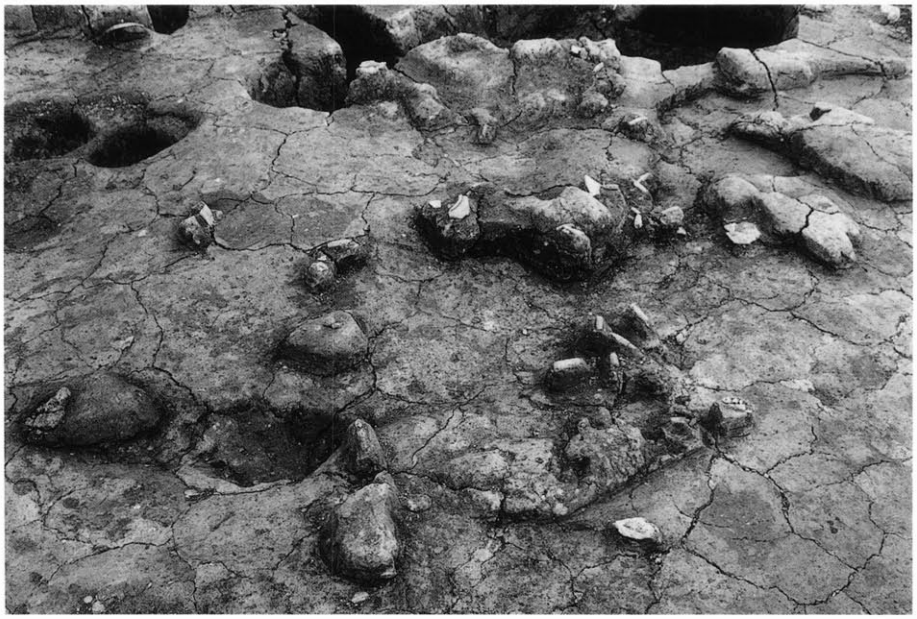
(3)室橋遺跡２区溝ＳＤ230
上層土器出土状況(上が南)

(1)室橋遺跡２区建物跡ＳＢ220
（西から）

(2)室橋遺跡２区建物跡ＳＢ220
土坑群検出状況（西から）



(3)室橋遺跡２区建物跡ＳＢ220
土坑Ｋ１（南西から）



(1)室橋遺跡２区建物跡ＳＢ220
土錘出土状況(西から)

(2)室橋遺跡２区建物跡ＳＢ220
鉄滓出土状況(北西から)

(3)室橋遺跡２区南部柱穴群
検出状況(南東から)

(1)室橋遺跡南部調査前全景(南東から)

(2)室橋遺跡８区北部全景(上が南西)

(1)室橋遺跡７・８区全景
（北東から）

(2)室橋遺跡７区全景（南東から）

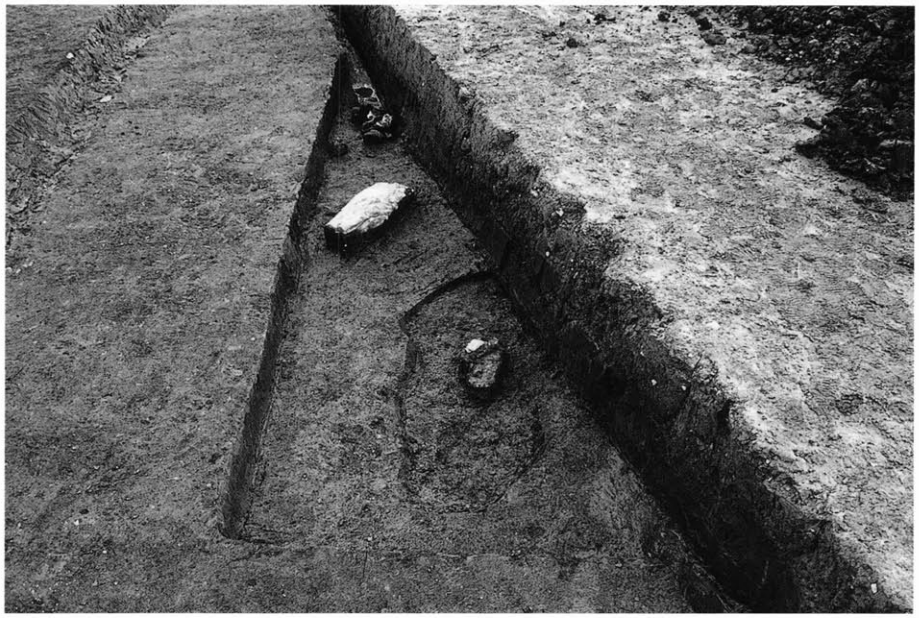
(3)室橋遺跡８区土層断面
（北西から）

(1)室橋遺跡８区下層遺構
完掘状況(北西から)

(2)室橋遺跡８区溝ＳＤ813
(南東から)

(3)室橋遺跡８区溝ＳＤ813
(南東から)

(1)室橋遺跡８区上層遺構
検出状況(北西から)



(2)室橋遺跡８区竪穴式住居跡
ＳＨ802(北西から)

(3)室橋遺跡８区竪穴式住居跡
ＳＨ807(北東から)

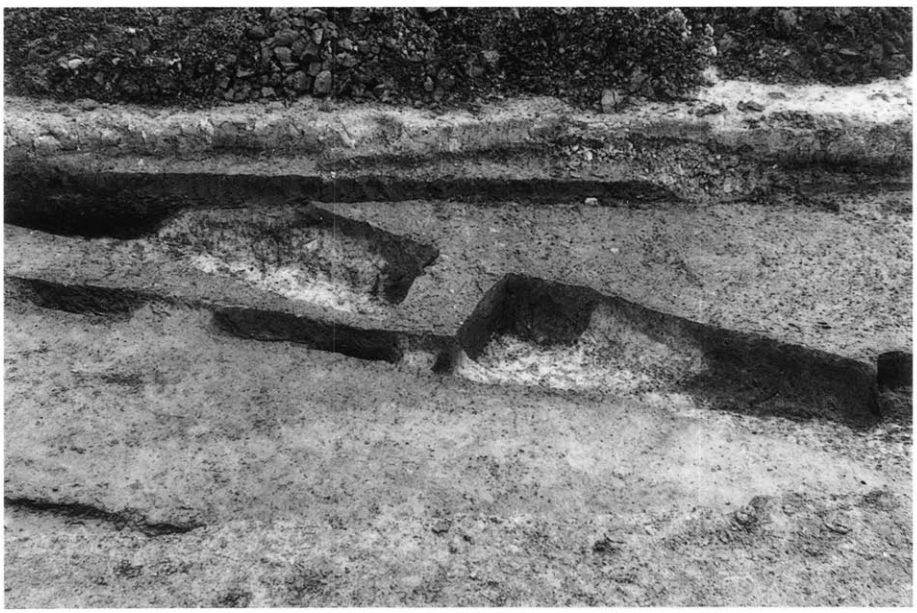
(1)室橋遺跡８区竪穴式住居跡
ＳＨ805(北東から)

(2)室橋遺跡８区竪穴式住居跡
ＳＨ805土器出土状況
(南西から)

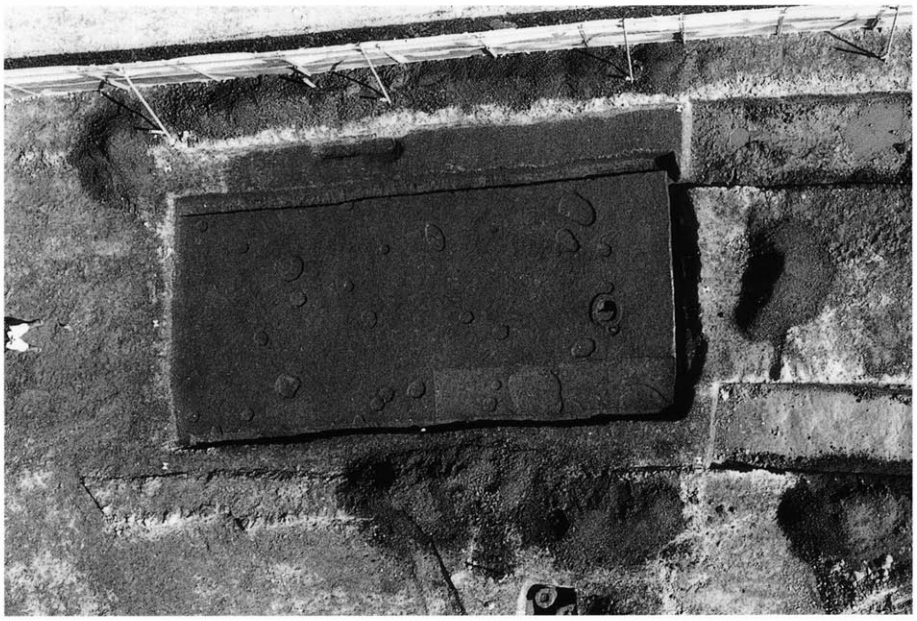
(3)室橋遺跡８区竪穴式住居跡
ＳＨ806(北東から)

(1)室橋遺跡８区竪穴式住居跡
ＳＨ804(東から)

(2)室橋遺跡８区竪穴式住居跡
ＳＨ804竈(南東から)



(3)室橋遺跡８区溝ＳＤ803
(南西から)



(1)室橋遺跡９区全景(上が北東)

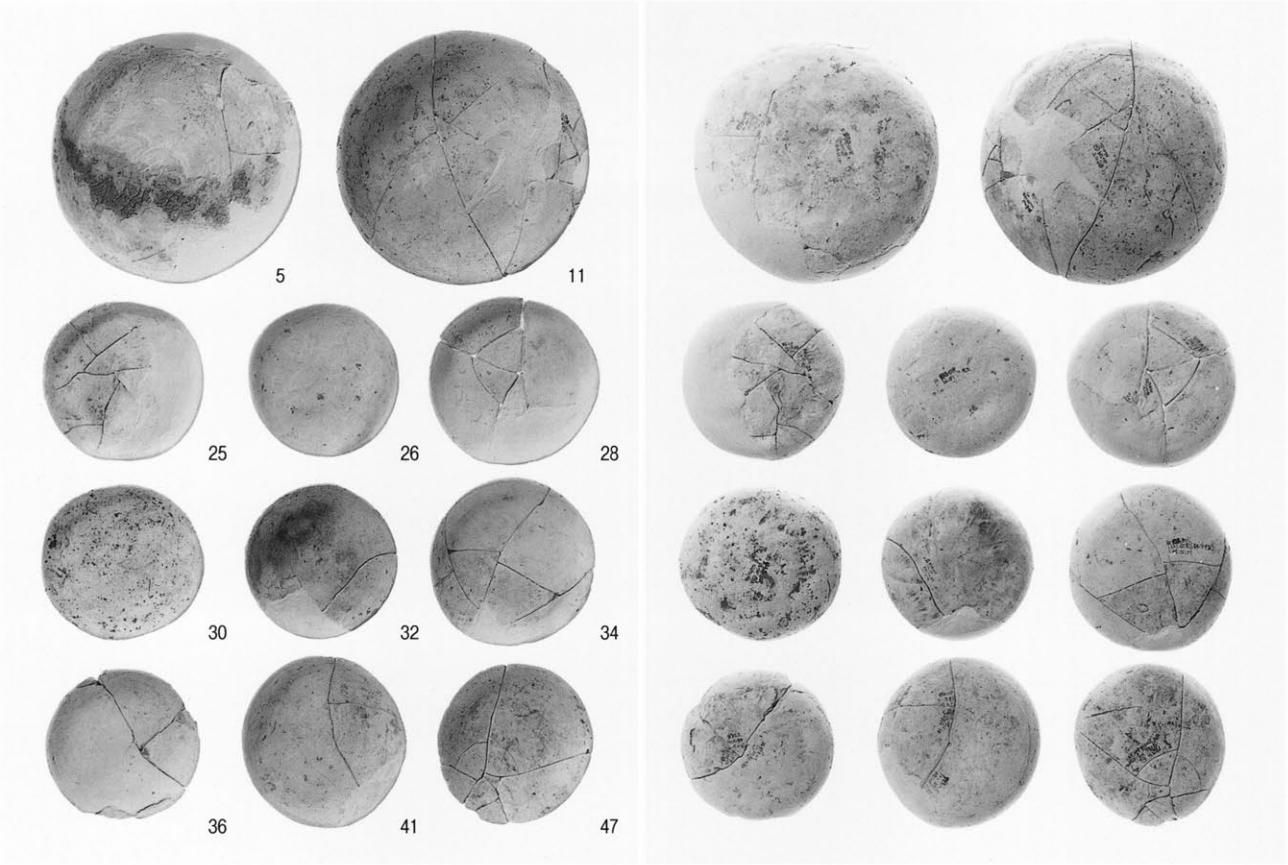
(2)室橋遺跡９区全景(南東から)

(3)室橋遺跡３区全景
(試掘、南東から)

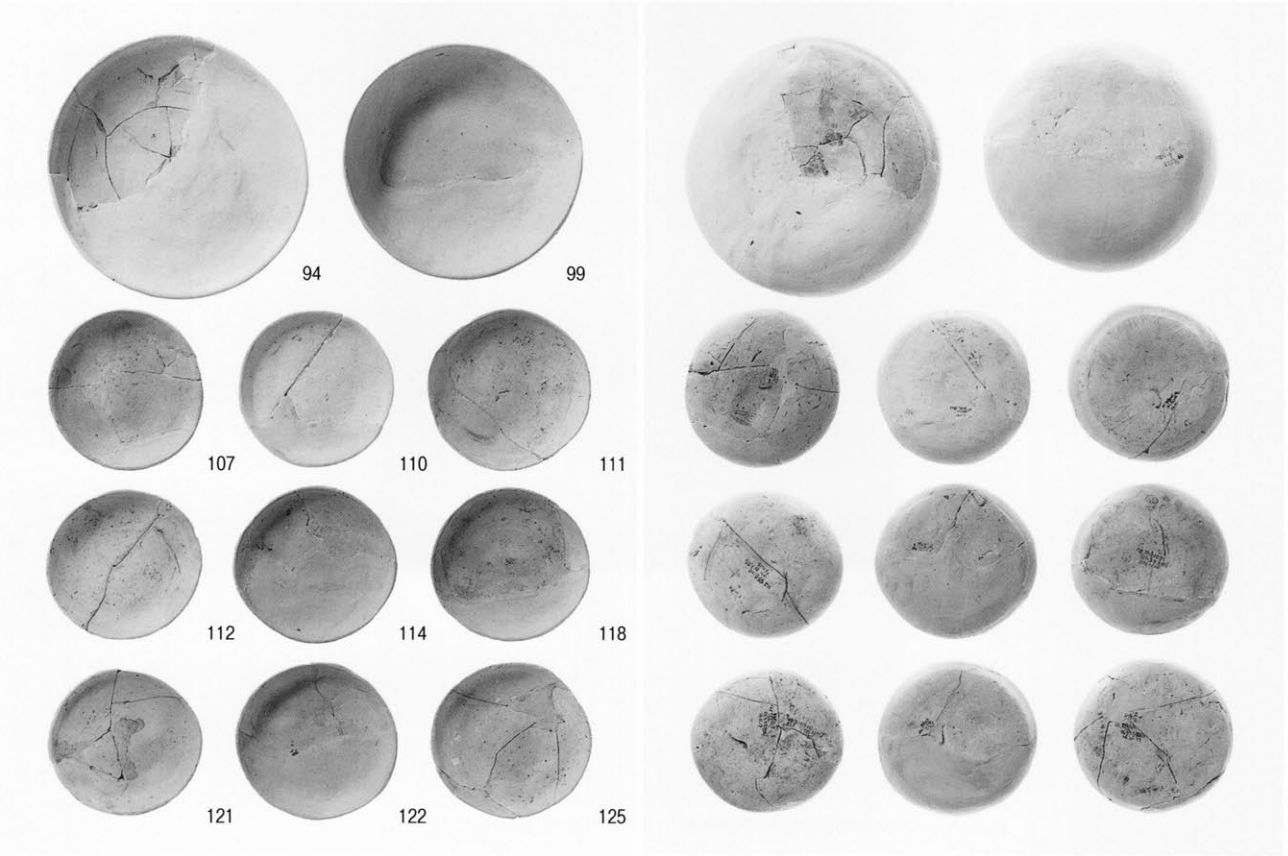
(1)室橋遺跡４区全景
（試掘、北西から）

(2)室橋遺跡５区全景
（試掘、南西から）

(3)室橋遺跡６区全景
（試掘、南東から）




(1)野条遺跡出土遺物１（１区溝ＳＤ１出土土器）




(2)野条遺跡出土遺物２（１区井戸ＳＥ３出土土器）

77

134

4

50

51

53

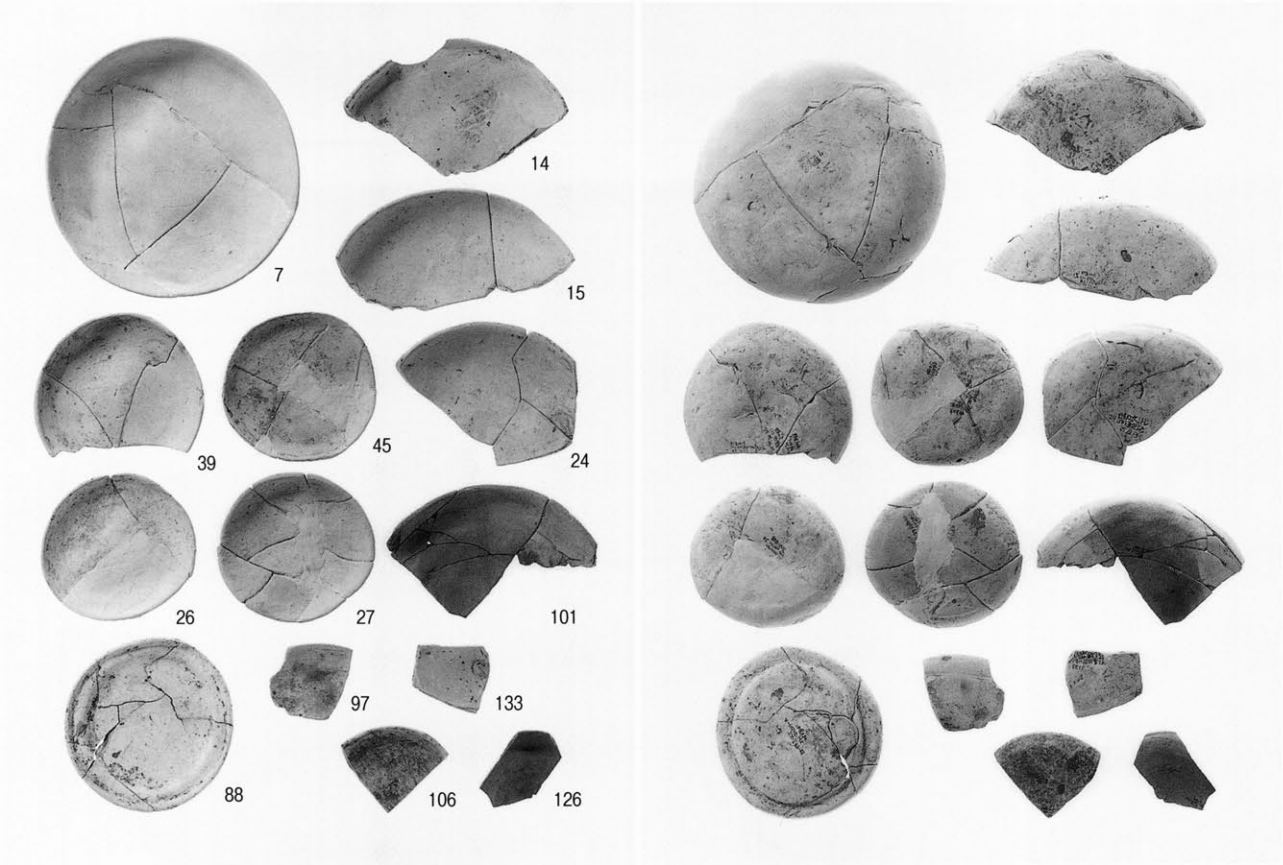
56

138

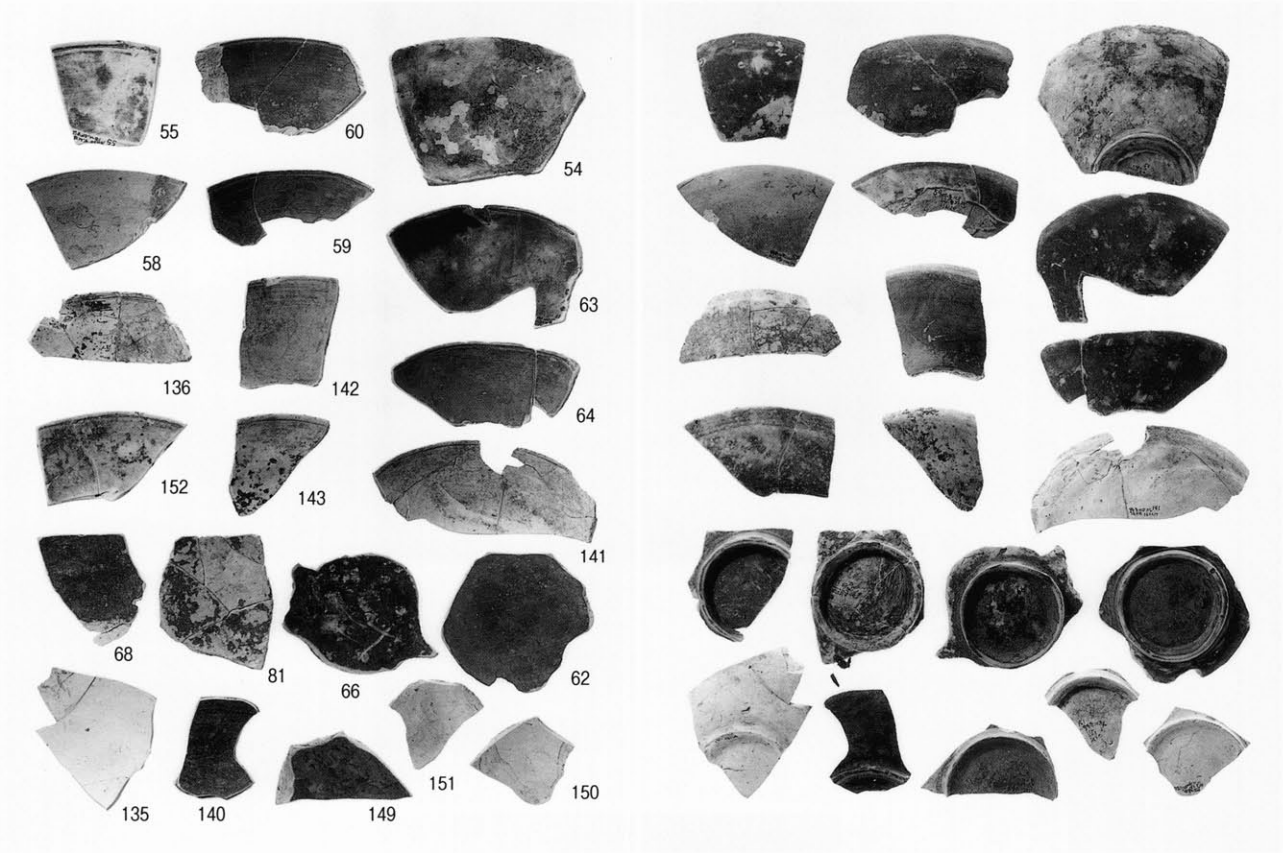
52

57

野条遺跡出土遺物３（１区溝ＳＤ１出土土器）




(1)野条遺跡出土遺物４



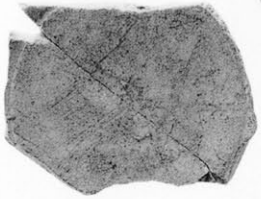

(2)野条遺跡出土遺物５

1

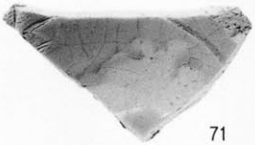
73

65

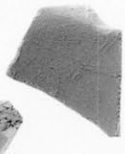
69



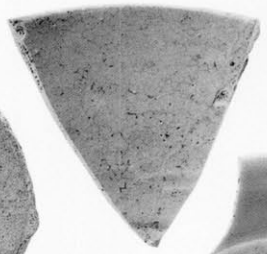
72



71



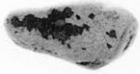
70



153

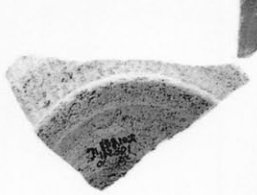
154

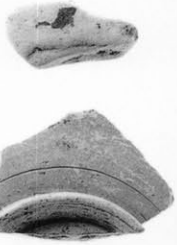
86

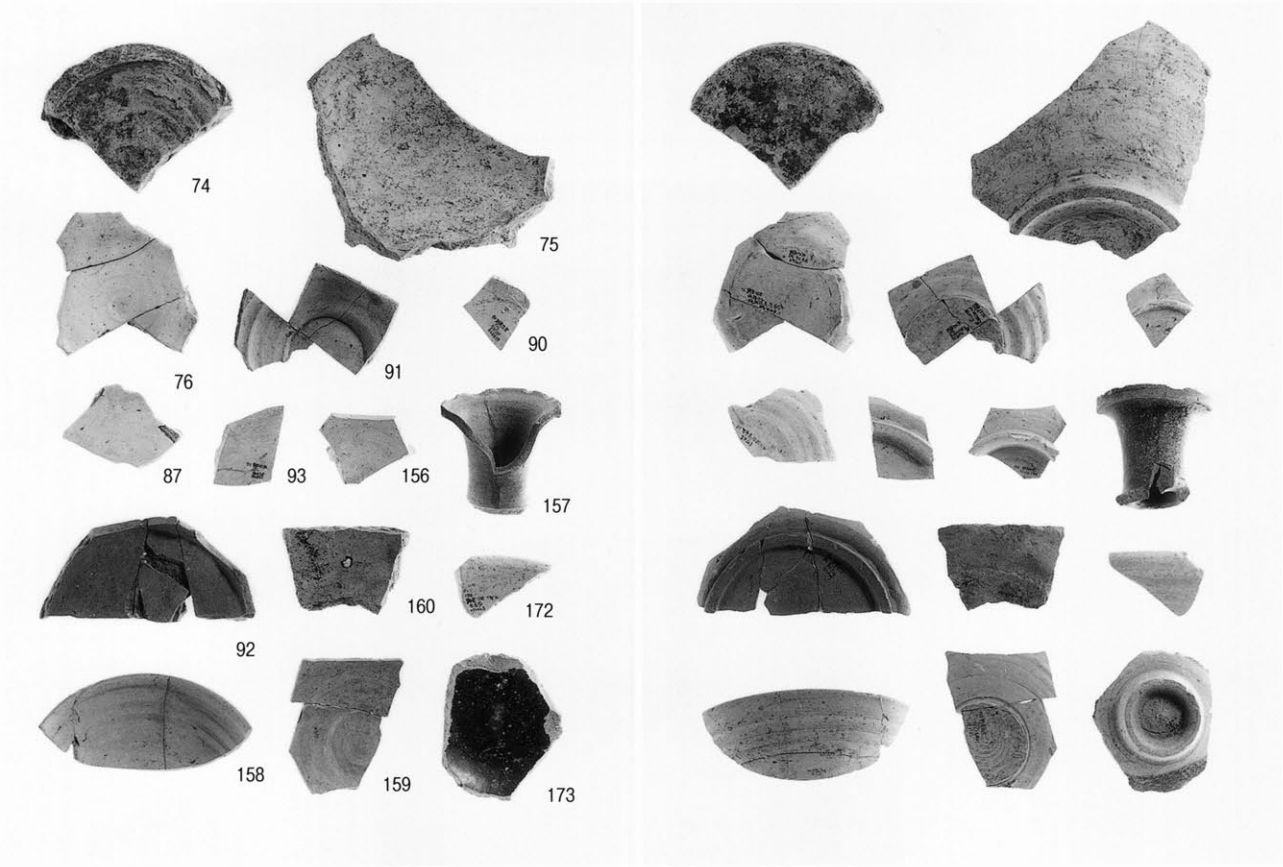


155

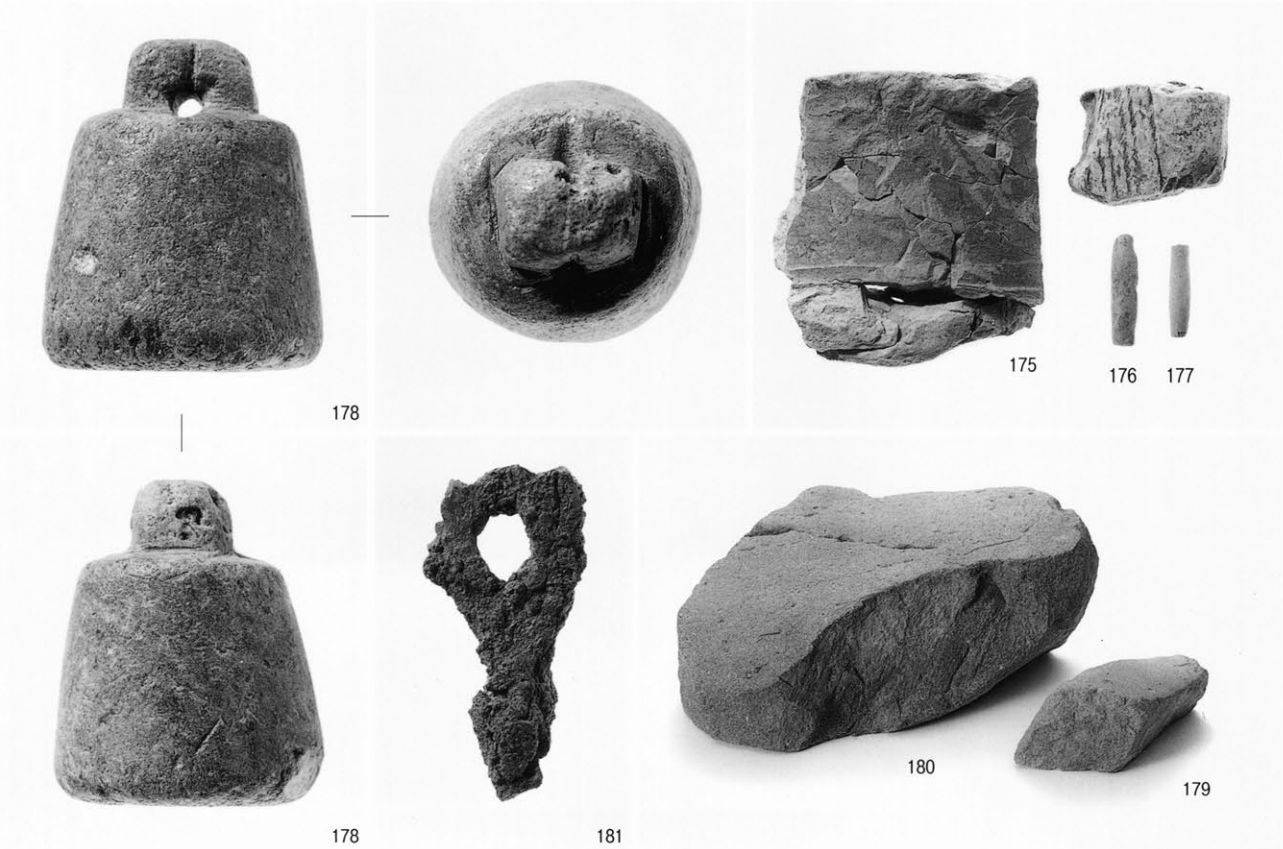
89



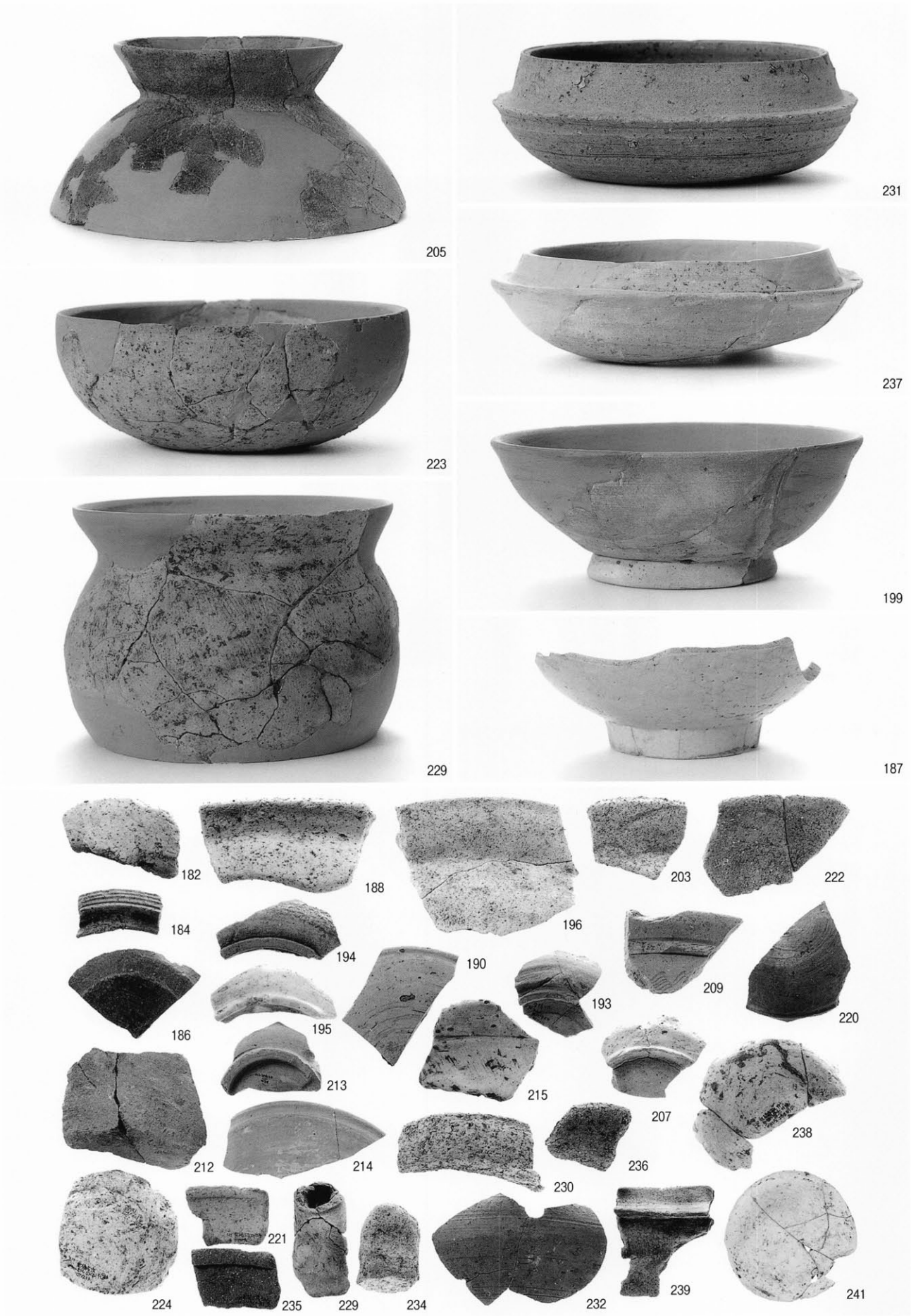




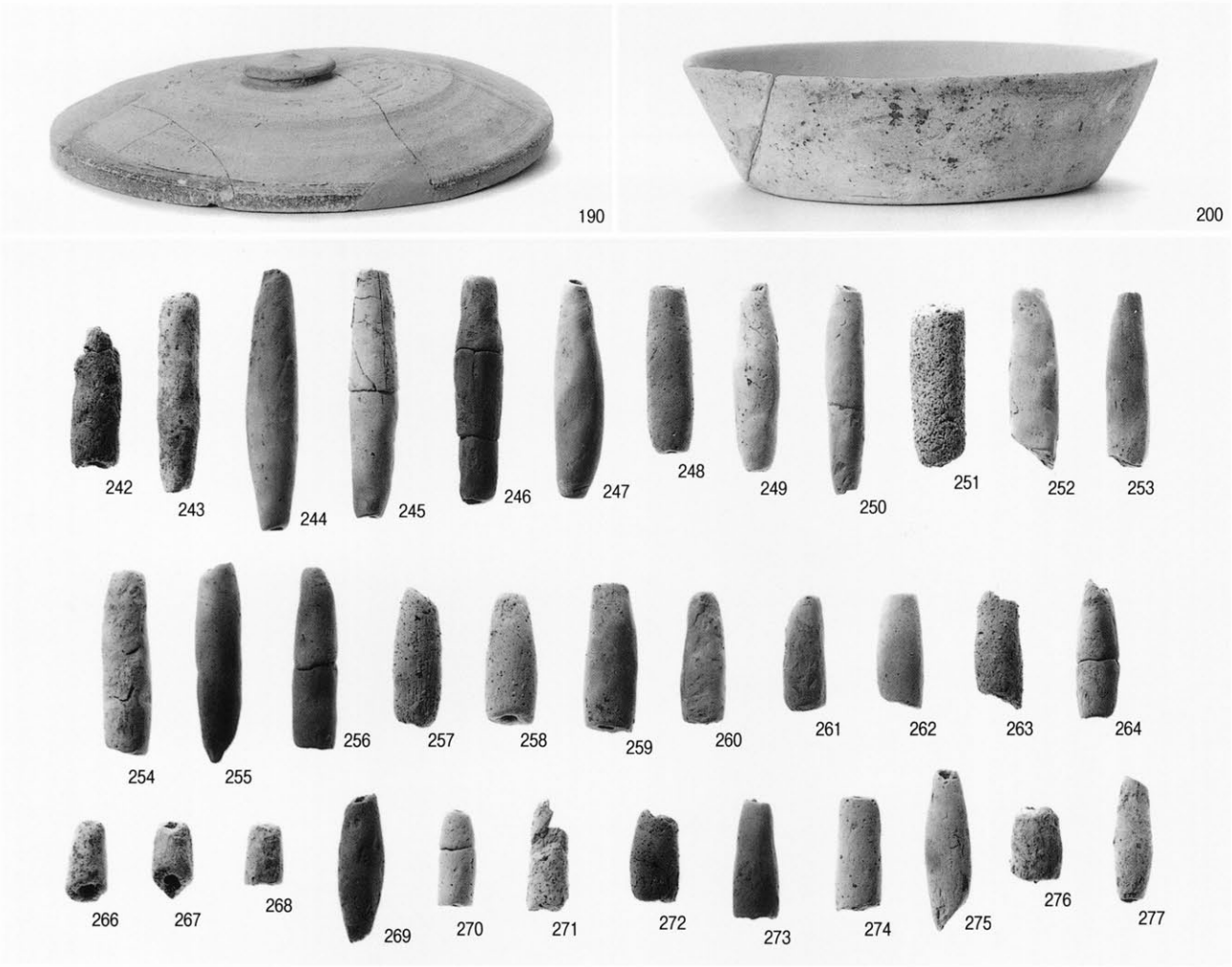

(1)野条遺跡出土遺物７



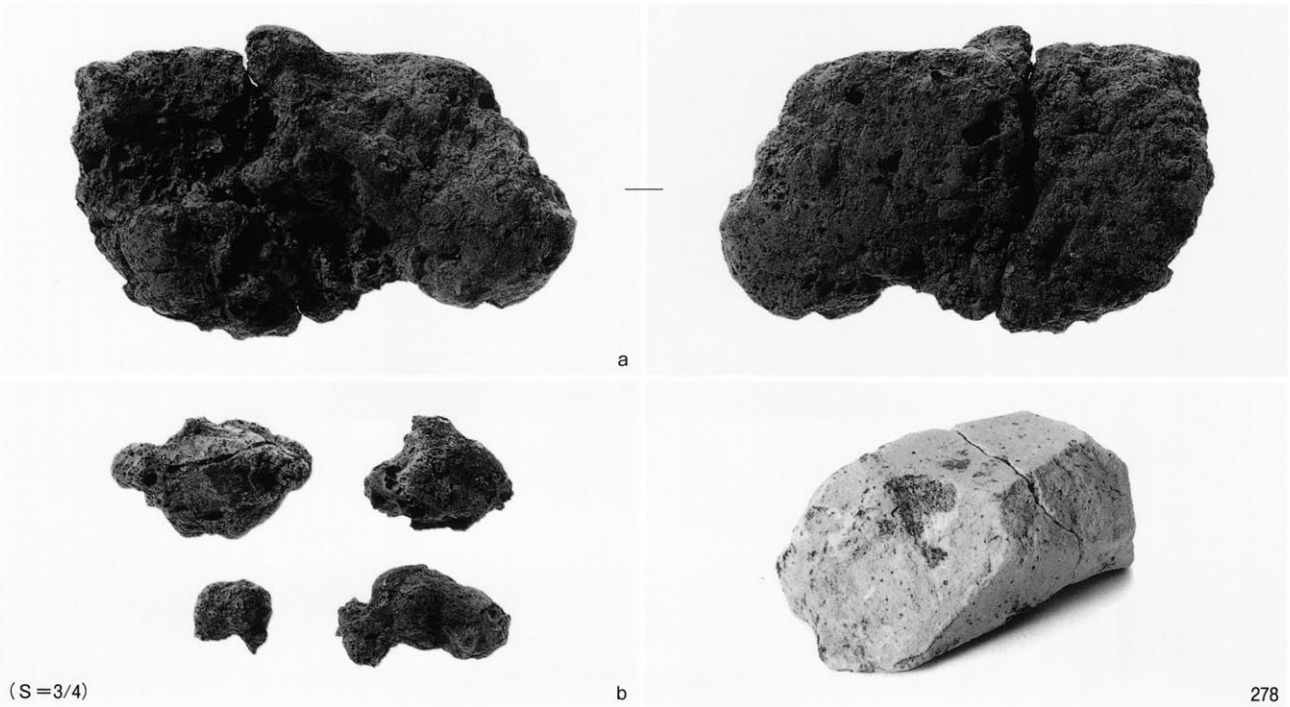

(2)野条遺跡出土遺物８


205
231
237
223
199
229
187
182
188
196
203
222
184
194
190
209
186
195
193
220
213
215
207
238
212
214
236
230
221
224
235
229
234
232
239
241

室橋遺跡出土遺物１




(1)室橋遺跡出土遺物２（２区建物跡ＳＢ220出土土器・土錘）




(2)室橋遺跡出土遺物３（２区建物跡ＳＢ220出土鉄滓・鉱滓・砥石等）